本村古墳群・本村遺跡

（ほんむら）（ほんむら）

―正富福祉会特別養護老人ホーム「憩いの森西原」建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書―

平成19年３月

宇都宮市教育委員会

調査区全景空撮　北から

埴輪棺確認状況　西から

序

本遺跡は，戦前より弥生時代後期の遺跡として広く紹介されていました「東河田遺跡」に相当する位置にあります。弥生時代の遺跡が非常に少ない本市において，古くより弥生式土器や土製紡錘車の出土が報告される当地は，極めて貴重な遺跡であります。

過去に本市では，平成６年から５次にわたり，都市計画道路3･3･105（産業通り）の建設にともない発掘調査を実施しています。調査の結果，弥生時代後期の集落跡が確認され，古墳時代中期の円墳の埋葬施設からは，本市では発見例のきわめて少ない銅鏡を始めとする豊富な出土物を確認することができました。また，古墳に伴う大量の円筒埴輪と人物埴輪・馬形埴輪の存在や，それらを利用して周囲に造営された埴輪棺群も確認されました。

今回の調査は，特別養護老人ホームの建設にともない実施したものです。当該施設の建設に先立ち，埋蔵文化財の取り扱いについて，事業者と工事の影響を最小限にするよう協議をいたしましたが，開発が避けられない部分に関して，記録保存を目的とした発掘調査を実施しました。今回の調査によりまして，弥生時代の住居跡や古墳の周溝，埴輪棺が確認されるなど，当時の人々の埋葬理念や他界観を知るうえで非常に貴重な資料が得ることができたものと考えております。

当市及び教育委員会といたしましては，埋もれた郷土の歴史の一端を発掘調査によって掘り起こし，宇都宮の新たな歴史の一頁として書き加えられるよう，努力を積み重ねて参ります。本報告書は，発掘調査で得られた成果をまとめたものであり，多くの方々が多方面におかれまして，広く活用していただければ幸いです。

最後になりましたが，埋蔵文化財の取り扱い協議から発掘調査，そして報告書作成・刊行に至るまで多大なるご協力とご理解をいただきました関係各位，関係機関に対しまして，厚く御礼申し上げます。

平成19年３月

宇都宮市教育委員会
教育長　伊　藤　文　雄

例　言

1　本書は宇都宮市西原町13番１に所在する，本村古墳群・本村遺跡の発掘調査の報告書である。

2　調査は正富福祉会特別養護老人ホーム建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査として実施した。

3　調査は宇都宮市教育委員会を主体者とし，㈱日本窯業史研究所が現地調査を平成18年６月29日～同年９月11日まで，整理・報告書作成を平成18年９月12日から平成19年２月28日まで行った。

4　本書は宇都宮市教育委員会の指導のもと，原稿は遺構を柏﨑広伸，埴輪を除く遺物及びその他全てを三輪孝幸が執筆し，水野順敏が補訂を行った後，割付・校正は三輪が行った。

5　出土埴輪は整理・挿図作成までを国士舘大学イラク古代文化研究所　井　博幸氏，埴輪の蛍光Ｘ線分析は大阪大谷大学　三辻利一氏にお願いし，玉稿を賜った。

6　写真は遺構を三輪・柏﨑，遺物（埴輪を除く）を三輪，空中写真は日本特殊撮影株式会社が撮影した。

7　埴輪は撮影から現像・焼付けを国士舘大学大門直樹氏にお願いした。

8　調査組織

宇都宮市教育委員会

教　育　長	伊藤　文雄
文 化 課 長	渡辺　　卓
文化財保護係長	梁木　　誠
文化財保護係	須田浩太郎

日本窯業史研究所

調 査 統 括	水野　順敏
調　査　員	三輪　孝幸
調　査　員	柏﨑　広伸

9　出土遺物および写真・図面類は宇都宮市教育委員会が保管している。

10　現地調査並びに報告書作成において，下記の方々のご協力と御教示を得た。記して謝意を表す。

野澤富雄　大島一洋　秋元陽光（上三川町教育委員会）　米澤雅美（早稲田大学大学院生）　今平利幸・富川努（宇都宮市教育委員会）　井　博幸（国士舘大学イラク古代文化研究所）　三辻利一（大阪大谷大学）　大門直樹（国士舘大学文学部）　㈱テクノプラニング　㈲三井考測

（敬称略，順不同）

11　発掘調査・整理参加者は次のとおりである。

朝倉栄子　新井みや子　稲毛　清　入江つや子　押久保　毅　鈴木　清　鈴木タミ　高島勝征
高松米子　沼子和子　福富　準　藤田俊夫　藤田文子　松村民子　森脇一也　渡辺明美

凡　例

1　第１図は１：2,500「宇都宮市都市計画図」，第２図は「栃木県埋蔵文化財地図」を部分複製した。

2　挿図の縮尺は原則として，遺構は古墳１／80，古墳以外の遺構１／60，炉１／30，遺物は埴輪１／４，土器類１／３，石器・耳環１／２で示した。また，遺物実測図番号と図版の遺物番号は一致する。

3　断面基準線は標高であり，平面図の方位は座標北を示す。

4　挿図中の ▒ は焼土を ▨ は撹乱を示す。

5　文中及び図版中の略号は，ＳＩは住居跡，ＳＫは土坑，ＳＸは方形竪穴を意味する。

6　遺構番号は古墳が宇都宮市教育委員会によってつけられたものを用い，新規発見のものについては順次番号を付し，土坑は現地調査で付した番号を用いている。本書では時代毎に項目を別にしたため，番号が順不同となっている。また，ＳＫ－２・３・10は番号を付した後，撹乱と確認され，番号はそのまま欠番とした。

目　次

序・例言・凡例
Ⅰ　調査の経過と方法
1 調査に至る経過 …… 1
2 調査の方法 …… 1
Ⅱ　位置と環境
1 地理的環境 …… 1
2 歴史的環境 …… 1
Ⅲ　確認した遺構・遺物
1 縄文時代 …… 5
土坑 …… 5
調査区内出土遺物 …… 5
2 弥生時代 …… 6
竪穴住居跡 …… 6
調査区内出土遺物 …… 13
3 古墳時代 …… 16
3 号墳 …… 16
5 号墳 …… 21
6 号墳 …… 23
小石室 …… 24
埴輪棺 …… 27
土坑 …… 28
4 古代 …… 32
土坑 …… 32
調査区内出土遺物 …… 32
5 中・近世 …… 33
方形竪穴 …… 33
土葬墓 …… 34
土坑 …… 34
Ⅳ　本村 5 号墳出土の埴輪　国士舘大学　井　博幸
1．出土状況 …… 35
2．出土埴輪 …… 36
3．成果と若干の考察 …… 45
4．小結 …… 48
Ⅴ　本村 5 号墳出土埴輪の蛍光X線分析　大阪大谷大学　三辻利一
Ⅵ　まとめ …… 52

挿図目次

第１図　調査区周辺地形及び調査地区
第２図　周辺の遺跡分布図
第３図　遺構配置図
第４図　ＳＫ－５
第５図　調査区内出土遺物（縄文）
第６図　ＳＩ－１
第７図　ＳＩ－２
第８図　ＳＩ－２出土遺物
第９図　ＳＩ－３・出土遺物
第10図　ＳＩ－４
第11図　ＳＩ－４出土遺物
第12図　ＳＩ－５・出土遺物
第13図　ＳＩ－６・出土遺物
第14図　調査区内出土遺物（弥生）（１）
第15図　調査区内出土遺物（弥生）（２）
第16図　３号墳
第17図　３号墳セクション
第18図　３号墳出土遺物（１）
第19図　３号墳出土遺物（２）
第20図　５号墳・出土遺物
第21図　６号墳
第22図　１号石室（１）
第23図　１号石室（２）
第24図　２号石室
第25図　埴輪棺
第26図　土坑・出土遺物（古墳）
第27図　土坑・出土遺物
第28図　調査区内出土遺物（古代）
第29図　ＳＸ－１
第30図　ＳＫ－４
第31図　ＳＫ－13
第32図　埴輪出土状況及び接合関係
第33図　朝顔形円筒埴輪
第34図　普通円筒埴輪
第35図　普通円筒埴輪
第36図　普通・朝顔形円筒埴輪
第37図　円筒埴輪および形象埴輪
第38図　ハケ工具の分類
第39図　口唇部直下に刺突を伴う普通円筒埴輪の段間隔の比較
第40図　本村５号墳出土埴輪の両分布図

表目次

表１　遺跡一覧表
表２　本村５号墳出土埴輪観察表
表３　本村５号墳出土埴輪の蛍光Ｘ線分析データ

図版目次

図版１　Ａ．調査区全景（北から）　Ｂ．調査区全景（北から）　Ｃ．調査区全景（北から）　Ｄ．調査区全景（東から）　Ｅ．ＳＩ－１完掘（東から）　Ｆ．ＳＩ－２完掘（南から）　Ｇ．ＳＩ－３完掘（南から）　Ｈ．ＳＩ－４完掘（南から）
図版２　Ａ．ＳＩ－５完掘（北から）　Ｂ．３号墳北側周湟（北東から）　Ｃ．３号墳東側周湟（北から）　Ｄ．５号墳完掘（南から）　Ｅ．５号墳遺物出土状況（南東から）　Ｆ．６号墳完掘（南から）　Ｇ．１号石室完掘（南から）　Ｈ．１号石室根石（北から）
図版３　Ａ．埴輪棺確認状況（北から）　Ｂ．埴輪棺検出状況（北から）　Ｃ．ＳＫ－４完掘（東から）　Ｄ．ＳＫ－４人骨出土状況（東から）　Ｅ．ＳＫ－５完掘（南から）　Ｆ．ＳＫ－６完掘（南から）　Ｇ．ＳＫ－７完掘（東から）　Ｈ．ＳＫ－８完掘（南から）
図版４　Ａ．ＳＫ－９完掘（南から）　Ｂ．ＳＫ－11完掘（北から）　Ｃ．ＳＫ－12完掘（西から）　Ｄ．ＳＫ－12遺物出土状況（西から）　Ｅ．ＳＫ－13完掘（南から）　Ｆ．ＳＫ－14完掘（南から）　Ｇ．ＳＫ－17完掘（南から）　Ｈ．ＳＸ－１完掘（南から）
図版５　縄文（土器・石器）　ＳＩ－２・３・４出土遺物
図版６　ＳＩ－５・６出土遺物　調査区内出土遺物（弥生）
図版７　３・５号墳出土遺物　土坑出土遺物（古墳）　調査区内出土遺物（古代）
図版８　朝顔形円筒埴輪
図版９　普通円筒埴輪
図版10　普通円筒埴輪
図版11　普通円筒埴輪，馬形埴輪
図版12　形象埴輪
図版13　円筒埴輪の細部拡大

Ⅰ　調査の経過と方法

１調査に至る経過

宇都宮市西原町地内において特別養護老人ホームの建設を計画された。建設予定地内には周知の埋蔵文化財包蔵地「本村古墳群・本村遺跡」（栃木県№3272・3275）が所在する。試掘調査は宇都宮市教育委員会（担当：須田浩太郎）が平成18年５月８日から同年同月９日まで行った。試掘調査は建設予定地中央に隣接する本村３号墳の周湟確認と，未検出遺構の確認のために行われた。その結果，古墳２基（周湟部分），土坑，弥生時代の竪穴住居跡が確認された。試掘調査の結果，建物部分に関して本調査が必要となり，その面積は約1,668㎡となった。本調査は宇都宮市教育委員会を主体者とし，社会福祉法人正富福祉会（理事長野澤富雄氏）から委託を受けた，日本窯業史研究所が調査実務にあたった。

２調査の方法

調査は重機による表土除去作業を実施し，その後人力による遺構確認作業を行った。遺構の掘削は多量の残土が見込まれる３号墳の周湟の掘削から行うこととした。そして，順次５号墳，６号墳の調査を行った。古墳の周湟の掘削が終了した後，弥生時代の住居跡の調査を行い，最後に土坑の掘削を行った。遺構の測量遺物の計測は，原則トータルステーションによって計測し，平面図・遺物分布図の作成を行った。セクション図や小石室の平面図などは調査補助員の協力を得て，手実測を行った。遺物についてはその形状のわかるものは出土状況を記録（出土位置・レベル・出土状況の写真）し取り上げを行った。写真は35ミリ黒白，リバーサルを基本にし，デジタルカメラにて補足撮影を行った。また，遺跡全景写真は㈲三井考測の協力のもとラジコンヘリにより空中撮影を行った。

Ⅱ　位置と環境

１地理的環境

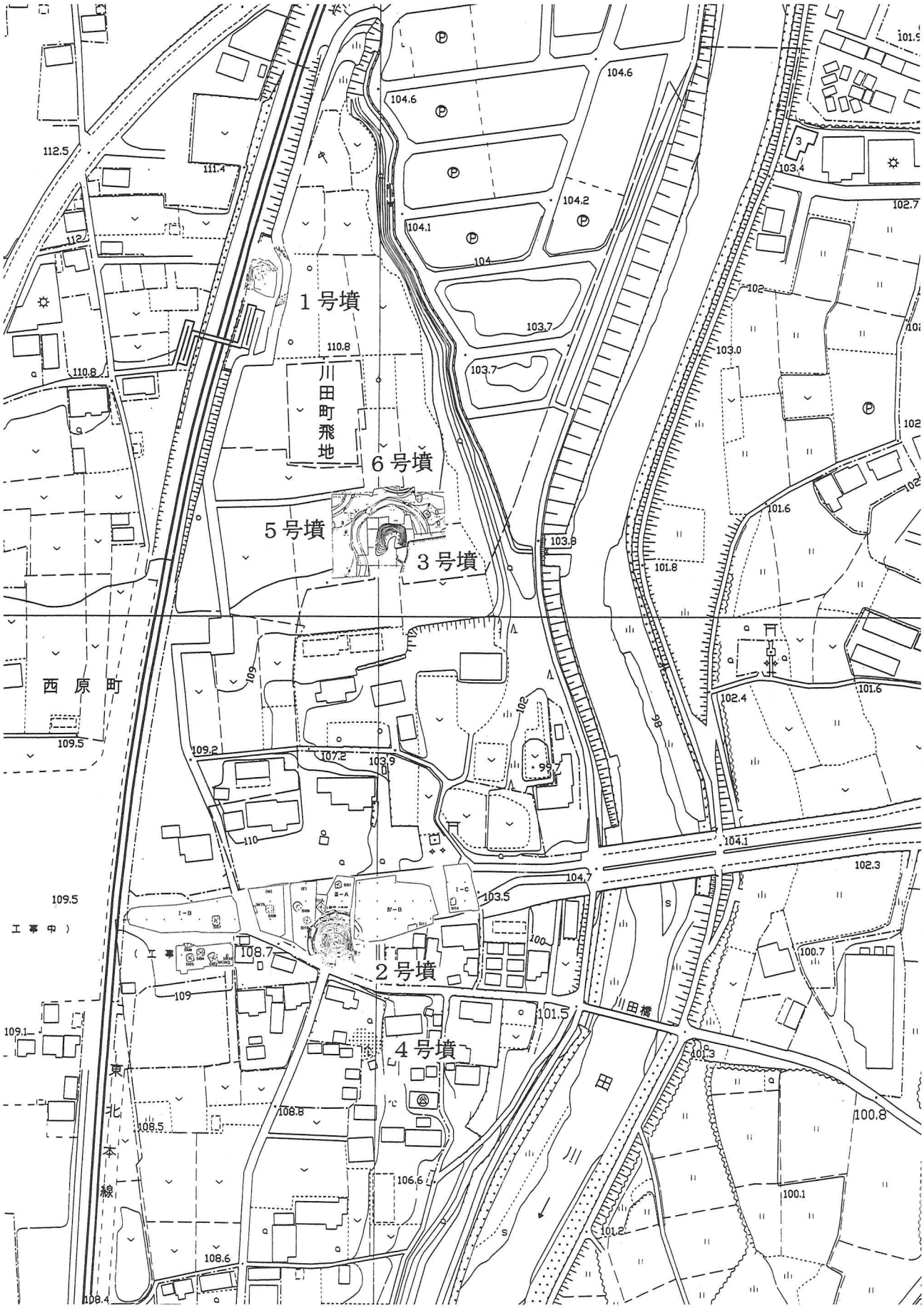
本村古墳群・本村遺跡は宇都宮市西原町・川田町に所在する。今次調査区の行政区は西原町３番地１他である。調査区は宇都宮市の中央南よりにあり，市街地中心部から南方約1.8kmのところに位置する。調査区の西方にはＪＲ宇都宮線，その西側に国道４号線，東方には東北新幹線，その東側に新４号バイパスがいずれも南北に通っている。

遺跡の立地する地形は，鬼怒川の支流である田川と，思川の支流である姿川に挟まれた宝木台地上に立地している。遺跡はその宝木台地の東縁に立地し，台地の直下を田川が南流している。田川低地との比高は約８ｍである。

本遺跡の周辺は，近年の交通網の整備に伴って，急速に住宅地・商工業地化している。しかし，ＪＲ線と田川に挟まれた当地は市街地よりやや遠方にあるため，僅かに昔の景観を残している。

２歴史的環境

本遺跡周辺の遺跡については，『本村遺跡』（宇都宮市埋蔵文化財調査報告書第49集）ほか，各遺跡の調査報告書に記載されている。そのため，本書では紙数の関係からも，各時代の詳しい説明は避けることとし，周辺の遺跡については古墳を中心に主要遺跡の一覧表を作成した。

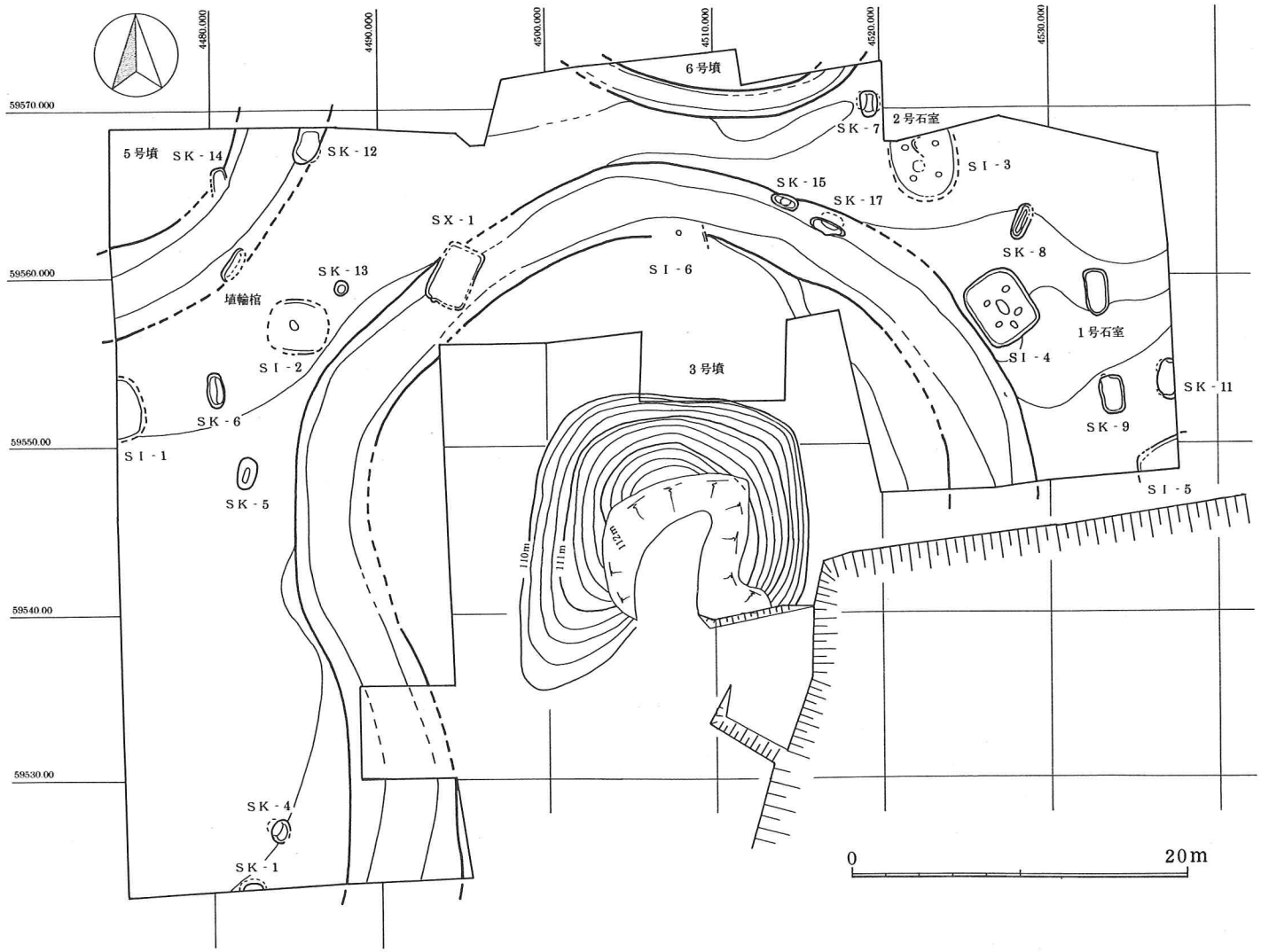


第１図　調査区周辺地形及び調査地区

No.	県ナンバー	遺　跡　名	所　在　地	縄文	弥生	古墳	古代	中世	備　　考
1	3272	本村古墳群	川田町44他	●	●	●	●	●	古墳6基、埴輪棺他、『本村遺跡』宇都宮市埋蔵文化財調査報告書第49集及び本書
2	3275	本村遺跡	川田町44他		●	●			同上
3	3271	陽南荘付近A遺跡	西原町	●		●			
4	3282	台内手遺跡	江曽島町台内手1277			●	●		
5	3278	台内手古墳群	江曽島町台内手1277			●			円墳2
6	3287	大山祇神社古墳	上横田町707他			●			円墳
7	3285	関道遺跡	江曽島町1152他			●	●		
8	2228	雷電山遺跡	江曽島3−754−1						石製模造品・鏡
9	3284	並松遺跡	江曽島町1057他			●	●		
10	3289	城南三丁目遺跡	城南3丁目15−6他			●	●	●	古墳2、乳文鏡・直刀・鹿角製刀子
11	3291	宮の内遺跡	宮の内1丁目580他			●	●		
12	3222	塚山古墳群	西川田町1663−1他			●			埴輪棺9基
13	3204	旭マーケット遺跡	兵庫塚町	●					
14	3223	二軒屋遺跡	雀宮町1117−5他		●	●			
15	4198	針ヶ谷新田古墳群	針ヶ谷町583−1他			●			円墳4、土師器・須恵器・直刀・鉄族
16	4299	十里木古墳	雀宮町226−1他			●			横穴式石室
17	4300	綾女塚古墳	雀宮町125−18他			●			女子人物埴輪
18	4305	雀宮牛塚古墳	新富町17他			●			埴輪、鏡・馬具・式具・武器・装身具

表１　遺跡一覧表

第２図　周辺の遺跡分布図


4480.000
4490.000
4500.000
4510.000
4520.000
4530.000
59570.000
59560.000
59550.00
59540.00
59530.00
6号墳
5号墳
2号石室
1号石室
3号墳
埴輪棺
SK-14
SK-12
SK-7
SK-15
SK-17
SK-8
SK-13
SK-2
SK-6
SK-5
SK-4
SK-1
SK-9
SK-11
SX-1
SI-1
SI-2
SI-3
SI-4
SI-5
SI-6
112m
111m
110m
0
20m

第３図　遺構配置図

Ⅲ　確認した遺構・遺物

今次調査では，弥生時代後期の集落，古墳時代後期の古墳群とこれらに関連する小石室・土坑墓等が調査の主体となったが，僅かながら縄文時代の遺構・遺物や中・近世の遺構・遺物も見られた。時代毎に以下に記述する。

１縄文時代

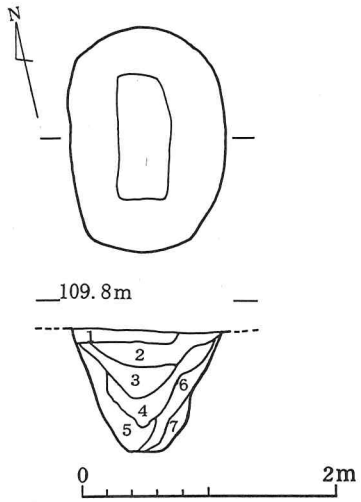
該期に属する遺構はＳＫ－５の土坑１基のみであるが，古墳の築造に際して周湟に切られたり，墳丘下になったりしてしまった可能性が高い。また，土坑からの遺物の出土は無かったが，古墳の周湟・小石室などから土器片，石器などが僅かながら出土した。

土坑

ＳＫ－５（縄文）（第４図，図版３）

調査区の西側，３号墳の周湟より西方約２ｍに位置し，北北西約3.5ｍにＳＫ－６が隣接する。

遺構　開口部は180×126㎝の楕円形で，ローム漸移層が確認面である。底面はローム層中にあり，平面は南北に長い長方形で約100×42㎝，深さ99㎝で壁は僅かに外傾する。埋積土は上層が黒褐色土，中・下層が褐色土と黄褐色土で，ロームブロックが主体の第７層以外は今市・七本桜軽石粒の混入が見られ，全体に非常に硬く締まっていた。遺物の出土は無いものの，埋積土の状況などから，縄文時代に属するものと判断される。



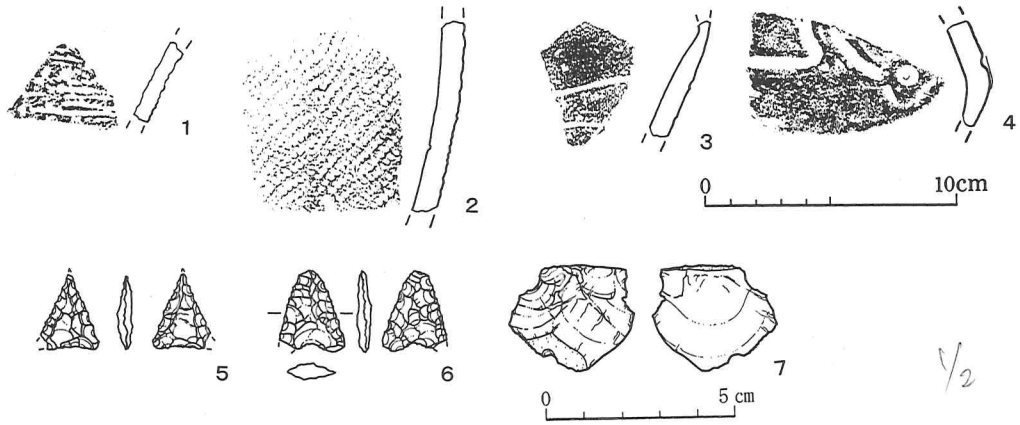
ＳＫ－５
1．腐植土
2．黒褐色土（10YR2／2）小石を3%ほど含む、やや軟質で締りは強い。
3．黒褐色土（10YR2／2）ローム粒3%、小石と赤色パミスを少量、黄白色パミスを微量含む、やや軟質で締りは強い。
4．黒褐色土（10YR2／3）ローム粒15%、3㎜～1㎝の塊と赤色パミスを少量、黄白色パミスを微量含む、やや軟質で締りは強い。
5．褐色土（10YR4／4）ローム粒35%と5㎜以下の塊少量、赤色パミス・黄色パミスを微量含む、やや軟質で締りは強い。
6．黄褐色土（10YR5／6）ローム粒25%、3㎜～1㎝の塊と赤色パミスを微量含む、やや軟質で締りは強い。
7．黄褐色土（10YR5／6）ロームブロックが混入、やや軟質で締りは強い。

第４図　ＳＫ－５

調査区内出土遺物（第５図，図版５）

今次調査で出土した縄文時代の遺物は図示したものの外，早期の土器片２点のみである。１は３号墳（４－Ｃグリット），２は５－Ｅグリット，３はＳＫ－16，４はＳＫ－６，５は３号墳西側周湟（３－Ｂグリット），６は１号石室，７はＳＩ－６柱穴より出土した。

１は前期。半截竹管による平行沈線文と爪形文が施文される。２は中期後葉。ＲＬの縄文が施文され，胎土に長石・金雲母を多量に含む。３・４は後期。３は口辺部を欠損し，沈線によって文様意匠される。４は沈線によって文様意匠される。５は先端と基部を欠損する。最大長19.5㎜，最大幅14.75㎜，最大厚3.6㎜，重さ0.9ｇ，石材はチャート。６は基部を欠損する。最大長22.4㎜，最大幅16.75㎜，最大厚3.5㎜，重さ1.3ｇ，石質はチャート。７はフレーク，最大長28㎜，最大幅33㎜，重さ5.4ｇ。



第５図　調査区内出土遺物（縄文）

２弥生時代

この時代に属する遺構は後期の住居跡を６軒調査した。また，各古墳の周湟内より該期の土器片が多数出土しており，古墳の築造に際して上部が削平されたり，住居跡そのものが破壊，あるいは墳丘下に埋め込まれたりしたものもあると推察される。事実，ＳＩ－３は２号石室と重複し，ＳＩ－６は３号墳の周湟に切られるなどしていた。

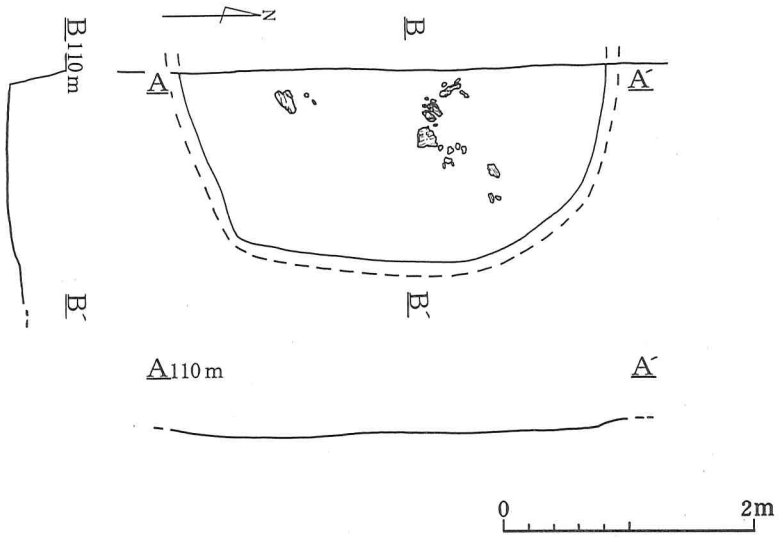
竪穴住居跡

ＳＩ－１（第６図，図版１）

調査区西端の４－Ｇグリットに位置し，東方９ｍにＳＩ－２が隣接する。西半部は地区外に延びていて全容は知り得なかった。

遺構　平面は前述状態に加え後世の削平が著しく明確にし難いが，隅丸方形と推定され，現存の南北長約3.4m，東西長は約1.5m程であった。床面はローム漸移層中にあり，ほぼ平坦であったが明確な硬化面は認められなかった。床面上には上屋材と思われる炭化材が見られたものの，焼土は認められなかった。また，柱穴，炉跡なども確認できなかった。炭化物の存在から焼失家屋と考えられるが，焼土が見られず，遺物が少ないなど疑問を残す。

遺物　床面近くより弥生土器の小片が出土したのみである。



第６図　ＳＩ－１

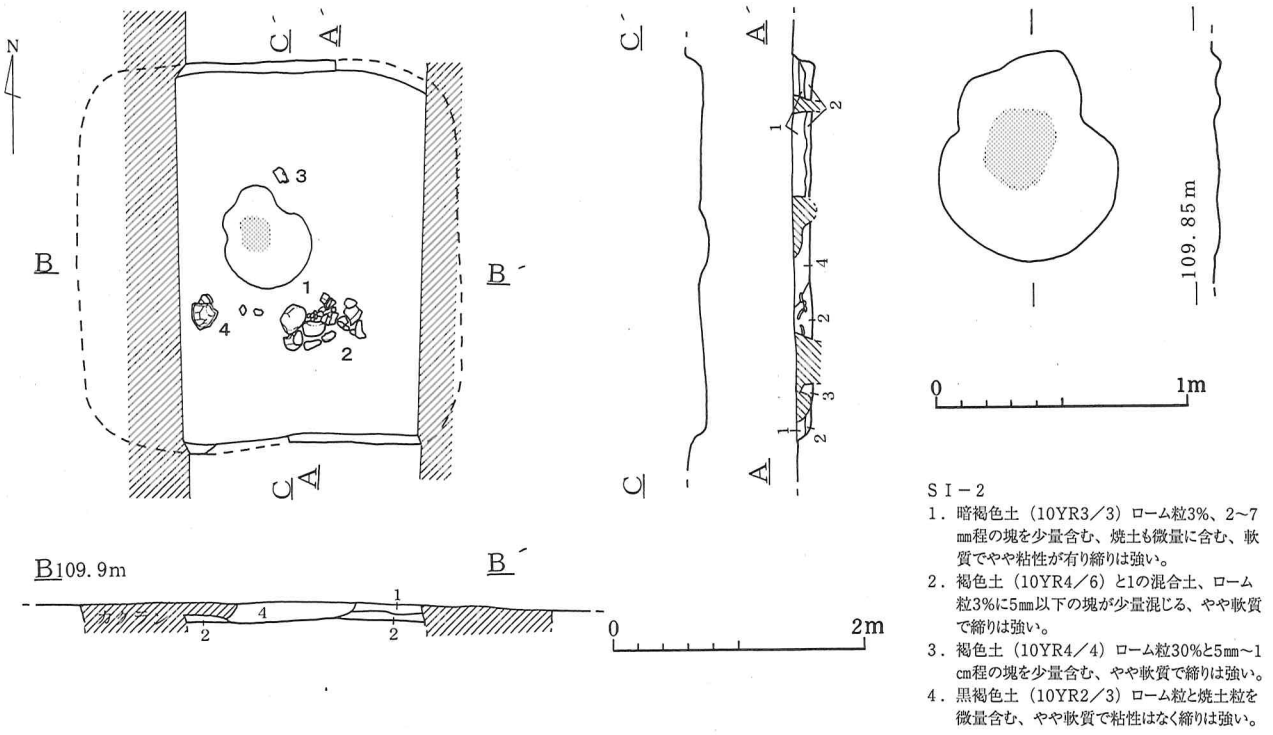
ＳＩ－２（第７・８図，図版１・５）

調査区北西の４－Ｂグリット，ＳＩ－１の北東約９ｍに位置する。東・西の壁が近・現代の耕作による深い掘り込みに切られていた。

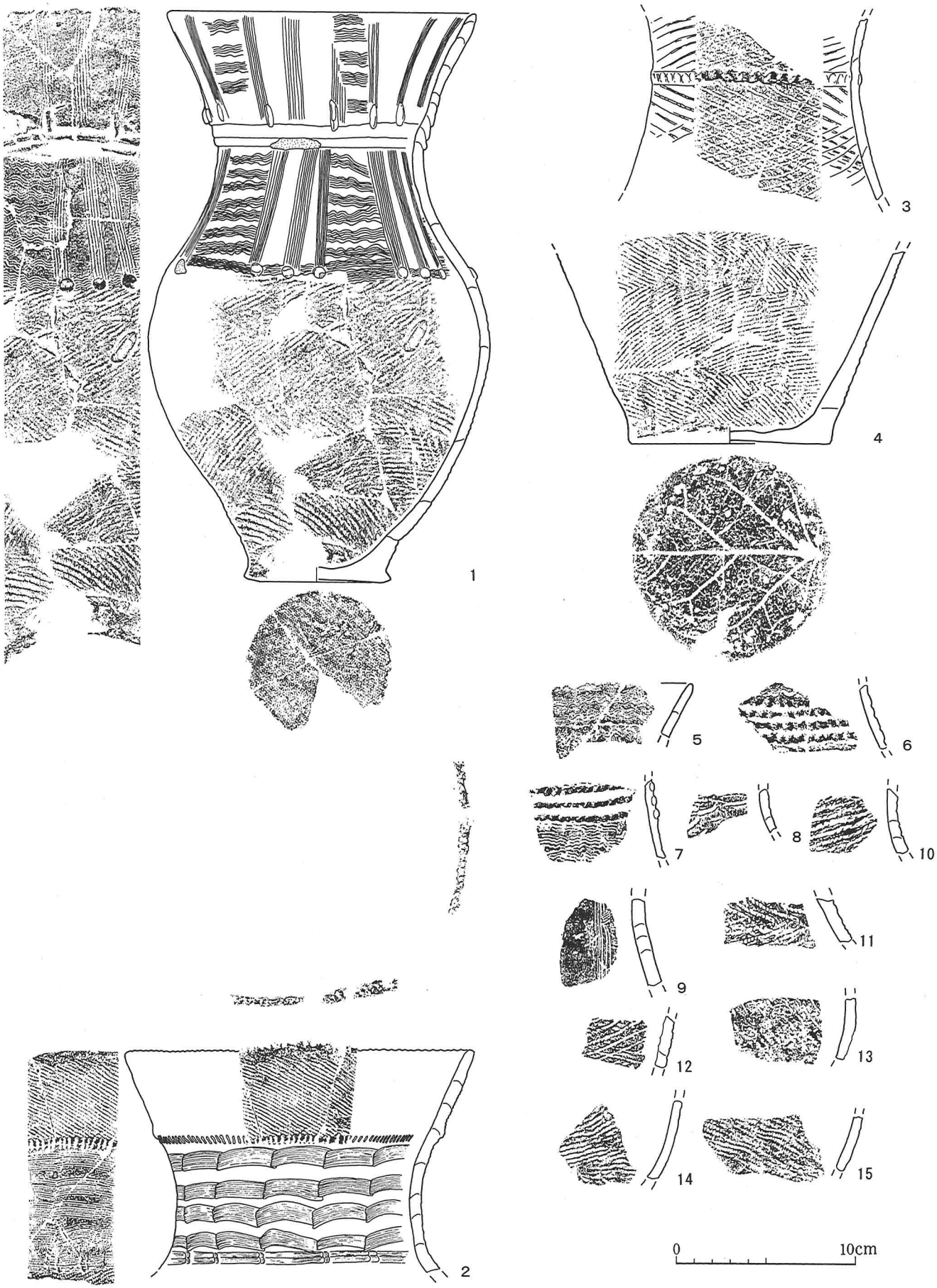
遺構　平面形は隅丸方形と推定されるが，東・西両壁が切られており，明確にはし難い。南北長は約３ｍ，現状の東西長は約1.9ｍである。床面はローム漸移層にあり，ほぼ平坦で，中央には明瞭な硬化面が認められた。壁は高さ約17㎝で，僅かに外傾する。柱穴は認められなかった。炉跡は床面の中央やや北西寄りに設けられていた。北西・南東を長軸とする82×70㎝の楕円形の地床炉で，焼土は遺存しないが，火床面は３㎝程が焼けていた。埋積土は暗褐色土と黒褐色土で，締りが強く自然埋没と考えられるが，耕作による撹乱が床面まで到る部分も見られた。

遺物　住居の中央やや北寄りの床面より多数の土器片が出土した。接合の結果３個体分あり，うち１個は略完形に復元できた。

１は十王台式の壷である。口辺部に３本１対の縦位の直線文，下端に棒状浮文を貼付し，縦区画充填波状文を施す。口辺部下端には３段の隆帯を施す。頸部は口辺部と同様の文様意匠をするが，棒状浮文の代わりに円形浮文が貼付される。胴部には付加条１種の縄文が羽状に施される。底部には布目痕が認められる。２は壷。口辺部に付加条１種の縄文が施され，口縁部と口辺部下端には原体を押圧している。頸部は連弧文を４段に施され，下端には横位の簾状文を施す。体部には付加状１種の縄文を施文する。３は十王台式の壷である。頸部に１条の隆帯に指頭による押捺が施され，付加条２種の縄文を格子状に施文する。胎土に金雲母を含む。４は付加条１種の縄文を羽状に施文する。底部木葉痕。５は口辺部片。波状文を４段施す。６・７・９は頸部片。６・７は隆帯による押捺が施され，口辺部と体部に波状文を施す。９は縦の直線文と連弧文を施す。８・10～13は付加条２種を施す。14・15は付加条１種を施す。



第7図　ＳＩ－２



第8図　ＳＩ－２出土遺物

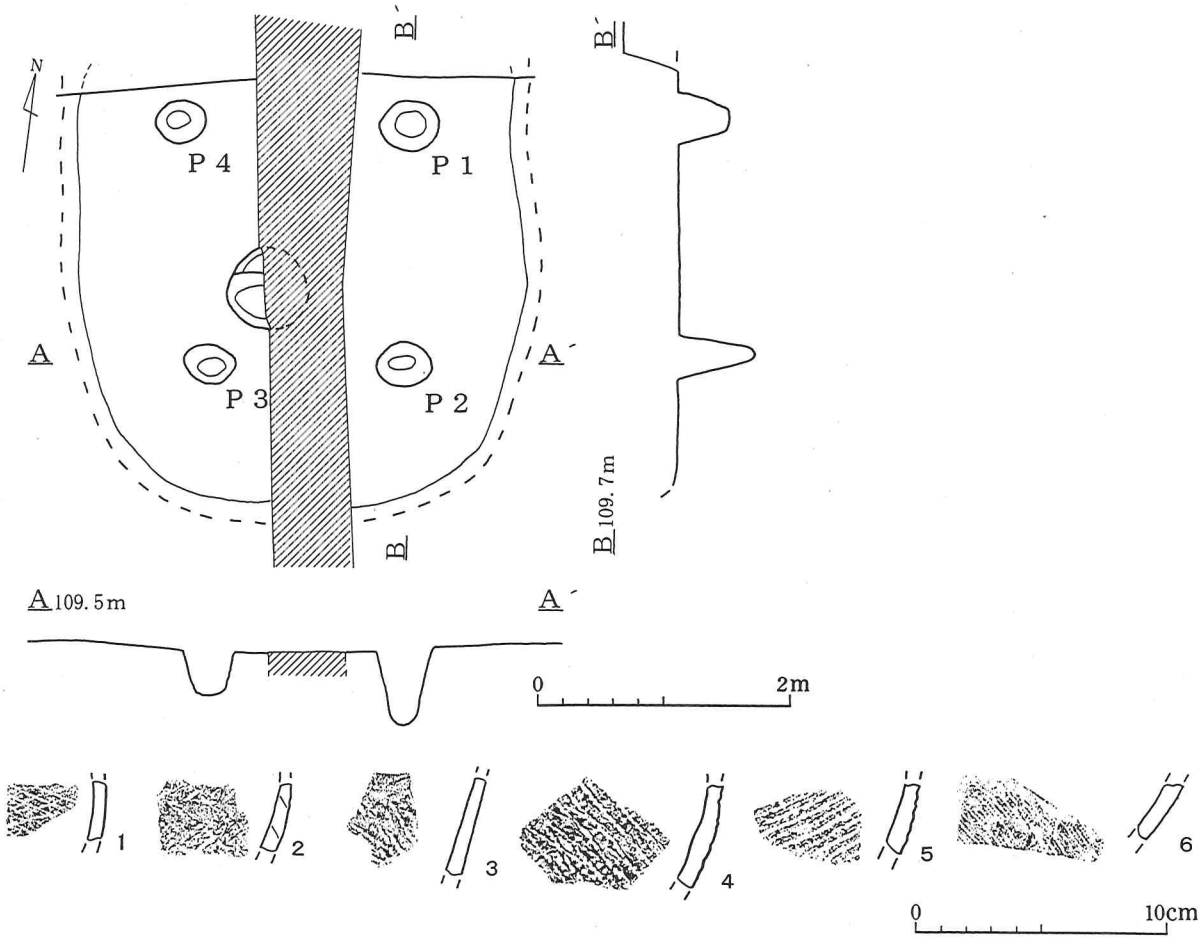
ＳＩ－３（第９図，図版１・５）

調査区北東の５－Ｆグリット，ＳＩ－４の北西方約５ｍに位置する。また，調査区の北端にあり，北側が調査区外に延びていて，全容は知り得ない。

遺構　平面は楕円形と推定され，東西長3.8m，現状の南北長は約3.9mで本来は５ｍほどと思われる。壁は大部分が削平されていて，床面のみの確認である。床面はローム層上面にあり，ほぼ平坦で硬く締まっていた。主柱穴はＰ１～Ｐ４の４口確認した。いずれも東西を長軸とする，長径40～45cm，短径33～44cmの楕円形。深さは40～60cmで，壁は僅かに外傾する。炉は中央やや南西に設けられていたが，東半分は耕作により失われていた。平面形は径60cmほどの円形と推定され，焼土は遺存しなかったが地床炉で，火床は３cm程焼けていた。

遺物　多数の土器片が出土したが，埋積土が撹乱を受けていて，接合し得る資料は見られなかった。

１～４は付加条１種が施される。５・６は付加条２種が施される。



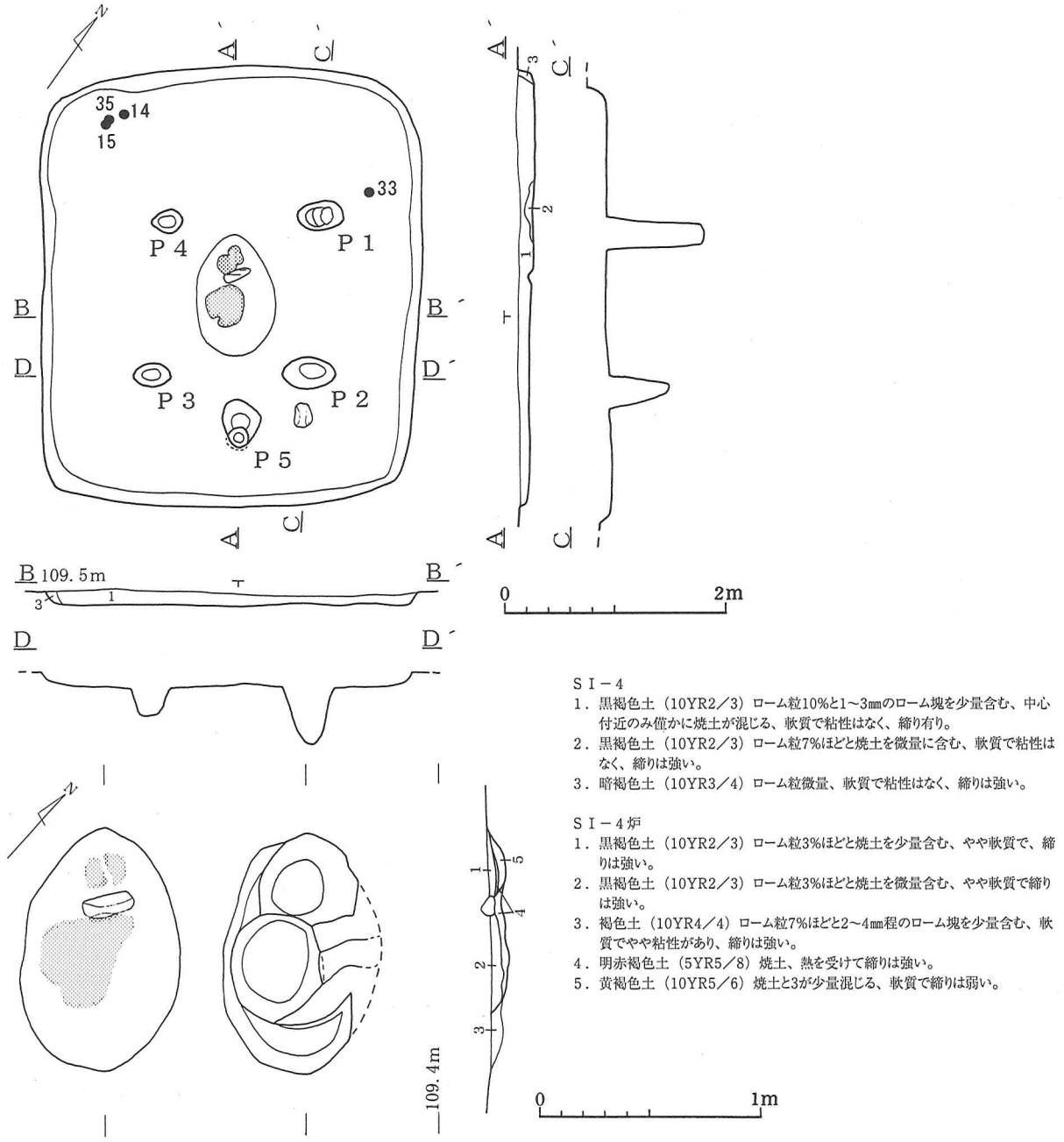
第９図　ＳＩ－３・出土遺物

ＳＩ－４（第10・11図，図版１・５）

調査区東方の４－Ｆグリット，ＳＩ－３の南東方約５ｍに位置する。

遺構　平面は北西－南東を長軸とする，4.0×3.4mの隅丸方形である。床面はローム漸移層中にあり，ほぼ平坦で硬く締まっていた。壁は高さ17cmで，いくぶん外傾しつつ立ち上がる。小穴Ｐ１～Ｐ５の５口確認し，Ｐ１～Ｐ４が主柱穴と考えられる。いずれも北東－南西を長軸とする楕円形で，長径28～48cm，短径23～31cmである。深さは25～85cmとばらつきが大きく，壁はやや外傾する。Ｐ５は唯一北西－南東を長軸とする36×44cmの楕円形で，深さ25～34cmと内側が深くなっており，出入り口に関連する施設と考えられる。炉はほぼ中央に２ヶ所確認し，南（内）から北（外）に作り替えられている。平面はともに楕円形で，旧が50×55cm，新が40×45cmとやや小ぶりであった。また，新しい炉の南東端には枕石が設置され，焼土が少量遺存していた。地床炉で火床は３cmほど焼けていた。

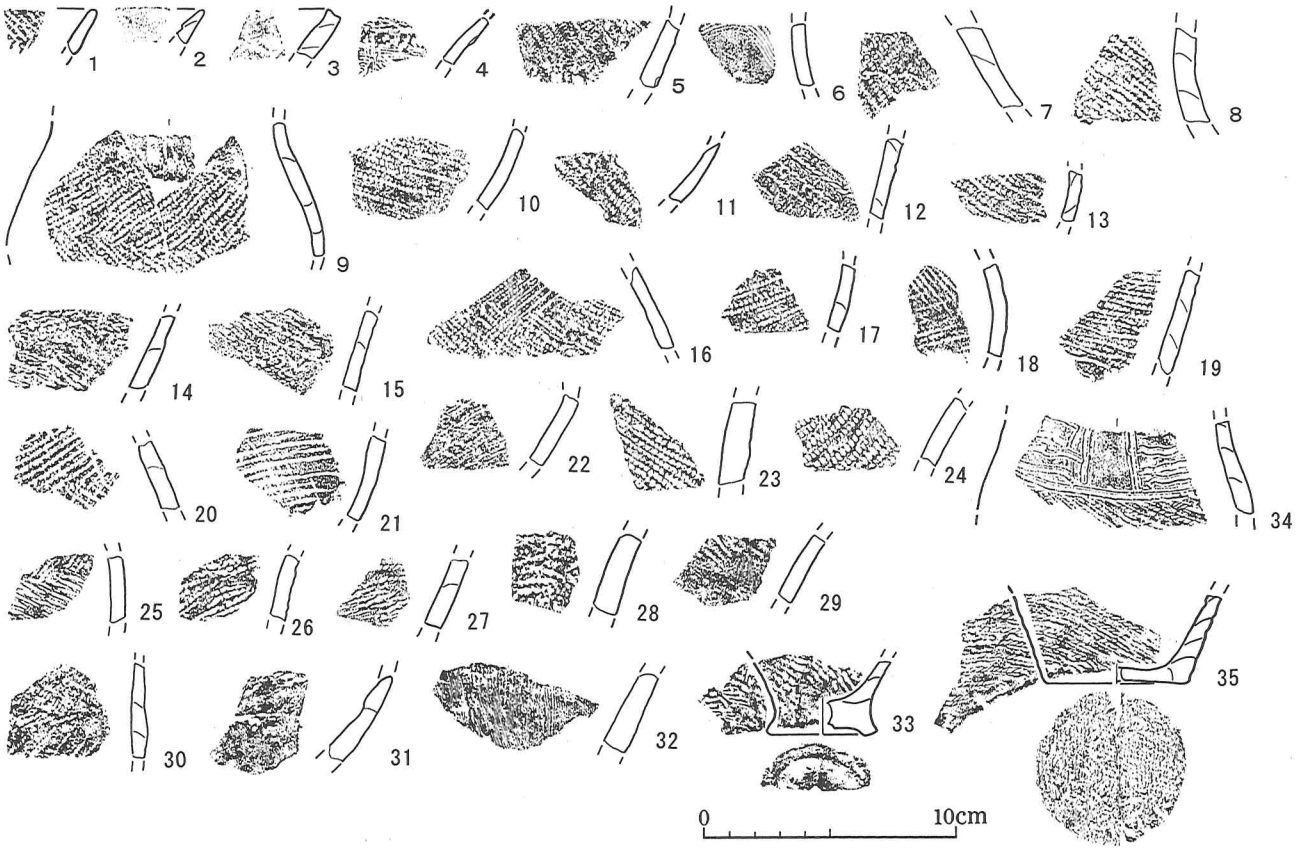
埋積土は暗褐色土，黒褐色土で焼土粒を含み，よく締まっており，自然埋没と考えられる。



第10図　ＳＩ－４

遺物　土器片と石材片が少量出土した。

1～5は口辺部片，6～8は頸部片，9～32・34は体部片，33・35は底部片。14・15・34・35は同一個体で，35は4－Eグリット出土の破片と接合した。1は付加条1種の縄文を施し，口辺下端と，口縁部に縄文原体を押捺する。2は無文の口辺部で，口縁に棒状工具による押捺が認められる。3は付加条1種の縄文を施し，口縁部に縄文原体を押捺する。4は縄文原体を押捺し，頸部に櫛描文を施す。5は付加条1種の縄文を施し，縄文原体を押捺する。6は波状文を施す。7～13・23・24・33は付加条1種の縄文を施す。14～22・25～30は付加条2種の縄文を施す。31は無文。32は単節斜縄文を施す。34・35は頸部が直線文で区画し，波状文を充填し，横線文で体部と区画する。体部は付加条2種の縄文を施し，底部は布目痕を残す。



第11図　ＳＩ－４出土遺物

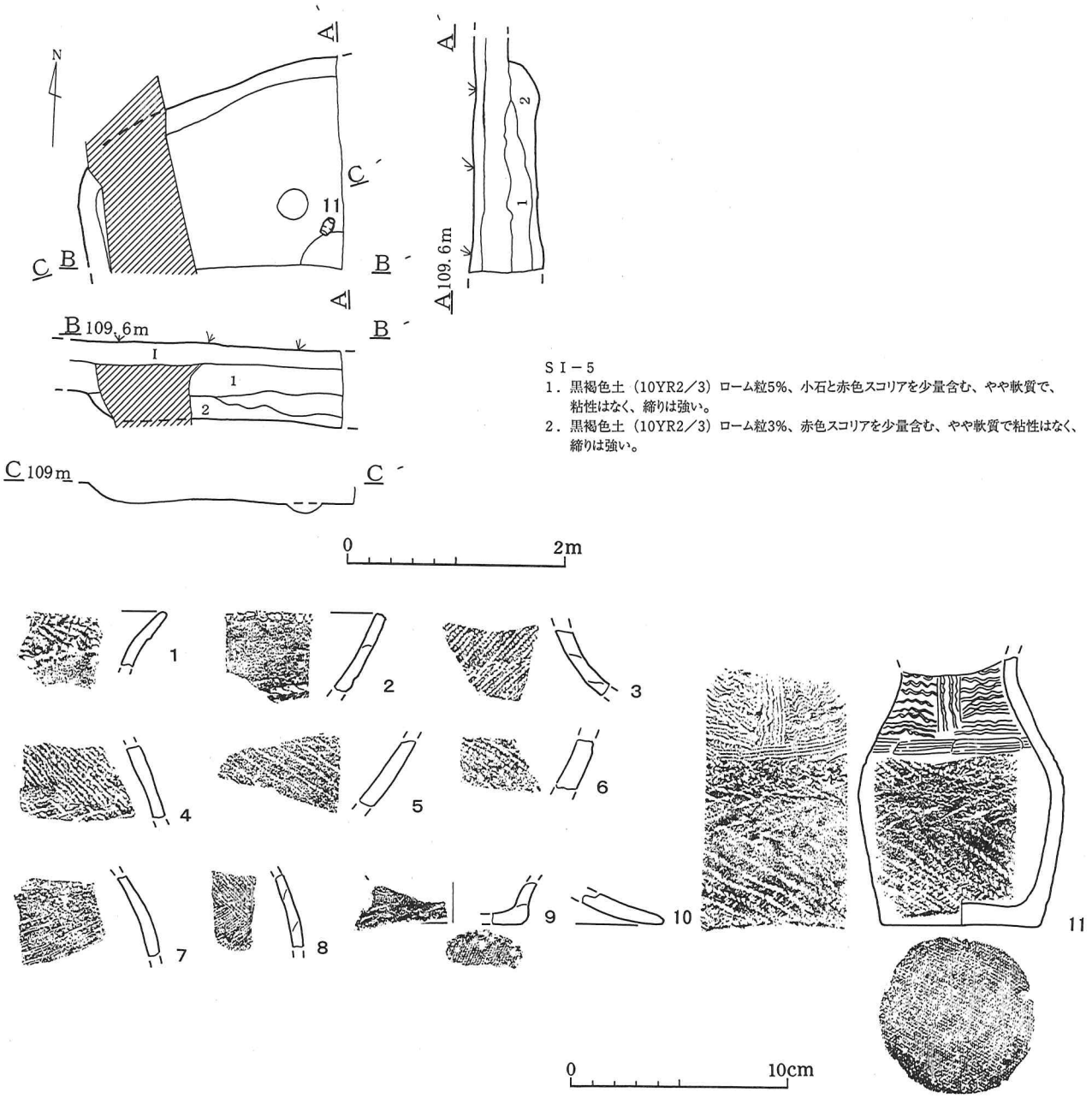
ＳＩ－５（第12図，図版２・６）

調査区南東隅の３－Ｇグリットに位置し，北西方約10mにＳＩ－４が隣接する。大部分が調査区外に延びている。

遺構　前述の状況から全容は知り得ないが，確認した北西辺南西寄りと西隅の状態より，ＳＩ－４と同形の隅丸長方形と推定される。床面はローム層中にあり，ほぼ平坦であったが明瞭な硬化面は認められなかった。上部は耕作による削平を受けているが，現存の壁は高さ25cmで，やや外傾しつつ立ち上がる。柱穴，炉跡は確認できなかった。調査区南東隅に確認した掘り込みも確認当初炉を想定したが，焼土・火床とも認められず確認するに到らなかった。

遺物　住居の中央（調査区南東隅）寄りで，口辺部を欠く略完形の小型壷が１点出土し，埋積土中からも土器片が多数出土した。

1・2は口辺部片，3は頸部片，4～8は体部片，9は底部片である。1は複合口辺をし，付加条1種の縄文，下端に縄文原体を押捺し，口縁部はキザミを施す。焼成は良好，色調は黒褐色。2は無文の口辺で口辺部下端と口縁部に縄文原体を押捺し，焼成は良好，色調は黒色。3は付加条1種，4～8は付加条2種を施す。5は胎土に金雲母を含み，色調は浅黄橙色。6～8は外面に煤が付着する。9は底部に布目痕。11は口辺部を欠損する壷である。頸部は直線文と櫛描文を重ねそれにより4分割し，波状文を充填する。体部は付加条2種の縄文により羽状文が施される。底部に布目痕。焼成は良好，胎土に微砂粒を含む。10は土師器高坏の脚部で，胎土に4㎜程の礫を含み，焼成は良好，色調は浅黄橙色。



SI－5
1．黒褐色土（10YR2／3）ローム粒5%、小石と赤色スコリアを少量含む、やや軟質で、粘性はなく、締りは強い。
2．黒褐色土（10YR2／3）ローム粒3%、赤色スコリアを少量含む、やや軟質で粘性はなく、締りは強い。

第12図　SI－5・出土遺物

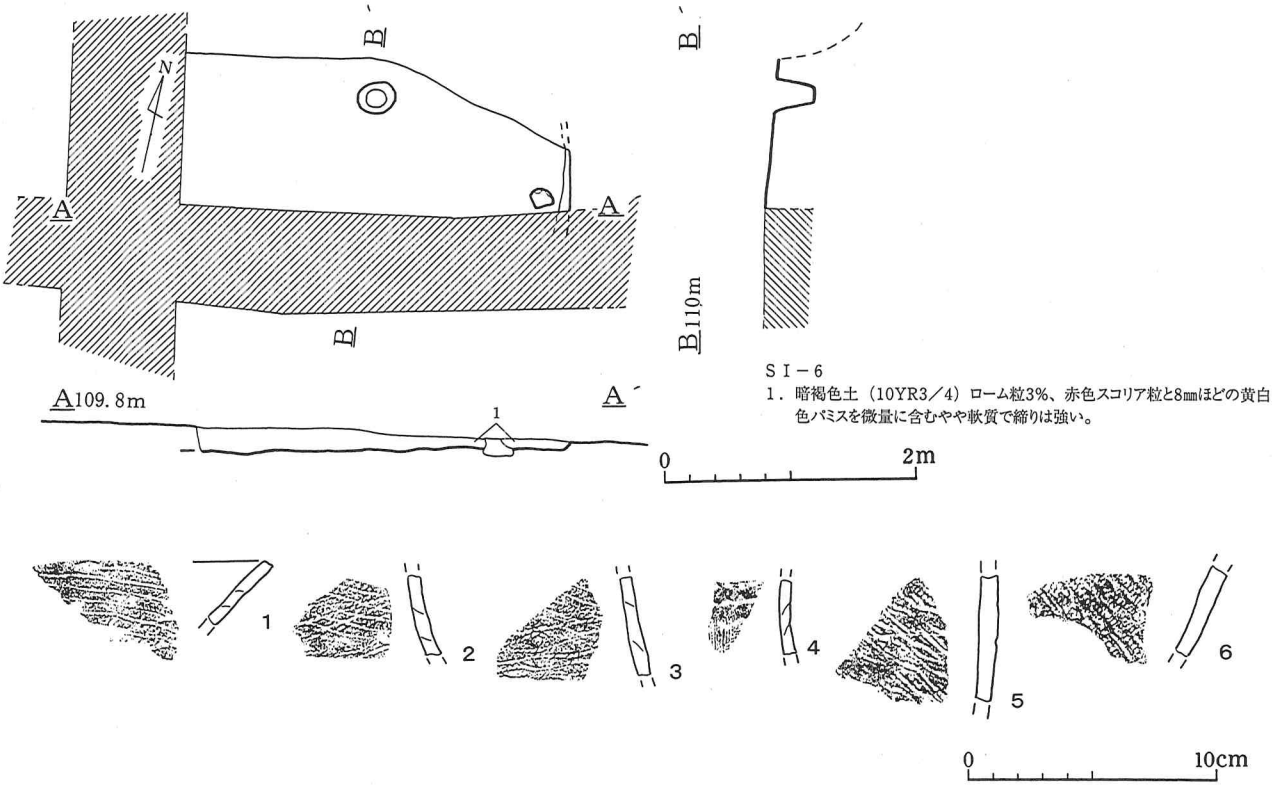
ＳＩ－６（第13図，図版６）

調査区北方，５－Ｄグリットに位置し，３号墳後円部の北側周湟と重複してこれに切られていた。また，後世の削平や掘り込みにより遺存状態は非常に悪い。

遺構　平面は前述の状況により明確にし難い。確認し得た東西長は３ｍ程である。床面はローム層上面にあり，ほぼ平坦であったが，明瞭な硬化面は見られなかった。僅かに遺存する壁の現存高20㎝程で，やや外傾して立ち上がる。径約30㎝，深さ25㎝の小穴を１口確認したが主柱穴・炉跡は明確にし得なかった。埋積土は暗褐色土で締りが強く，自然埋没と考えられる。

遺物　小穴の埋積土中より石片が１点出土したのみである。

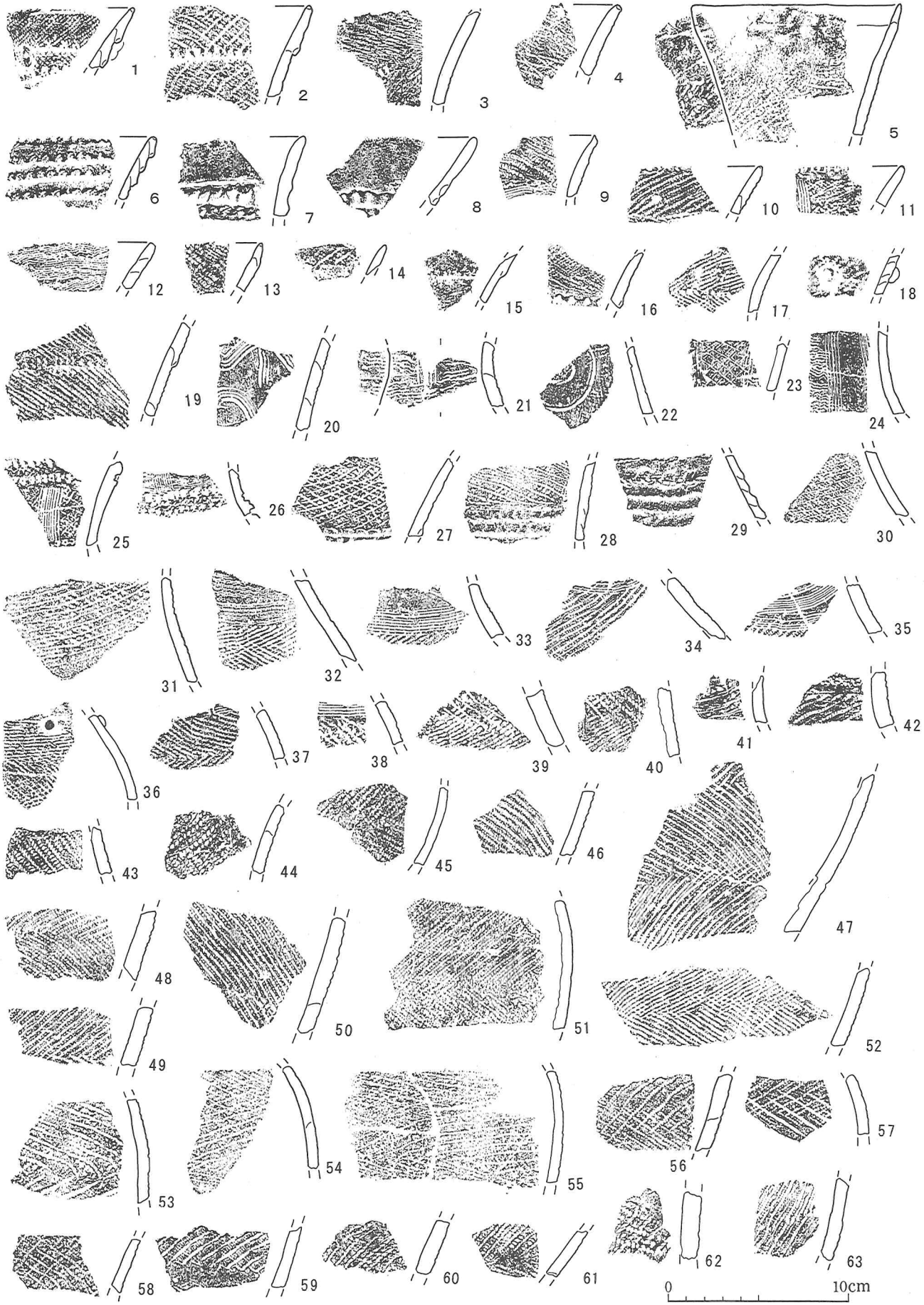
１は口辺部，２・４が頸部，３・５・６が体部片である。１～３は付加条２種の縄文を施し，１が口縁部に縄文原体を押捺し，胎土に金雲母を含み，色調はにぶい橙色。４は２条の隆帯を押捺し，櫛描文を充填する。胎土に白色粒を含み，色調は黒褐色。５・６は付加条２種を施す。４・５は外面に煤が付着する。５は胎土に石英・長石を含みやや粗く，色調は灰褐色。６は胎土に石英・長石を含み，色調は褐灰色。



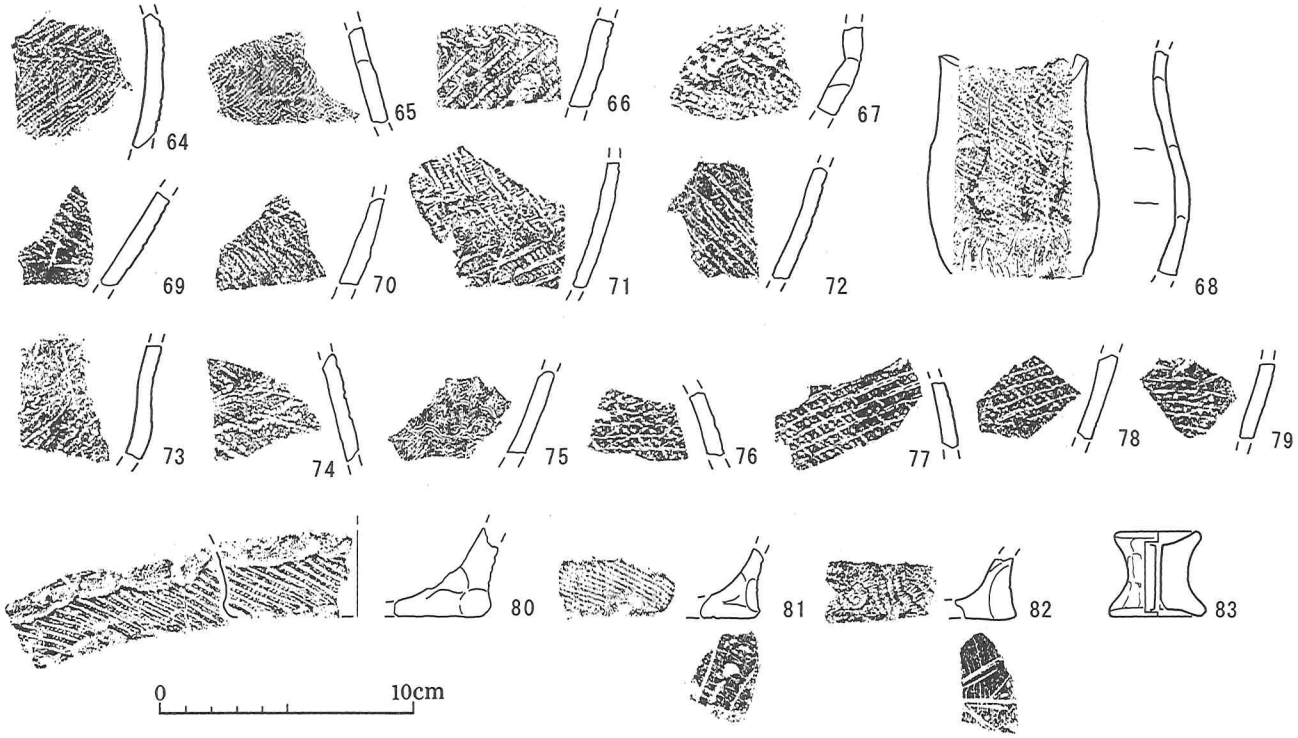
第13図　ＳＩ－６・出土遺物

調査区内出土遺物（第14・15図，図版６）

１～20・22・23・27・29・30・34～51・57・59～71・73～75・78～82は３号墳，21・24～26・28・31～33・52・54・55・58・72・76・77・83は５号墳，53・56は６号墳のそれぞれ周湟及び周辺から出土した。１～19は口辺部片，20～35は頸部片，36～79は体部片，80～82は底部片，83は土製紡錘車である。１は２段の複合口縁で，付加条１種の縄文を施す。口縁部と口辺下端には縄文による押捺がめぐり，棒状浮文を貼り付けている。２は複合口縁で，付加条２種の縄文を施し，口縁と口辺下端には縄文による押捺が巡る。３・４は付加条２種の縄文を施し，口縁部に縄文原体により押捺される。５は口辺部が無文で，付加条２種の縄文を施す。



第14図　調査区内出土遺物（弥生）（1）



第15図　調査区内出土遺物（弥生）（２）

６は３段の複合口縁で，口縁部と段部に縄文原体を押捺する。７・８は無文の口辺で隆帯に指頭による押捺が施される。９は付加条２種の縄文を施し，口縁部に原体を押捺し，口辺下端には直線文を施す。10は複合口縁で，付加条１種の縄文を施し，口縁には棒状工具によるキザミが認められる。11は直線文により区画され，付加条２種の縄文が充填され，口縁部には棒状工具によるキザミが認められる。12は波状文（５本）が施され，口縁部には縄文原体による押捺が巡る。胎土に金雲母を含み，色調は灰白色。13は付加条１種の縄文を施し，口縁部にキザミが認められる。14は付加条２種。15は複合口縁で，段に縄文原体を押捺する。16は付加条２種の縄文が施され，隆帯に棒状工具による押捺が巡る。17は付加条１種の縄文が羽状に施される。18は付加条１種の縄文を施し，棒状浮文を貼付する。19は複合口縁で，付加条１種の縄文を施し，段に縄文原体を押捺する。20は波状文を施す。21は直線文で区画し，波状文を充填する。22は沈線で渦巻状に文様意匠し，付加条１種の縄文を充填する。23は直線文で区画し，斜格子文を充填する。24は直線文（５本）で区画し，波状文を充填する。25は直線文で区画し，付加条２種の縄文を充填する。竹管状工具による列点文がめぐる。26は直線文で区画し，竹管状工具による列点文と爪形の圧痕が巡る。27は付加条２種の縄文を施し，隆帯に指頭による押捺が認められ，体部に爪形の圧痕が認められる。28は付加条２種の縄文を施し，４条の隆帯が巡り，指頭による押捺が認められる。29は４条の隆帯が巡り，指頭による押捺が認められる。30・31は付加条２種の縄文が施される。32～35は付加条１種の縄文を施し，頸部と体部の境を直線文で区画し，頸部に波状文を施す。36・37は付加条１種の縄文で羽状文を施文し，頸部との境を簾状文で区画する。36は円形浮文を貼付する。38は付加条２種の縄文を施し，直線文で区画する。39・40は上位を付加条２種の縄文，下位を付加条１種の縄文を施す。41～43は付加条２種の縄文を施す。44～52は付加条１種の縄文を施す。53～79は付加条２種の縄文を施す。80～82は付加条１種の縄文を施し，底部木葉痕。83は土製紡錘車で，１／２を欠損する。外面はナデ仕上げ。

３古墳時代

この時期に属する遺構は，後期の古墳３基（３，５，６号墳），墳丘・周湟の明確でない小石室２基，土坑９基，埴輪棺１基などである。古墳は，３号が前方後円墳，他の２基は円墳と推定される。いずれも埋葬主体部は地区外にあり，周湟のみの調査であったが，５号墳は埴輪の樹立が確認され，周湟外壁に抉り込まれた土坑内に埴輪棺が安置されていた。各古墳の周湟内及び，空間地より埋葬施設と推定される土坑や小石室が設けられていた。

３号墳（第16～19図，図版２・７）

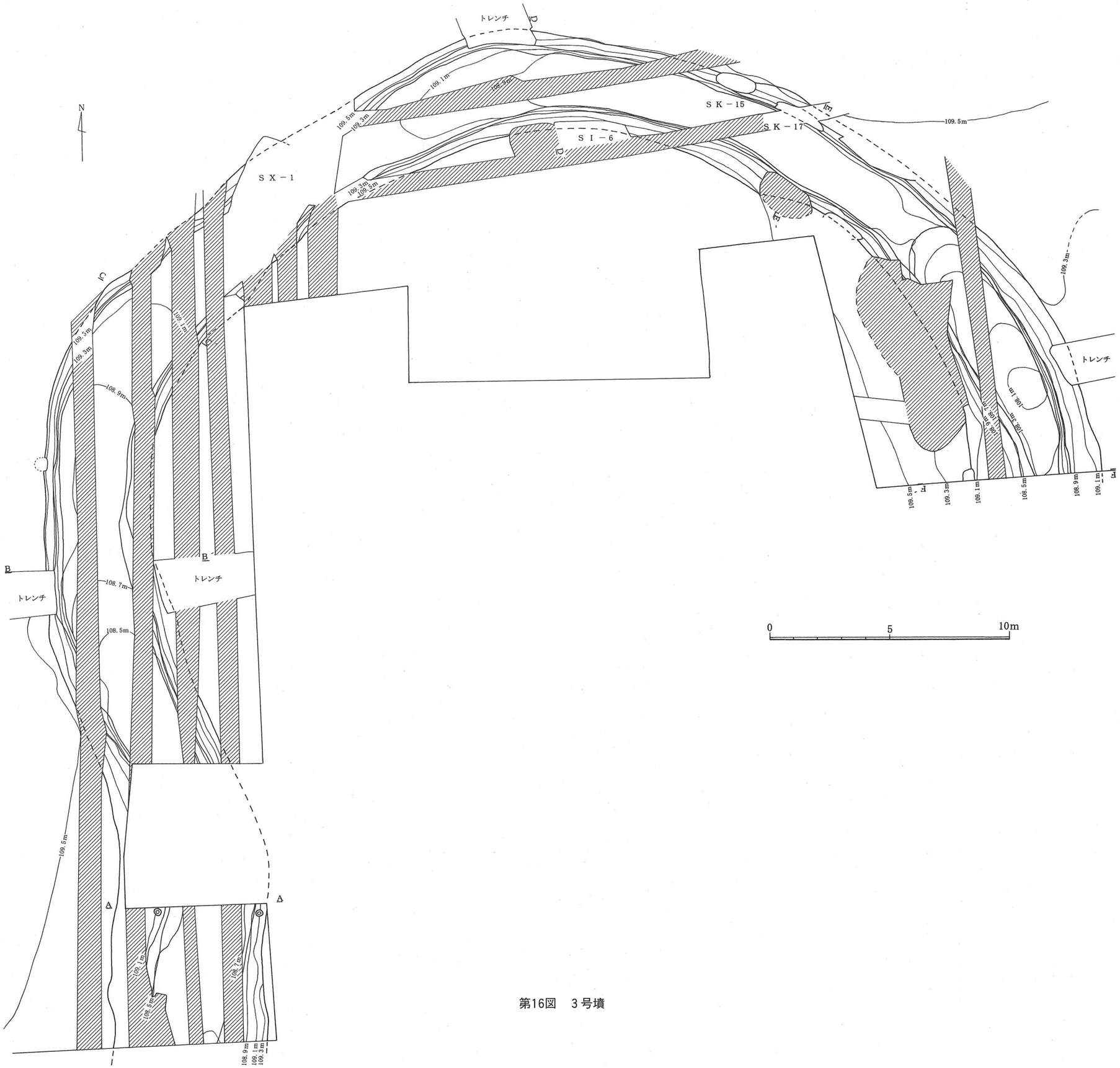
調査区の中央やや南寄りに位置する，南に前方部を向けた前方後円墳である。調査区全体の50％ほどの面積を占めるが，前方部の先端は調査区外に延びていて，全容は明確でない。また，後円部の墳丘外縁部が遺存するものの，地区外にあって調査の対象とならなかった。

墳丘及び外部施設　今次調査区内には後円部のほぼ全体と，西側のクビレ部から前方部にかけて周湟が所在するものの，後円部及び前方部の墳丘部，東側のクビレ部から前部の周湟，南側の周湟等は調査区外となっている。調査区内で確認し得た墳丘（周湟の立ち上がり）の全長は約40mで，本来は45mを超えるものと推定される。周湟を含めた現状の南北長は約43mである。後円部の径（同上）は約38m，周湟を含めた外径は44m程である。クビレの幅は約28mと推定され，周湟を含めると38m。地区外となる後円部の墳丘（封土による）は中央部が撹乱による削平を受けていて，外縁部のみが遺存し，周湟底面と残存部の最高所との比高は3．7m程である。また，前方部の墳丘（封土による）は認められない。

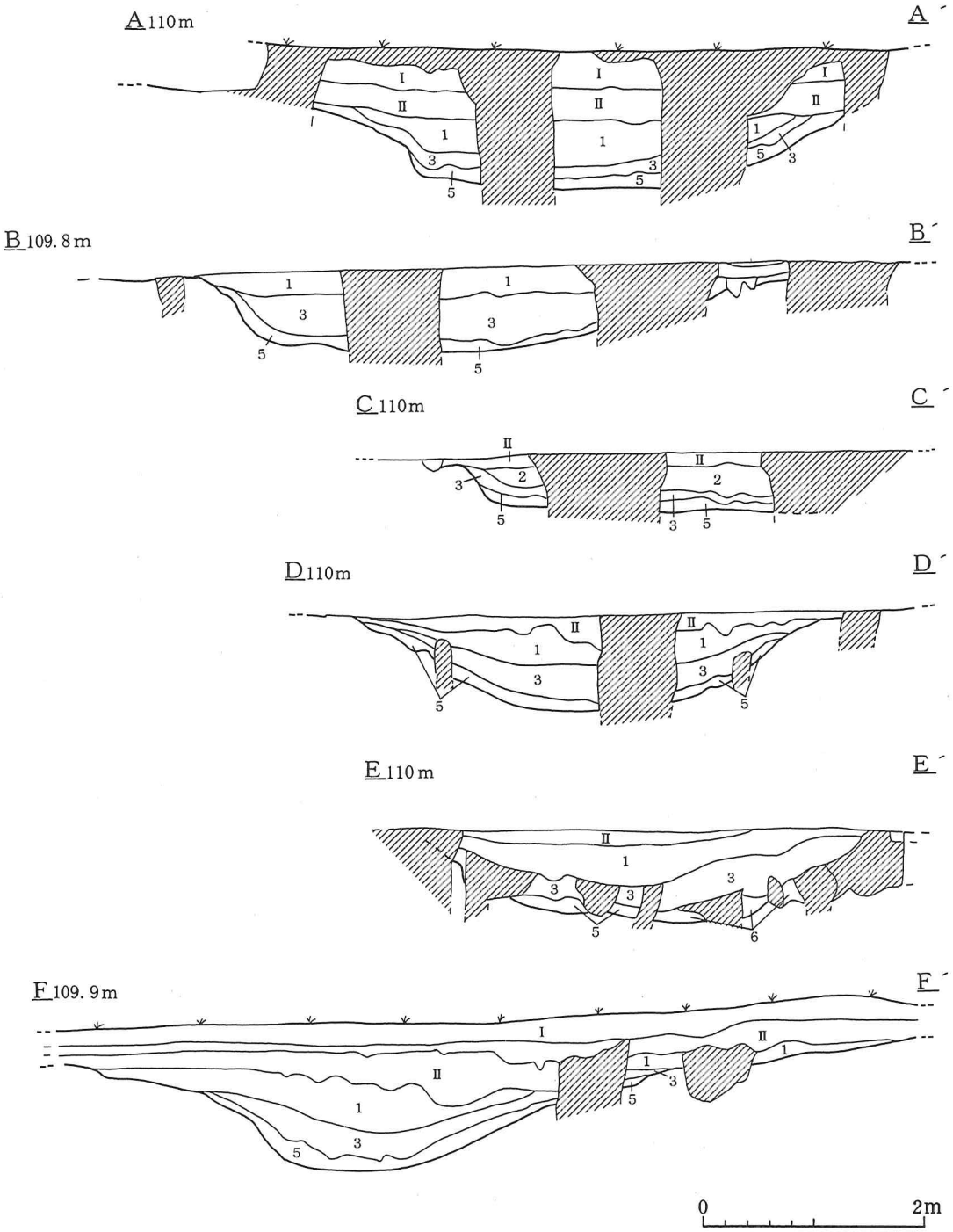
周湟は，確認面がローム漸移層で，耕作に伴う深い掘削痕が各所に見られ，遺存状態が良好とは言えないが，ほぼ旧状を推測することができた。周湟の幅は4.3～７m，深さは0.42～0.86mで，内外面とも上部は大きく外傾するが，中・下位は急勾配である。湟底は後円部北西がもっとも浅く，南に向かって徐々に下降して深くなる，これは，旧地形そのものが南に向かって下降していることに起因すると思われ，現状の地形からも推察し得る。また，後世の耕作により墳丘（封土による）の裾部が削平されていることは確実であろうが，残存状況から推して，周湟と封土による墳丘の間に若干のテラスが存在した可能性が高い。西側の周湟クビレ部には，内外に各１口づつ対になると思われる径34㎝，深さ28㎝の小穴が認められ，何らかの施設の存在が推察される。埋積土は３層に大別され，上から黒褐色土，暗褐色土，茶褐色土等で，締りがあり自然埋没である。埋積土中より，須恵器（甕，平瓶，横瓶），土師器高台坏，埴輪，弥生土器片などのほか，石室材の加工片と思われる凝灰岩片も出土している。なお，埴輪片については計40片出土したが，いずれも北西部に多く認められ，ハケ目の観察からも５号墳からの流入と判断された。また，周湟内に葺石材と思われるような石材は認められず，葺石は施設されなかったと考えられる。

埋葬主体部　調査区内には周湟部しか存在せず明確にし得なかった。しかし，前述の如く後円部の墳丘の中央部が大きく抉り取られており，ここに埋葬施設が存在したと判断される。また，使用石材は全く遺存しなかったが，本墳の年代観からは横穴式石室が構築されていたものと推察される。更に，残存墳丘の状況や破壊の痕跡などから，半地下式ではなく，地表面に築かれた石室と判断され，前方部の状態から南に向かって開口していたと考えられる。

その他の遺構　後円部北東の外壁に掘り込まれたＳＫ－15・17号土坑を確認した。ともに周湟の埋没途中に外に向けて抉り込まれたもので，ＳＫ－17号からは金銅製の耳環が１点出土した。本墳の被葬者と関連する人々の奥津城と推察される。また，後円部の北ＳＩ－６，北西の周湟内よりＳＸ－１を確認した。これらについては別項にて記述する。


N
トレンチ
SK－15
SK－17
SI－6
SX－1
トレンチ
トレンチ
トレンチ
A
A
B
B
C
C
D
D
E
E
F
F
109.5m
109.3m
109.1m
108.9m
108.7m
108.5m
0
5
10m

第16図　3号墳



3号墳

Ⅰ．暗褐色土（10YR3／3）ローム粒1%ほどを含む、軟質で粘性はなく締り有り。

Ⅱ．黒褐色土（10YR2／3）色調が1よりも僅かに明るい、ローム粒3%ほどと炭化物を微量に含む、軟質で粘性はなく締り有り。

1．黒褐色土（10YR2／2）ローム粒3%と赤色スコリアを微量に含む、軟質で粘性はない締り有り。

2．黒褐色土（10YR2／2）ローム粒を微量に含む、軟質で粘性はなく、締りも弱い。

3．黒褐色土（10YR2／2）ローム粒1%と赤色スコリアを微量に含む、軟質で粘性はなく、しまりは強い。

4．黒褐色土（10YR2／3）ローム粒3%ほど、軟質でやや粘性があり締り有り。

5．褐色土（10YR4／4）ローム粒20%と2～3㎜程のローム塊を少量含む、軟質で粘性はなく締りは強い。

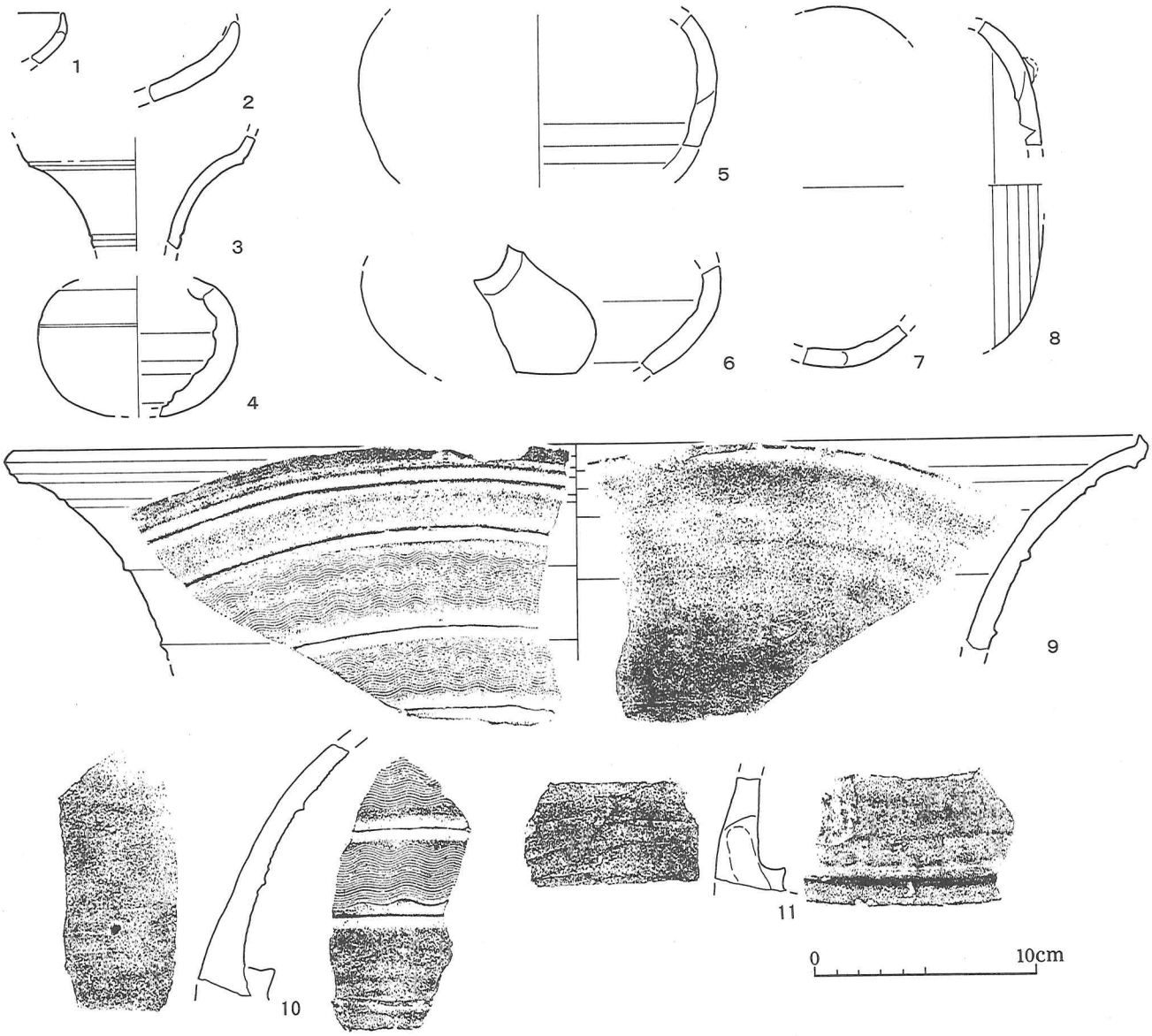
6．暗褐色土（10YR3／4）ローム粒30%、2㎜～2㎝の塊を多量に含む、赤色スコリア微量に含む、軟質で締り有り。

第17図　3号墳セクション

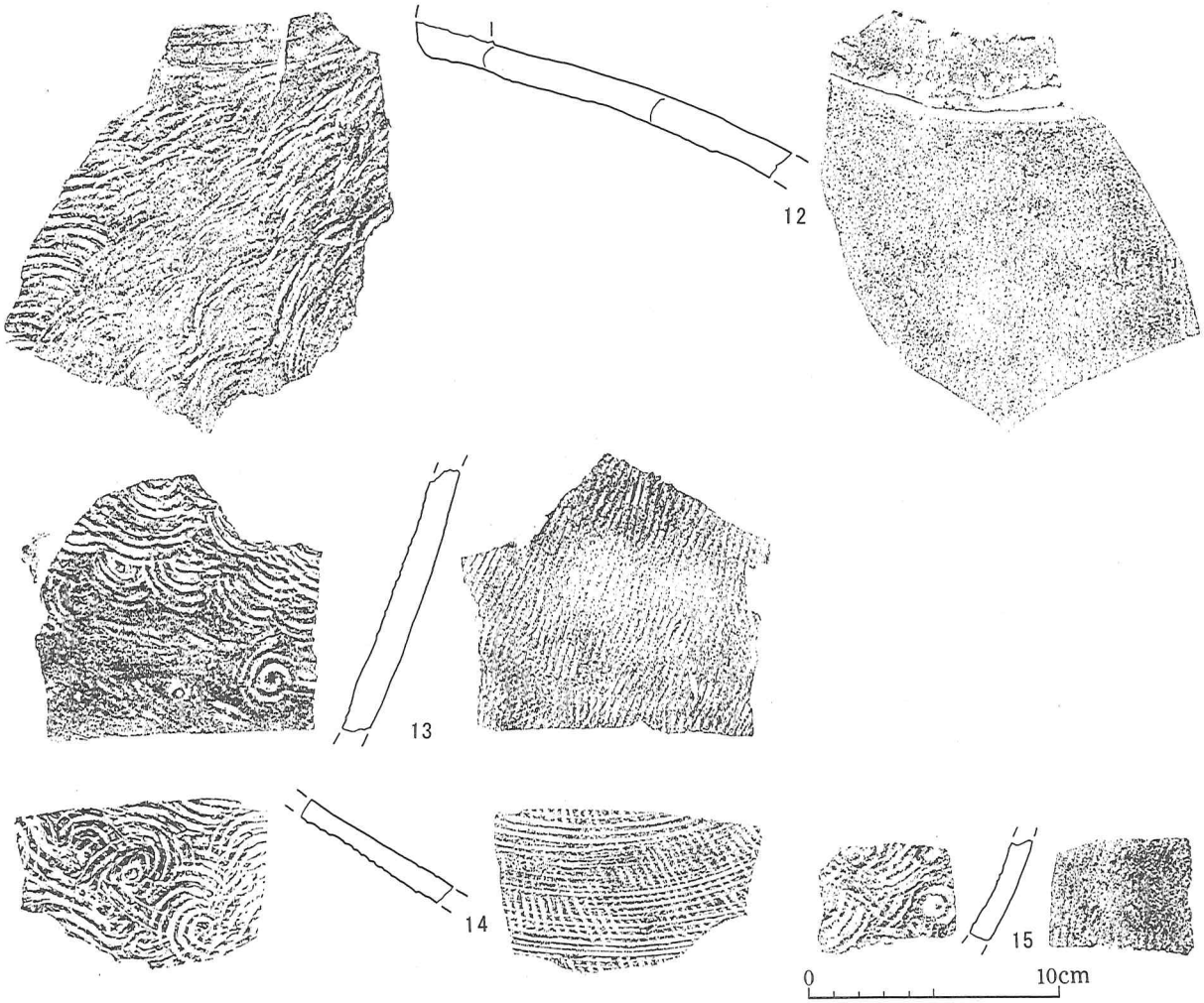
出土遺物　　埋葬主体部が未調査であり，すべて周湟の埋積土中より出土したものである。

1・2は土師器坏，3・4は須恵器ハソウ，5・6は平瓶，7・8は提瓶，9～15は甕である。

1はやや内湾して立ち上がり，調整は口辺部ナデ，胎土に細砂粒を含み，焼成は良好，色調は赤褐色。2は口縁部を欠損する。調整は口辺部ナデ，外面削り，内面ミガキ，胎土に微砂粒，酸化鉄を含み，焼成は良好，色調は明赤褐色。3・4は同一個体。口辺部内面，頸部外面，内底面に降灰，ロクロ整形，胎土は密，焼成は良好，色調は黒褐色。5・6は同一個体。外面に緑灰色の降灰，ロクロ整形，胎土は密，焼成は良好。7・8は同一個体。8の肩部に把手の痕跡，7の内面に緑灰色の自然釉。ロクロ整形，胎土は密，焼成は良好。9～13は同一個体で，9～11は口辺部片，12・13は体部片。口辺部は外面に断面三角形を呈する隆帯を3本以上廻らし，上・下段を除く区画内に波状文が施される。頸部に隆帯（補強帯か）を廻らす。体部外面縦位の平行叩き，内面渦巻状の当て具痕。胎土に白色粒，2～3㎜の礫を含みやや粗い，焼成は良好，色調は暗灰色。14は外面縦位の平行叩きの後カキ目，内面同心円当て具痕，胎土に微砂粒を含み，焼成は良好，色調は灰色。15は外面平行叩き，内面同心円当て具痕，胎土に細砂粒を含みやや粗い，焼成良好，色調は灰色。



第18図　3号墳出土遺物（1）

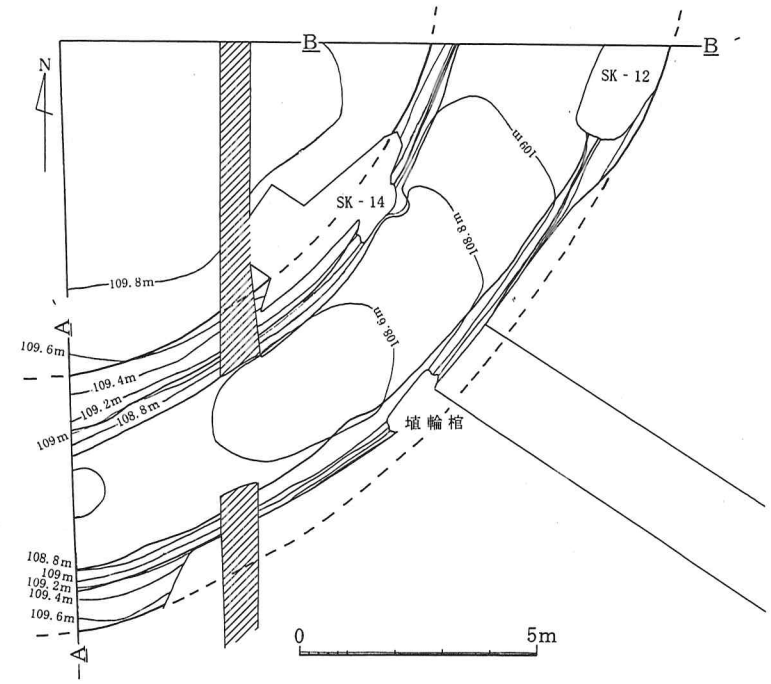


第19図　３号墳出土遺物（２）

５号墳（第20図，図版２・７）

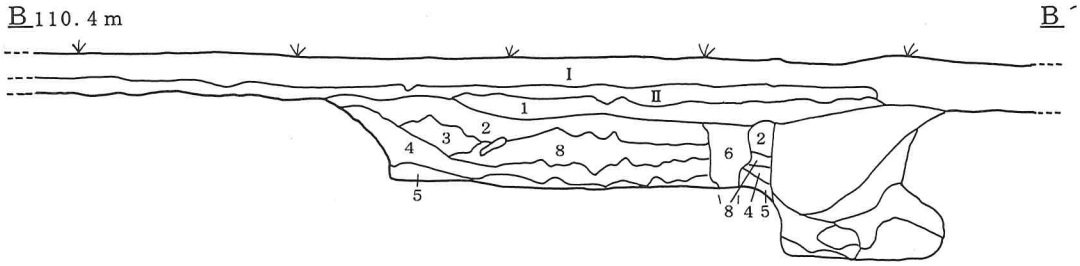
調査区の北西隅，３号墳の北西約７ｍに位置する。調査前はほぼ平坦な畑地であり，地ぶくれ等は認められず，周湟の確認によりその存在が明確となった。確認面はローム漸移層で，耕作による深い掘り込みが見られた。また，調査し得たのは全体の６分の１ほどである。

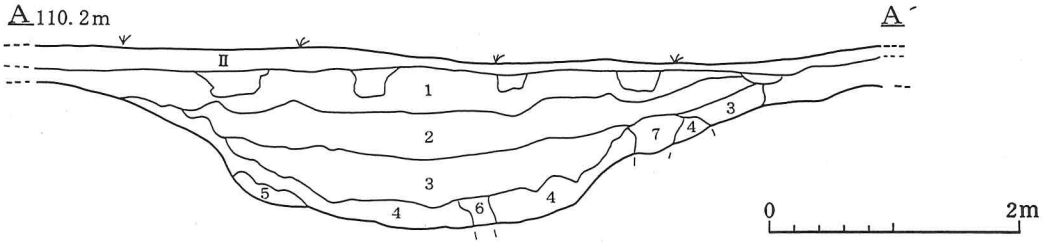
墳丘及び外部施設　　本墳は前述の如く，南東部の６分の１ほどを調査し得たに過ぎないが，内径25～32ｍ程（周湟内側の立ち上がりで）の円墳と推定され，周湟を含めた径は32～39ｍと考えられる。周湟は幅4.5～5.0ｍ，深さ0.84～1.3ｍで，湟底は北東より南西に向かって下降する。壁は内外面とも外傾するものの，中・下位は急勾配である。埋積土は３層に大別され，上から黒褐色土，暗褐色土，褐色土で，締りがあり自然埋没と判断される。なお，北東部の中層にローム土主体の層が見られたが，これは後述するＳＫ－12号土坑に関連するものと考えられる。また，埋積土の中・上層より多数の円筒埴輪片と少量の形象埴輪，極少量の須恵器，弥生土器片が出土したが，上層は小片が多く分布も疎であり，中層が主体を占める。これらの埴輪片は墳丘に樹立されていたものが流入したと考えられるが，後述する埴輪棺の部材と接合関係をもつものもある。したがって，意図的に持ち込まれて，ここで埴輪棺の部材に加工された可能性が高い。さらに，僅かながら凝灰岩片も出土しており，石室用材の加工片とも考えられる。周湟内に葺石材と思われる石材は全く認められず葺石は施設されなかったと判断される。前述のように封土等は遺存せず本来の墳丘の状況は知り得ないが，周湟の内側にも若干の埴輪片が

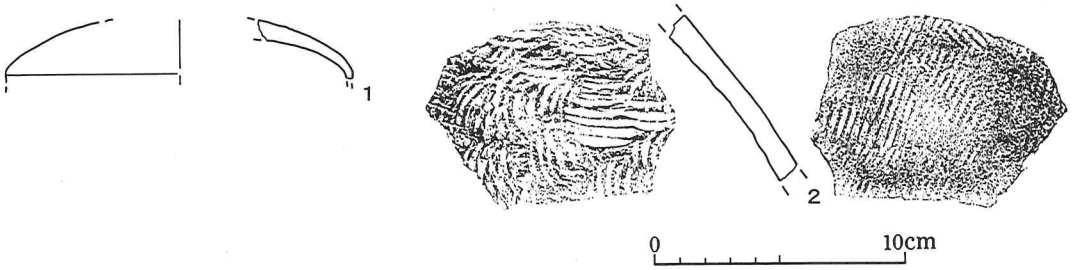


5号墳

1．黒褐色土（10YR2／3）ローム粒1%と黄白色パミスを微量に含む、やや軟質で締り有り、遺物を僅かに包含する。
2．黒褐色土（10YR2／3）ローム粒3%と小石を微量含む、やや軟質で締りは弱い。
3．黒褐色土（10YR2／2）ローム粒7%と小石・赤色スコリアを微量含む、やや軟質で締りは強い、遺物を包含する。
4．暗褐色土（10YR3／3）ローム粒15%と5㎜程のローム塊少量、赤色スコリアを微量含む、やや軟質で締り有り。
5．黄褐色土（10YR5／6）ローム粒3%と2～5㎜の塊を少量含む、やや軟質で締り有り。
6．黒褐色土（10YR2／3）ローム粒微量、やや軟質で締り有り。
7．暗褐色土（10YR3／3）ローム粒3%と赤色スコリアを微量含む、ロームブロックが少量混入、やや軟質で締り有り。
8．黄褐色土（10YR5／6）ローム粒5%、3㎜～9㎜の塊を少量含む、やや軟質で締り有り。







第20図　5号墳・出土遺物

見られたことから，周湟と墳丘の間に狭いテラスが設けられ，そこに埴輪が樹立されていた可能性が高い。

埋葬主体部　　本墳は前述の如く，全体の６分の１ほどを調査し得たに過ぎず，埋葬主体部については不明と言わざるを得ない。

その他の遺構　　周湟の外壁の沿って，北東部にＳＫ－12号土坑，南東部に埴輪棺を確認した。ともに周湟の埋没途中に掘り込まれたもので，外壁を抉り込んでいる。ともに本墳の被葬者に関連する人物の奥津城と推察され，詳細は後述する。また，周湟の埋没後に掘られたと考えられるＳＫ－14号土坑を確認した。北側は墳丘内にあるが，南側は周湟内にあり，埋積土より古代に属すると推察される。

出土遺物　　本墳は埋葬主体部が未調査であり，遺物はすべて周湟埋積土中からの出土である。

１は須恵器の蓋，胎土に白色粒を含み，焼成は良好，色調は灰色。２は須恵器の甕片，調整は平行叩き，内面同心円当て具痕，胎土に白色粒を含み，焼成は良好，色調は褐灰色。

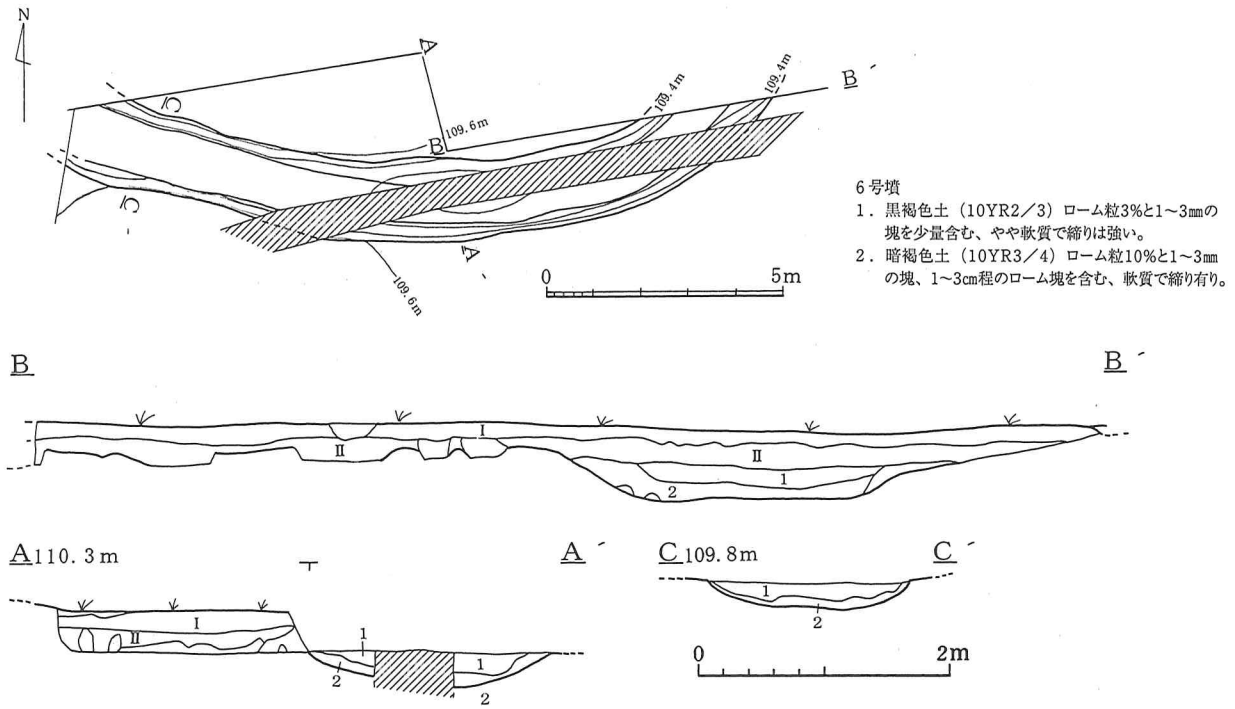
６号墳（第21図，図版２）

調査区の北端，３号墳の北約３ｍに位置する。周湟の南端部のみの調査で，大部分は北側の調査区外に所在する。調査区とほぼ同レベルの畑地であり，封土による墳丘は遺存しないと思われる。

墳丘及び外部施設　　前述の如く，周湟の南端部を調査したに過ぎないが，本来は径18ｍ（周湟内側の立ち上がり）程の円墳と推察される。確認面はローム漸移層で，耕作土による深い掘り込みが見られた。周湟は幅1.5～1.8ｍ，深さ0.17～0.47ｍと浅い。壁は緩やかであるが，東寄りの下位は急勾配である。また，湟底は西から東に向かって下降する。埋積土は２層に大別され，上位が黒褐色土，下位が暗褐色土で，締りがあり自然埋没である。埴輪や葺石は施設されなかったと推察される。

埋葬主体部　　本墳は周湟の極一部を調査したのみであり，埋葬施設については不明とせざるを得ない。

出土遺物　　遺物は周湟内に流入した弥生土器片が極少量出土したのみである。



第21図　６号墳

小石室

調査区の北東部で２基確認し，１号は基部が遺存し，平面形等を知りえたが，２号は後世の削平や耕作による掘り込みに切られていて，位置を確認する程度である。

１号石室（第22・23図，図版２）

調査区東側，４－Ｇグリットに位置し，西方約７ｍに３号墳，北西方４ｍにＳＫ－８，南方3.5ｍにＳＫ－９などが隣接する。

遺構　長さ214cm，幅63cm，深さ50cmの小型の石室で，主軸方位はＮ－６°－Ｗを示す。ローム漸移層を確認面とし，上部は耕作等により削平される。側壁と南壁は根石を含め２段の石積みが遺存していた。壁は径５～15cm，長さ13～30cmの川原石を小口積みしている。また，南側の石積みの上に乱雑な集積が見られ，確認当初は横穴式を意識した閉塞部を想定して調査を進めた。しかし，羨道に相当する石積みが認められず，撹乱と判断した。北壁は，奥壁鏡石を意識したものか，他よりもやや大ぶりの長さ47cm，高さ23cmほどの川原石を主軸に直行する形で中心に据え，その両脇を側壁同様に小口積みされていた。掘方底面にローム土で整地の後，径10～20cmほどの礫を30cmほどの厚さに敷き詰めて埋葬面としていた。

本跡は，長さ242cm，幅130cmの長方形で，深さ85cmの壙穴（掘方）内に構築されていた。石室壁材と掘方の隙間には黒褐色土・暗褐色土が裏込めとして詰められており，根石は川原石による補強がなされていた。

遺物　石室内及び敷石内の埋積土を篩いがけしたが，鉄片が１点のほかは弥生土器片と石鏃が出土したのみである。

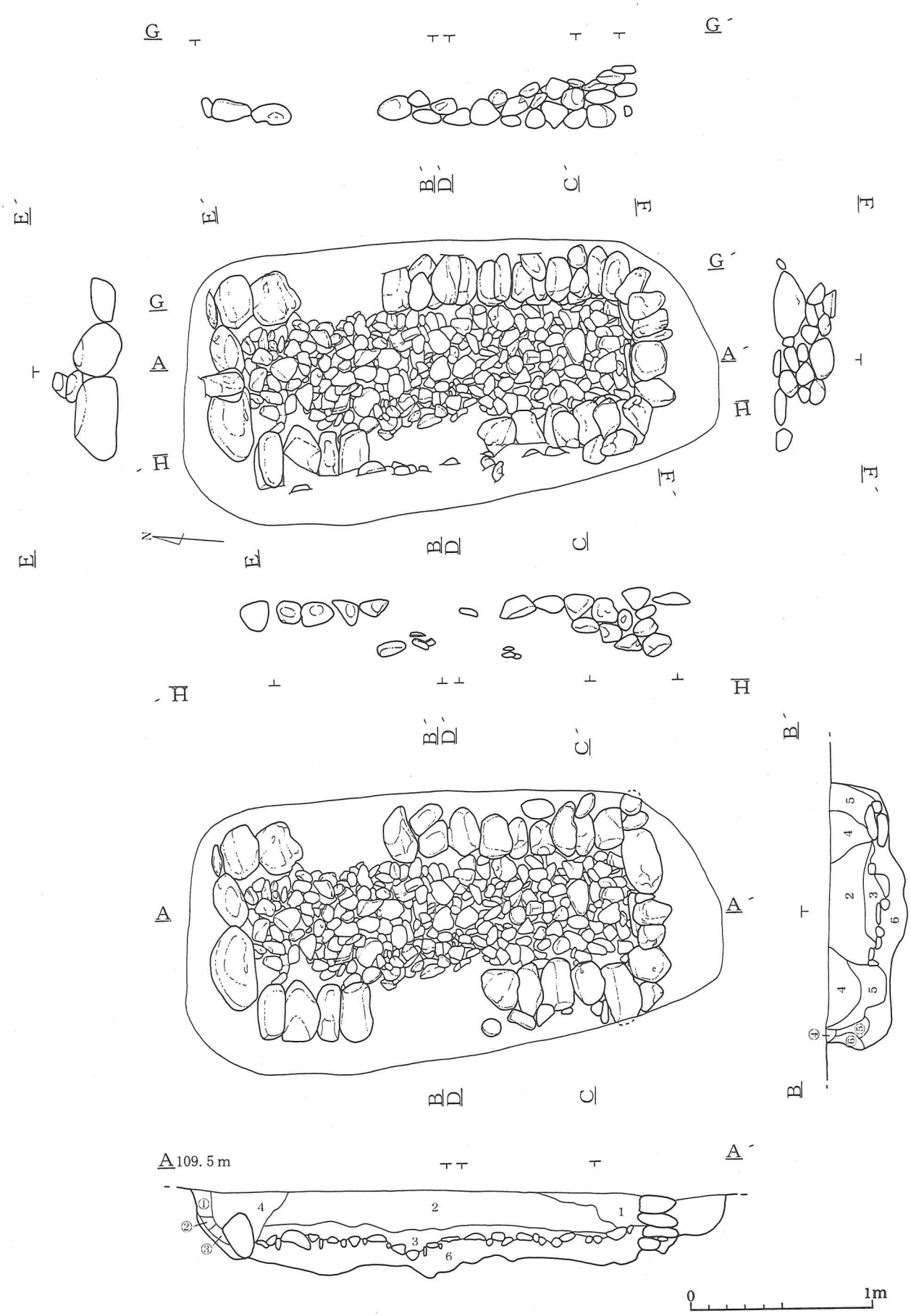
１号石室
1．暗褐色土（10ＹＲ３／３）ローム粒７％軟質で粘性はなく締りは弱い。
2．暗褐色土（10YR3／4）ローム粒30%、2㎜～1cmほどのローム塊を少量含む。赤色スコリアを微量含む、やや軟質で締りは強い。
3．褐色土（10YR4／4）ローム粒・塊ともに微量、やや軟質で粘性があり締りは強い。
4．暗褐色土（10YR3／3）ローム粒7%ほど、締り有り。
5．褐色土（10YR4／4）ローム粒10%ほど、軟質でやや粘性があり、締り有り。
6．暗褐色土（10YR3／3）ローム粒3%と5㎜以下の塊を少量含む、軟質でやや粘性が有り、しまりは強い。
①黒褐色土（10YR2／3）小石を微量に含む、やや軟質で締りは強い。
②褐色土（10YR4／4）ローム粒微量と3㎜程の塊を少量含む、やや軟質で締りは強い。
③暗褐色土（10YR3／3）ローム粒10%と2～5㎜の塊を少量含む、やや軟質で締り有り。
④にぶい黄褐色土（10YR4／3）ローム粒10%、浅黄橙色粘土（10YR8／4）混入、小石を微量含む、やや軟質で粘性が強い。
⑤褐色土（10YR4／4）ローム粒5%、粘土と赤色スコリアを微量含む、軟質でやや粘性があり締りは強い。
⑥暗褐色土（10YR3／3）ローム粒3%粘土と赤色スコリアを微量含む、やや軟質で締りは強い。
⑦黒褐色土（10YR2／2）ローム粒3%やや軟質で締りは弱い。
⑧黒褐色土（10YR2／3）軟質で締り有り。
⑨黒褐色土（10YR2／3）ローム粒15%やや軟質で締り有り。
⑩褐色土（10YR4／4）パミス（10YR6／8）混入、小粒のローム塊を多量含む、やや軟質で締りは弱い。

２号石室（第24図）

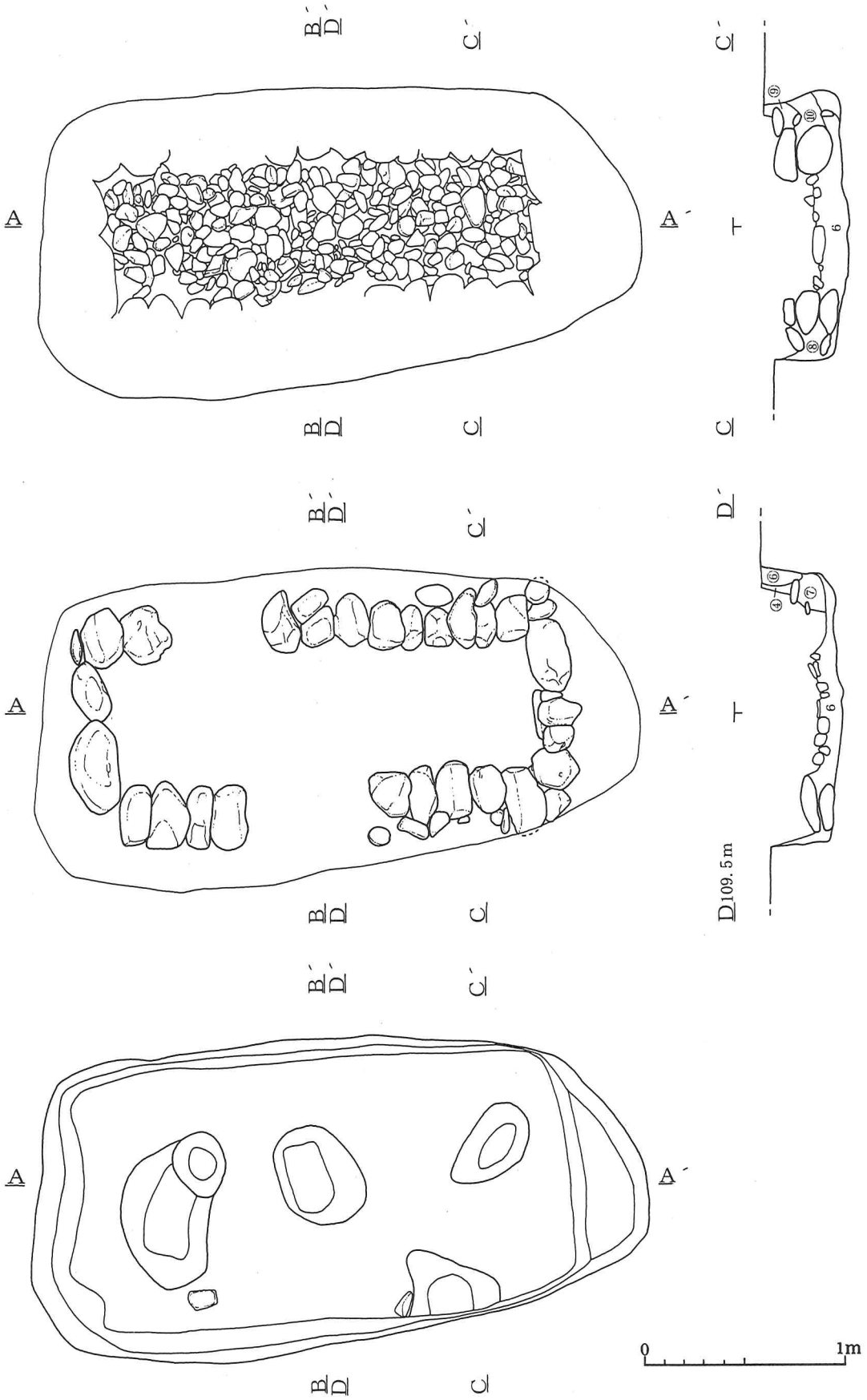
調査区北端東より，５－Ｆグリットに位置し，弥生時代のＳＩ－３と重複してこれを切っていた。北西方２ｍにＳＫ－７，南東方６ｍにＳＫ－８が隣接し，３・６号墳からも６ｍほどに位置する。耕作による削平や深い掘り込みに切られるなどしていて非常に遺存状態が悪い。

遺構　南北に主軸を持つ小型の石室であったと思われるが，前述の遺存状態により明確にし難い。しかし，北西の遺存部分と耕作による掘込みの幅などを加算すると長さ，幅とも１ｍ内外と１号石室に比べても著しく小規模であろうと推察される。また，数個残存していた石材も，長さ９～17cm，径２～５cmと小振りであった。

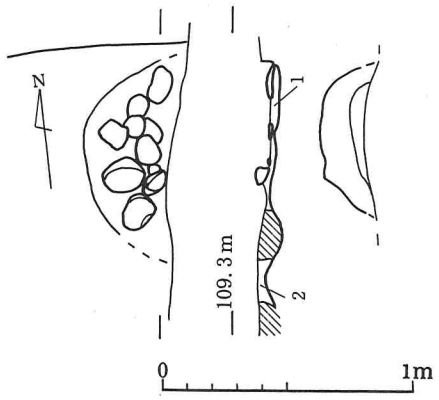
遺物の出土はなかった。



第22図　1号石室（1）



第23図　1号石室（2）



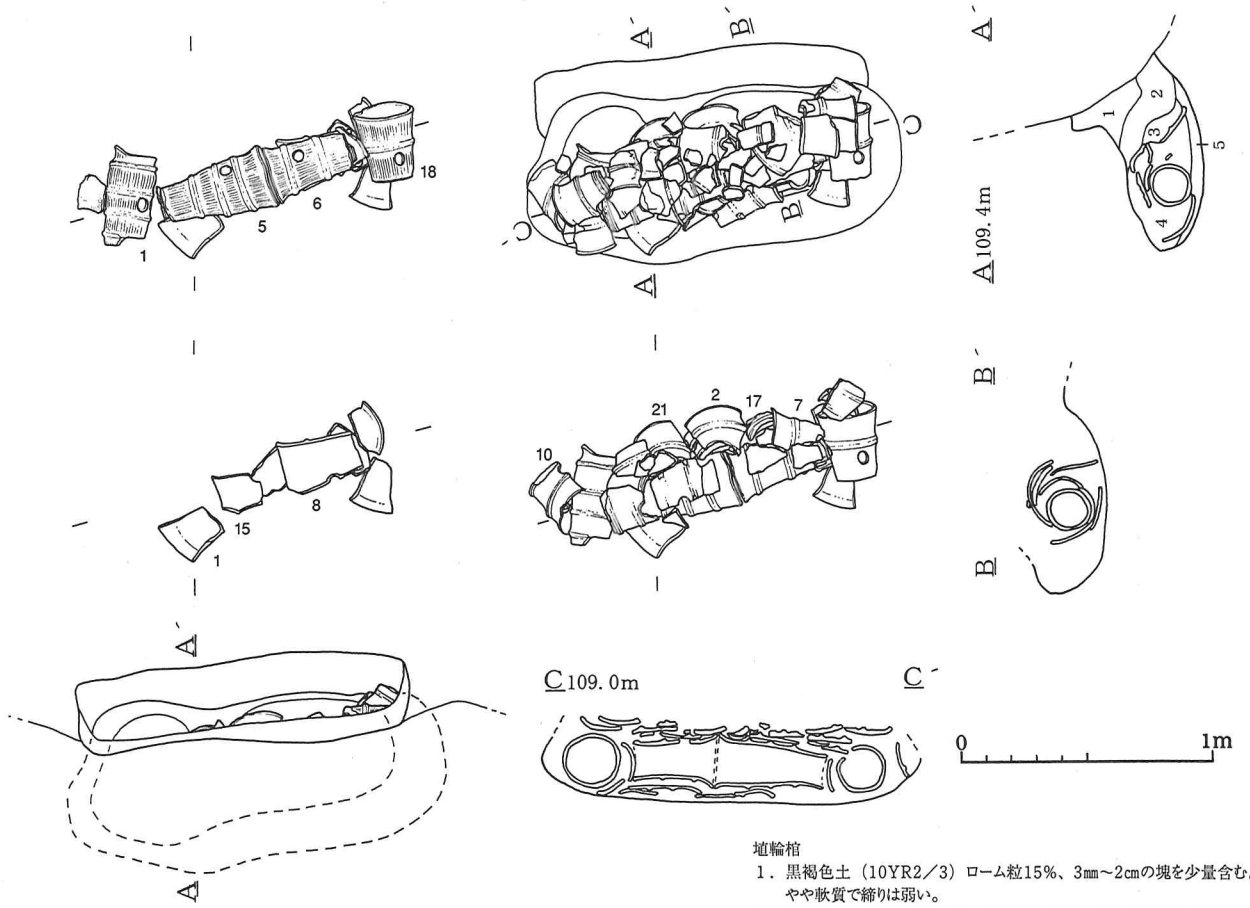
2号石室
1．黒褐色土（10YR2／2）ローム粒を5%ほど含む、やや軟質で締りは弱い。
2．褐色土（10YR4／4）1～3㎜程の塊を少量含む、軟質でやや粘性が有り締りは強い。

第24図　2号石室

埴輪棺（第25図，図版3・8～11）

今次調査で確認した埴輪棺は5号墳の周湟南東部に設けられた1基のみである。ここでは確認状況を記すに留め，詳細はⅣ本村5号墳出土の埴輪を参照されたい。

調査区の北西，5－Bグリットに位置し，5号墳の南東周湟の外壁を抉り込み埋納されていた。周湟の埋没途中に埋納されたと判断されるが，開口部が混じりの少ない土で覆われていた為掘り込まれた層位は明確にし難い。しかし，棺の部材の加工状況から，おおむね掘り込まれたであろう層位が推察できた。



埴輪棺
1．黒褐色土（10YR2／3）ローム粒15%、3㎜～2㎝の塊を少量含む。やや軟質で締りは弱い。
2．黄褐色土　ローム塊とブロックを多量に含む、黒色土が僅かに混じる。やや軟質で、締りは弱い。
3．暗黄褐色土　ローム粒5%、3㎜程の塊を少量含む。軟質でやや粘性があり締りは弱い。
4．暗褐色土　やや軟質で締りは弱い
5．ソフトローム

第25図　埴輪棺

土坑

今次調査では３・５号墳の周湟外壁及び古墳間の空間より計９基の土坑を確認した。大部分は断面Ｌ字型の所謂「抉り込み土坑」で，抉りの無いものは１基である。

ＳＫ－７（第26図，図版３）

調査区の北東部，６号墳の周湟より南東方約1.5ｍに位置し，南東約1.5ｍに２号石室・ＳＩ－３が隣接する。

遺構　開口部は南北を長軸とする148×106cmの長方形で，確認面はローム漸移層である。底面はローム層中にあり，平面形は約100×40cmの長方形，深さ59cmで，壁は直立に近い。この竪坑より東・西の二方に抉り込みによる横穴が設けられている。東側は一段高く長さ19cm，奥行20cm，幅110cm，西は一段低く高さ32cm，奥行22cm，長さ98cmの横穴が設けられていた。埋積土は２層に大別され，上層より１・２は黒褐色土，３・４は褐色土で締りは強い自然埋没と思われる。

遺物　埋積土中より流入と考えられる弥生土器３片が出土したのみである。

ＳＫ－８（第26図，図版３）

調査区の北東部，３号墳の周湟より北東方約５ｍに位置し，１号石室の北西方約４ｍに隣接する。北東隅は耕作による掘り込みにより底面まで切られて失われていた。

遺構　開口部は南北を長軸とする229×98cmの長方形で，ローム漸移層が確認面である。底面はローム層中にあり，平面は190×73cmの長方形，深さは49cmで壁はほぼ直立する。さらにこの中央に215×35cmの長方形で深さ15cmほどの掘り込みがあり，その底面もほぼ平坦であった。埋積土は４層に大別され，微妙な濃淡の暗褐色土（全層）で締りは強く，自然埋没と思われる。

遺物　埋積土中より弥生土器が10片程出土したもののいずれも流入したものと判断される。

ＳＫ－９（第26図，図版４）

調査区南東部，の４－Ｇグリット３号墳の周湟より東方約５ｍに位置し，東方２ｍにＳＫ－11，北方約3.5ｍに１号石室が隣接する。

遺構　開口部は南北を長軸とする220×150cmの長方形で，ローム漸移層が確認面である。しかし，西側の抉り込みの天井部が既に崩落していて，本来の東西長は明確でない。底面はローム層中にあり，平面は203×85cmの長方形，深さ60cmで壁はほぼ直立する。また，東から西に向かって緩やかに下降し，中央部に130×85cmの掘り込みがあり，その中央がさらに83×85cmほど窪み２段になっていた。西側には底面より一段高い位置より，高さ20cm，奥行45cm，長さ220cmほど抉りこんだ横穴が設けられていた。埋積土は６層に大別され，暗褐色，黄褐色，褐色土でローム粒ブロックを含み締りはあり，自然埋没と思われる。

遺物　埋積土中より弥生土器10片と埴輪１片が出土したがいずれも流入したものと考えられる。

ＳＫ－12（第26図，図版４・７）

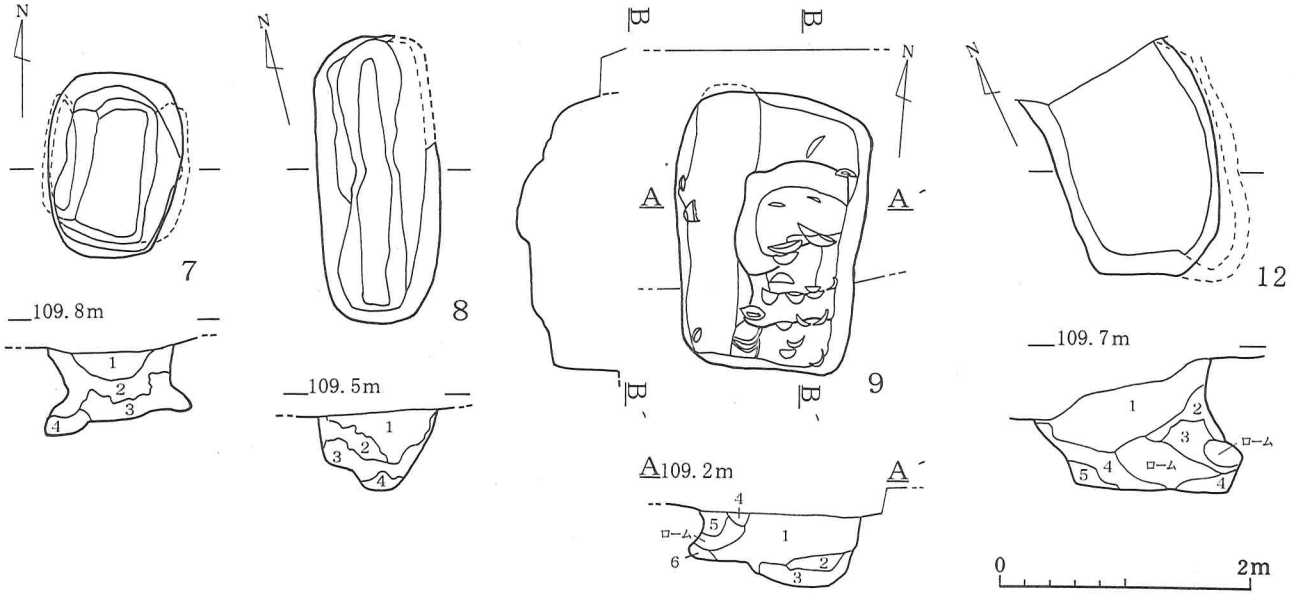
調査区北西の５－Ｂグリット，５号墳の東側の周湟外壁に抉りこまれたもので，北半部は調査区外に延びる。

遺構　開口部は南北を長軸とする長方形と推定されるが，北半部が調査区外にあり現状で約220cm，東側の横穴部分の天井が既に落下しており現状での東西長（幅）は130cmである。ローム漸移層を確認面とする。底面はローム層中にあり，平面形は同形で幅110cm，現状の長さ180cm。深さは107cmで壁はほぼ直立する。底面とほぼ同

位置より東に向かって高さ42cm，奥行30cmほど抉り込み横穴を設けている。この横穴部より土師器坏が１点出土しており，副葬品と考えられる。なお，本跡は土層観察から周湟が60cmほど埋没した時期に掘り込まれたと判断される。埋積土は５層に大別され，上から微妙な色差の黒褐色土で最下層の一部のみソフトローム層となっていて，全層において締りは強い自然埋没と思われる。

遺物　前述の土師器坏の他，埋積土中より弥生土器が９片程流入した状態で出土している。

１は土師器坏である。口径14.9cm，器高4.4cm。体部に稜を持ち，口辺部は直立し，底部は丸底。調整は口辺部がナデ，体・底部が磨き仕上げ。胎土は細砂粒，焼成は良好，色調は黒褐色。

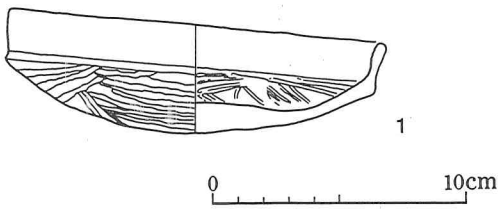


ＳＫ－７
1．黒褐色土（10YR2／3）ローム粒15%と2～5㎜程の塊を少量含む、やや軟質で締りは強い。
2．黒褐色土（10YR2／3）ローム粒7%と2㎜～1cm程の塊を少量含む、やや軟質で締りは弱い。
3．褐色土（10YR4／6）ローム粒20%と大き目のローム塊を少量含む、部分的に多量のロームが混入、やや軟質で締りは強い。
4．褐色土（10YR4／6）ローム粒5%とロームブロックを多量に含む、締りは強い。

ＳＫ－８
1．黒褐色土（10YR2／3）ローム粒3%と2～9㎜の塊を少量含む、小石と赤色スコリアを微量に含む、やや軟質で締りは強い。
2．黒褐色土（10YR2／3）ローム粒15%と2～8㎜の塊を少量含む、小石を微量に含む、やや軟質で締りは強い。
3．暗褐色土（10YR3／3）ローム粒30%と1～5㎜の塊を多量に含む、赤色スコリアを微量に含む、やや軟質で締りは強い。
4．暗褐色土（10YR3／3）ローム粒は20%ほどだが5cmの大型のロームブロックが全体の40%を占める、やや軟質で締りは強い。

ＳＫ－９
1．暗褐色土（10YR3／3）ローム粒10%と1～3㎜の塊を少量含む、赤色スコリア微量、粘性はなく締りは強い。
2．1とロームの混合土、比率は4：6、大きめのロームブロックを多量に含む、締りは弱い。
3．2と同様だが大きめのロームブロックが減り、1㎜～3cm程の塊を多量に含む、ローム粒20%ほど、やや軟質で締り有り。
4．ロームブロック層、僅かに黒色土が混じる、しまりは強い。
5．にぶい黄褐色土（10YR5／4）ソフトローム、やや粘性が有り、締りは強い。
6．褐色土（10YR4／4）ローム粒20%と黒色土が混じる、締りは弱い。

ＳＫ－12
1．黒褐色土（10YR2／3）ローム粒15%と5㎜以下の塊を少量含む、黄白色パミスと赤色スコリアを微量含む、やや軟質で締りは強い。
2．褐色土（10YR4／4）黒色土の混合土、比率は7：3、ローム粒7%と3㎜程の塊を少量含む、黄白色パミス、赤色スコリアを微量含む、やや軟質で締りは強い。
3．褐色土（10YR4／4）黒色土との混合土、比率は9：1、ローム粒と5㎜以下の塊を少量含む、やや軟質で締りは強い。
4．褐色土（10YR4／4）黒色土との混合土、比率は6：4、ローム粒15%と5㎜以下の塊を多量含む、やや軟質で締りは強い。
5．にぶい黄褐色土（10YR5／4）ソフトローム、軟質でやや粘性が有り、締りは強い。



第26図　土坑・出土遺物（古墳）

ＳＫ－１（第27図）

調査区の南西端，３号墳の周湟より西方約５ｍに位置する。南半部は調査区外に延びていて全容は不明である。

遺構　開口部での東西幅が127cm，底面が87cm，現状の南北長45cmで，本来は南北に長い長方形と推定され，ローム漸移層よりほぼ垂直に掘り込まれている。この竪坑より西・北・東の３方を抉り込み小振りな横穴が設けられていたが，前述の事情により全容を知り得ない。抉り込みは，西が高さ22cm，奥行35cm，北は高さ17cm，奥行35cm，東が高さ25cm（推定），奥行25cmであった。底面は確認面からの深さ76cmでローム層中にあり，ほぼ平坦だが，東寄りに径60cm程の円形の掘り込み（南半部は地区外）が設けられていた。埋積土は３層に大別され上層より１～３が黒褐色土，４はロームブロック，５はロームブロックと黒褐色土の混合土で全層締りが有り，自然埋没と思われる。

出土遺物は無いが，埋積土の状況から古代の抉り込み土坑と推定される。

ＳＫ－６（第27図，図版３）

調査区の北西，３号墳の周湟より西方約５ｍに位置し，南方約3.5mにＳＫ－５号が隣接する。

遺構　平面は南北を長軸とする，約200×100cmの長方形で，確認面はローム漸移層である。底面はローム層中にあり，167×34cmの長方形，壁は直立に近く深さは58cm。東側に１段低く抉り込んで横穴を設けていたが，天井部はすでに落下し遺存しなかった。埋積土は５層に大別され，上層より１・２黒褐色土，３暗褐色土，４黒褐色土，５４とロームブロックの混合土で締りは強く，自然埋没と思われる。

遺物　埋積土中より釘状の鉄片が３点と弥生土器10片程が出土している。弥生土器は周辺より流入したと判断し得るが，鉄片については判然としない。

ＳＫ－11（第27図，図版４）

調査区南東端の４－Ｇグリットにあって東側が調査区外に延びており，西約２ｍにＳＫ－９が隣接する。

遺構　開口部は南北を長軸とする長方形で，長さ206cm，東側が調査区外に延びていて東西長（幅）は不明であるが現存長は約90cm。ローム漸移層を確認面とする。底面はローム層中にあり，深さは87cmで壁はほぼ直立する。底面には掘削時の工具痕が多く認められた。底面より一段高い位置より西に高さ14cm，奥行33cm，長さ170cmほど抉り込んで横穴を設けている。埋積土は６層に大別され，上から１暗褐色土，２ローム粒との混合土，３ロームブロック層，５暗褐色土，６褐色土で２と６のみが締りが弱い。

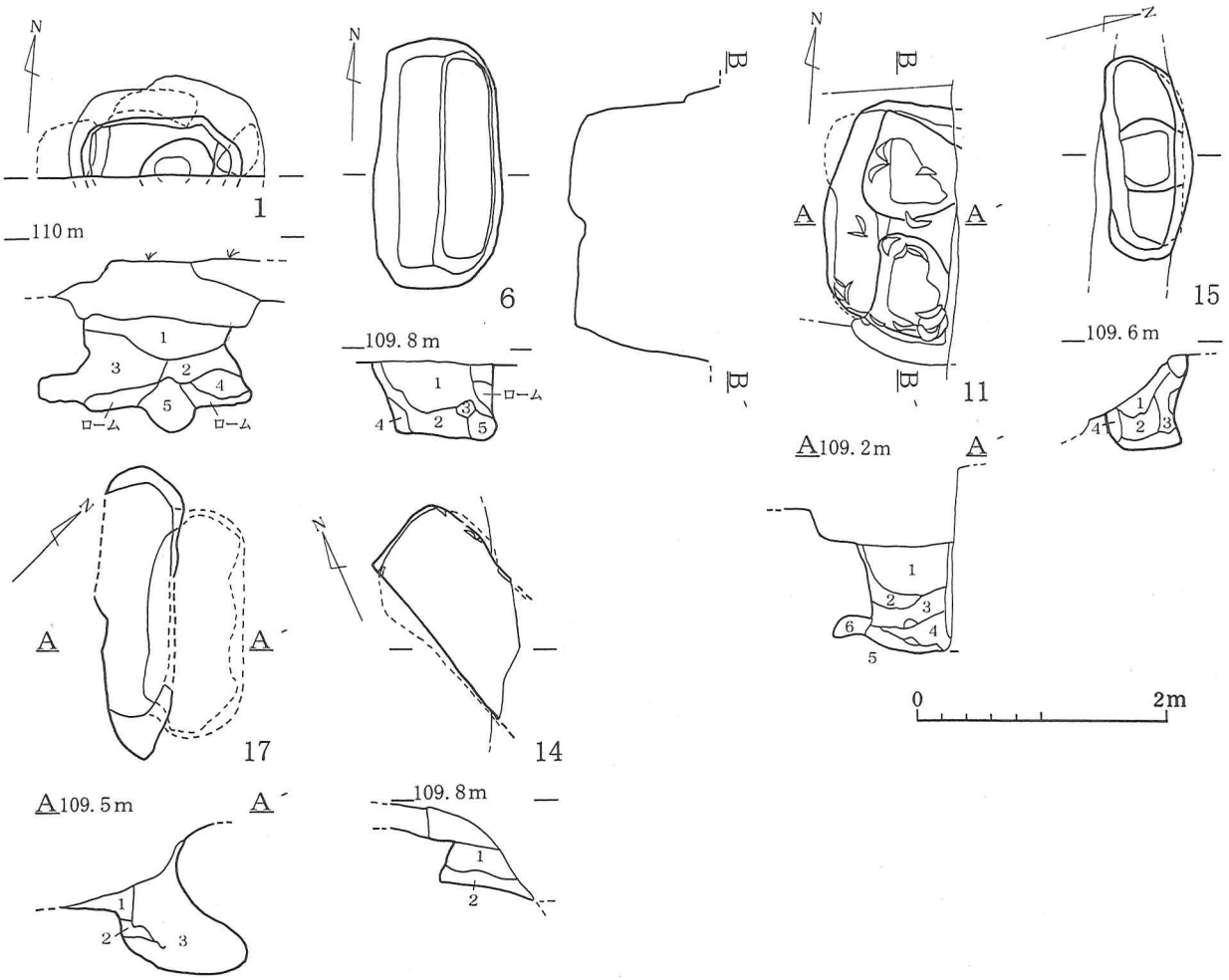
遺物　埋積土中に混入した状態で多数の弥生土器片が出土した。

ＳＫ－15（第27図）

調査区北方の５－Ｅグリット，３号墳の後円部周湟の北東外壁に掘り込まれたもので，南東方約1.2mの同様の位置にＳＫ－17が隣接する。

遺構　開口部は東西を長軸とする171×67cmの長方形で，確認面はローム漸移層である。底面はローム層中にあり，ほぼ同形で152×47cm。深さ76cmで，壁はほぼ直立する。北に奥行20cm，長さ145cmほど抉り込み横穴を設けてあったが，天井部は大部分が既に落下していた。埋積土は３層に大別され，上から黒褐色土，褐色土，黒褐色土で締りは強い自然埋没と思われる。

遺物　埋積土中より埴輪が２片出土したが，ともに５号墳からの流入と考えられ，小片のため図示しない。



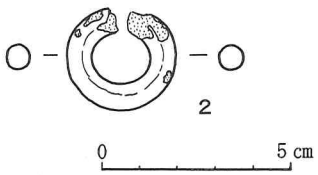
SK－1
1．黒褐色土（10YR2／3）ローム粒30%5㎜～3㎝の塊を含む、赤色スコリア塊を微量に含む、やや軟質で締まり有り。
2．黒褐色土（10YR2／3）ローム粒7%と塊ブロックを多量に含む、赤色スコリア塊を微量に含む、やや軟質で締まり有り。
3．黒褐色土（10YR2／3）黒色土が30%ほど混入、ローム粒15%とブロックを多量に含む、やや軟質で締まりは強い。
4．ロームブロック層　黒色土と赤色スコリアを少量含む、やや軟質で締まり有り。
5．ロームブロックと黒色土の混合土　ソフトロームも混入、締まりは強い。

SK－6
1．黒褐色土（10YR2／3）ローム粒15%、3㎜～1㎝ほどの塊が少量と赤色スコリアを微量含む、やや軟質で締りは強い。
2．黒褐色土（10YR2／3）ローム粒7%、3㎜～2㎝ほどの塊が少量と小石（2㎜程）を微量含む、やや軟質で締りは弱い。
3．暗褐色土（10YR3／3）ローム粒1%と2㎜程の小石を微量含む、やや軟質で締りは強い。
4．黒褐色土（10YR2／3）若干ローム混じり、ローム粒20%、5㎜以下の塊を少量と赤色スコリアを微量含む、やや軟質で締り有り。
5．黒褐色土（10YR2／3）ロームブロックが60%混入、1㎝以下の塊を多量に含む、赤色スコリアと黄白色パミスが微量含まれる、やや軟質で締りは強い。

SK－14
1．暗褐色土（10YR3／3）ローム粒10%、5㎜以下のローム塊少量、上層に大きめのロームブロックを含む、締りは特に強い。
2．暗褐色土（10YR3／4）ローム粒3%、5㎜以下のローム塊を少量含む、締りは強い。
3．暗褐色土（10YR3／4）ローム粒5%、大きめのロームブロックを多量に含む、やや軟質で締り有り。

SK－15
1．黒褐色土（10YR2／3）ローム粒を20%ほど含む、やや軟質で締りは強い。
2．褐色土（10YR4／4）ローム粒20%、3㎜～1㎝ほどの塊少量、赤色スコリアを微量含む、やや軟質で締りは強い。
3．褐色土（10YR4／4）ローム粒5%ほどとロームブロックを多量に含む、やや軟質で締りは強い。
4．黒褐色土（10YR2／3）と明黄褐色土（10YR6／6）の混合土、比率は4：6、やや軟質で締り有り。

SK－17
1．にぶい黄褐色土（10YR4／3）ローム粒3%ほどとロームブロックを多量に含む、やや軟質で締りは弱い。
2．黒褐色土（10YR2／3）3㎜以下のローム塊20%ほどとロームブロックを少量含む、やや軟質で締りは強い。
3．黒褐色土（10YR2／3）多量のロームブロックのみ、締りは強い。



第27図　土坑・出土遺物

ＳＫ－17（第27図，図版４・７）

調査区北方の５－Ｅグリット，３号墳の後円部周湟の北東外壁に掘り込まれたもので，北西方1.2mにＳＫ－15が隣接する。耕作による掘り込みによって中央部が切られていた。

遺構　開口部は東西を長軸とする233×61cmの長方形で，確認面はローム漸移層である。底面はローム層中にあり，平面は118×54cmの長方形，北の横穴部に向かって緩やかに下降する。深さは111cmで，壁はほぼ直立する。北側に底面より一段低く，高さ50cm，奥行60cm，長さ182cmほど抉り込んで横穴を設けている。周湟の埋没途中で掘り込まれていたが，詳細は明確にしがたい。埋積土は３層に大別され，暗褐色土，黒褐色土，ロームブロック層で上層のみ締りが弱い。

遺物　横穴部の北西奥に，底面直上より金銅製の耳環１点が出土した。埋積土を篩いがけしたが他の遺物は認められなかった。

２は金銅製の耳環で，銅に金メッキを施している。大きさは外径28.7×26.05mm，内径15.55mm。厚さ6.6mmの断面円形を呈する。重さ14.2ｇ。

４古代

土坑

今次調査では形状・埋積土等からＳＫ－14が古代に相当するものと考えられる。

ＳＫ－14（第27図，図版４）

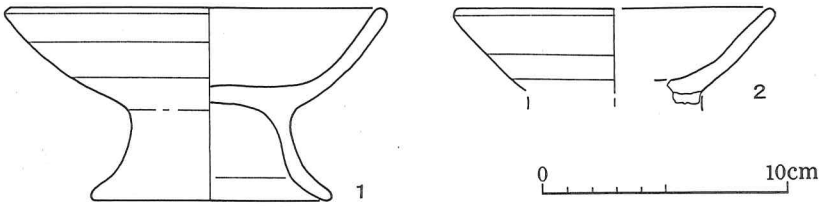
調査区北西の５－Ｂグリット，５号墳の周湟から墳丘テラスにかけて所在する。南側は周湟内にあって明確にし得なかった。

遺構　開口部は南北に長軸を持つ長方形と推定されるが，東西長は74cm，現在の南北長は約130cmである。確認面はローム漸移層である。底面はローム層中にあり，平面はほぼ同形で，東西長は70cm，深さ75cmで，壁は直立に近い状態である。埋積土は３層に大別され，上からローム塊を含む微妙な色差の暗褐色土で締りは強い自然埋没と思われる。

本跡の時期を示す出土遺物は無いものの，埋積土の状況などから古代のものと判断される。

調査区内出土遺物（第28図，図版７）

１・２は土師器高台坏。３号墳北西周湟内より出土した。１は口径15.3cm，底径9.6cm，器高7.9cm。坏部は底部から口辺部に向けて，内湾しながら立ち上がる。脚部は裾部が大きく開き，坏部に向かって立ち上がる。胎土に石英を多く含み，焼成はやや甘い。色調は橙色。２は口径12.9cm，坏部が１より直線的に開く。石英を多く含み粗い，焼成はやや甘く，色調はにぶい黄橙色。



第28図　調査区内出土遺物（古代）

5中・近世

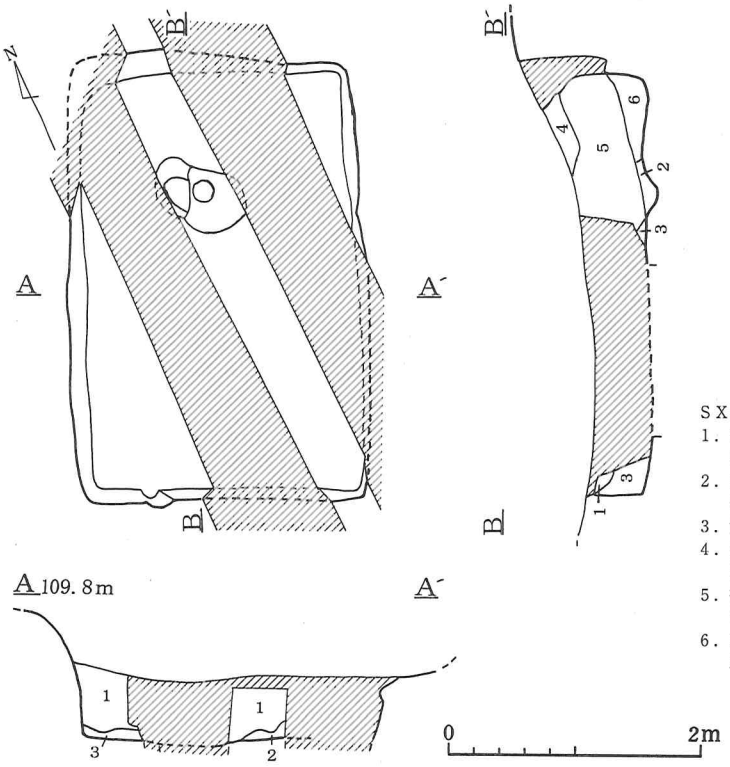
この時代の遺構は，方形竪穴，土葬墓，土坑が各1基と密度が希薄であり，遺物も3号墳の周湟内より少量出土したのみである。

方形竪穴（SX－1）（第29図，図版4）

調査区北西の4・5－Cグリットに跨って位置し，3号墳後円部北西の周湟と重複する。平行する耕作による深い掘り込みによって切られて遺存状態が悪い。

遺構　平面は360×236cmの隅丸長方形で，長軸方位はN－25°－Eを示す。確認面はローム漸移層で，底面はローム層中にあり，ほぼ平坦であった。壁はほぼ直立し，高さは北西で86cmである。南西壁に，外に張り出すように径25cmほどの柱穴が設けられているが，床面への掘り込みは3cmと浅い。前述の如き遺存状態であり，埋積土の判別も難しかったが，おおむねローム粒を多く含み，締りが強く，人為的埋没と考えられる。

遺物　埋積土中より，弥生土器，埴輪，須恵器，陶磁器片，ガラスなど多種であるが，いずれも流入もしくは撹乱による混入と判断されるもので，本跡に伴う遺物は無かった。



SX－1
1．黒褐色土（10YR2／3）ローム粒20%ほど、1～3mmの塊を少量含む、粘性はなく締りは強い。
2．暗褐色土（10YR3／3）ローム粒15%ほど、1mm～1cm程の塊を少量含む、やや軟質で粘性はなく締りは強い。
3．黄褐色土（10YR5／6）ローム粒5%ほど、1mm～1cmの塊を少量含む。
4．黒褐色土（10YR2／3）ローム粒10%ほど、軟質で粘性はなく、締りは弱い。
5．褐色土（10YR4／4）ローム粒30%、1mm～1cmの塊少量と赤色スコリアを微量に含む、粘性はなく締りは強い。
6．暗褐色土（10YR3／4）ローム粒30%、1mm～3cmの塊を多量と赤色スコリア少量を含む、軟質で粘性はなく締りは弱い。

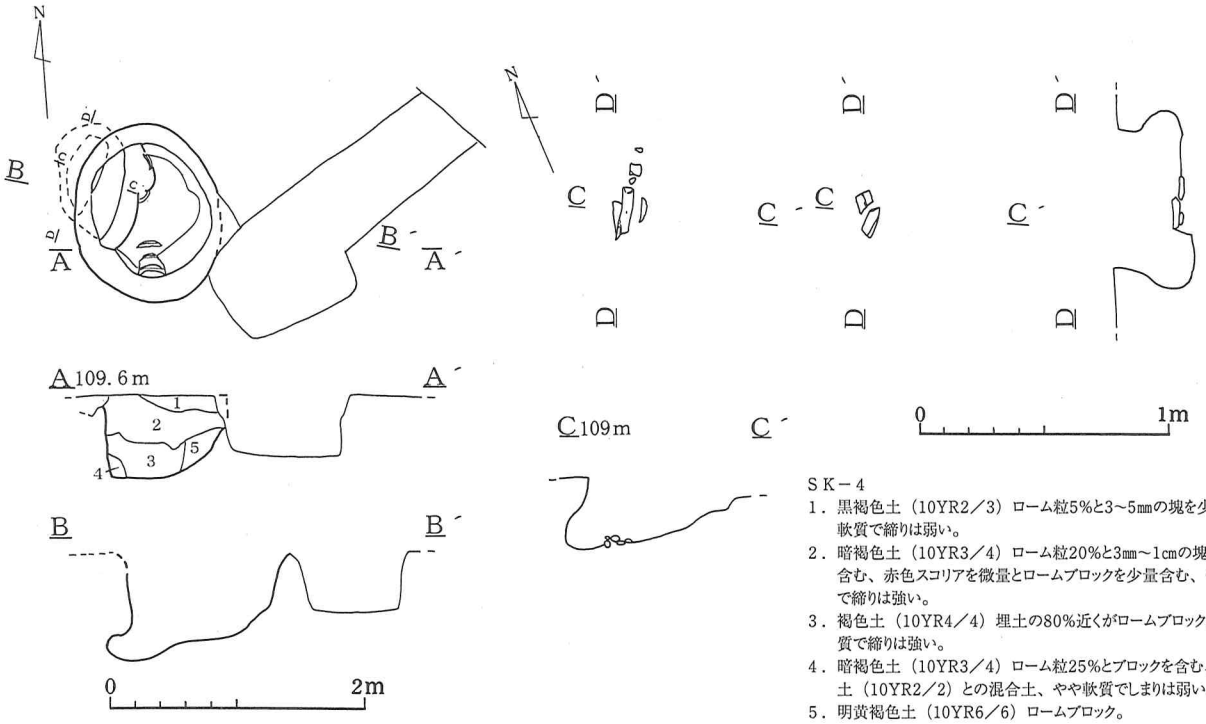
第29図　SX－1

土葬墓（ＳＫ－４）（第30図，図版３）

調査区北西部，１－Ｂグリットに位置し，３号墳のクビレ部周湟の西方約3.5ｍに隣接する。竪坑の南部の一部は近代の撹乱に切られ失われていた。

遺構　竪坑の開口部は142×109㎝の南北に長い楕円形である。ローム漸移層からほぼ垂直に約64㎝掘り込んだ後北西に向かって高さ23㎝，奥行39㎝，幅89㎝ほど抉り込み，横穴を設けていた。底面はローム層中にあり，横穴に向かってやや下降している。古代の同類の土坑に比して埋積土の締りが弱く，掘削も粗雑であることから，中・近世の遺構と推考した。また，横穴部より人骨片が出土したことから土葬墓と判断したが，遺存状態が悪く詳細は明確にし難い。

副葬品などの遺物は無かった。



ＳＫ－４
1．黒褐色土（10YR2／3）ローム粒5%と3～5㎜の塊を少量含む、軟質で締りは弱い。
2．暗褐色土（10YR3／4）ローム粒20%と3㎜～1㎝の塊を多量に含む、赤色スコリアを微量とロームブロックを少量含む、やや軟質で締りは強い。
3．褐色土（10YR4／4）埋土の80%近くがロームブロック、やや軟質で締りは強い。
4．暗褐色土（10YR3／4）ローム粒25%とブロックを含む、黒褐色土（10YR2／2）との混合土、やや軟質でしまりは弱い。
5．明黄褐色土（10YR6／6）ロームブロック。

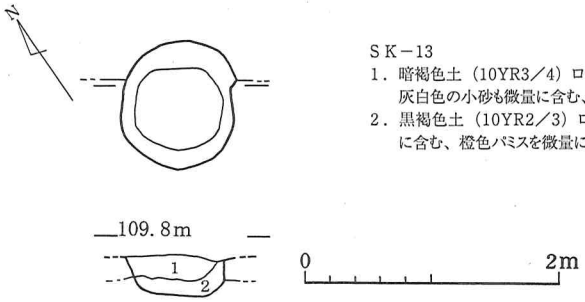
第30図　ＳＫ－４

土坑（ＳＫ－13）（第31図，図版４）

調査区北西，４－Ｂグリットに位置し，東方約4.5ｍに方形竪穴が隣接する。

遺構　開口部は100×88㎝のほぼ円形である。確認面はローム漸移層で，深さ31㎝。底面はローム層中にあり，径65㎝の円形でほぼ平らであった。壁は緩やかに外傾しつつ立ち上がる。埋積土は２層に大別され，上から暗褐色土，黒褐色土で締りは強く自然埋没と思われる。

遺物　埋積土中より，弥生土器片１，埴輪片２，陶器灰釉平鉢片１点が出土している。



ＳＫ－13
1．暗褐色土（10YR3／4）ローム粒20%と3～5㎜のローム塊を少量含む、灰白色の小砂も微量に含む、やや軟質で締りは特に強い。
2．黒褐色土（10YR2／3）ローム粒10%と3㎜～2㎝のローム塊を多量に含む、橙色パミスを微量に含む、やや軟質で締りは強い。

第31図　ＳＫ－13

Ⅳ　本村５号墳出土の埴輪

国士舘大学　　井　博幸

以下に報告する埴輪は、宇都宮市西原町に所在する本村（ほんむら）５号墳の調査において出土した遺物である。古墳は墳丘と周溝の一部が調査されたにすぎないため、その墳形や規模は不明である。調査範囲から推測される円丘部の内径は25～32mと想定される。

１．出土状況

数量的特徴　周溝覆土中や墳丘から出土した１㎠以上の埴輪片の総数は1023点である。これに、墳丘に樹立されていた埴輪を転用し、周溝の外縁に並行する土壙中に営まれた埴輪棺に使用された円筒埴輪（朝顔形円筒４個体、普通円筒13個体分）が加わる。

周溝覆土中の埴輪には形象埴輪と円筒埴輪がある。1023片の部位ごとの内訳は、口縁部60、基底部７、凸帯部分76、朝顔形頸部４、体部・不明837、線刻４、形象35点である。いずれも著しい細片となっており、器形的特徴の判明する個体は少なく、接合可能な個体も限定的である。これらは総じて焼成がやや甘く、表面が風化し脆くなったものが多い。出土傾向として周溝のほぼ中央部付近の覆土中に存在する傾向が認められ、調査区の南端付近と北東部付近に比較的集中していた（第32図）。墳丘内で樹立状態を保つものは存在しない。

埴輪棺への転用　埴輪棺に使用された埴輪が、墳丘に樹立されていたことの証明は、双方に認められるハケ工具の条線パターンの一致、形態的・技術的特徴の一致、周溝出土破片の一部が埴輪棺に使用された個体に接合する例が複数存在する（第32図１、３、14、15、19参照）などから証明される。

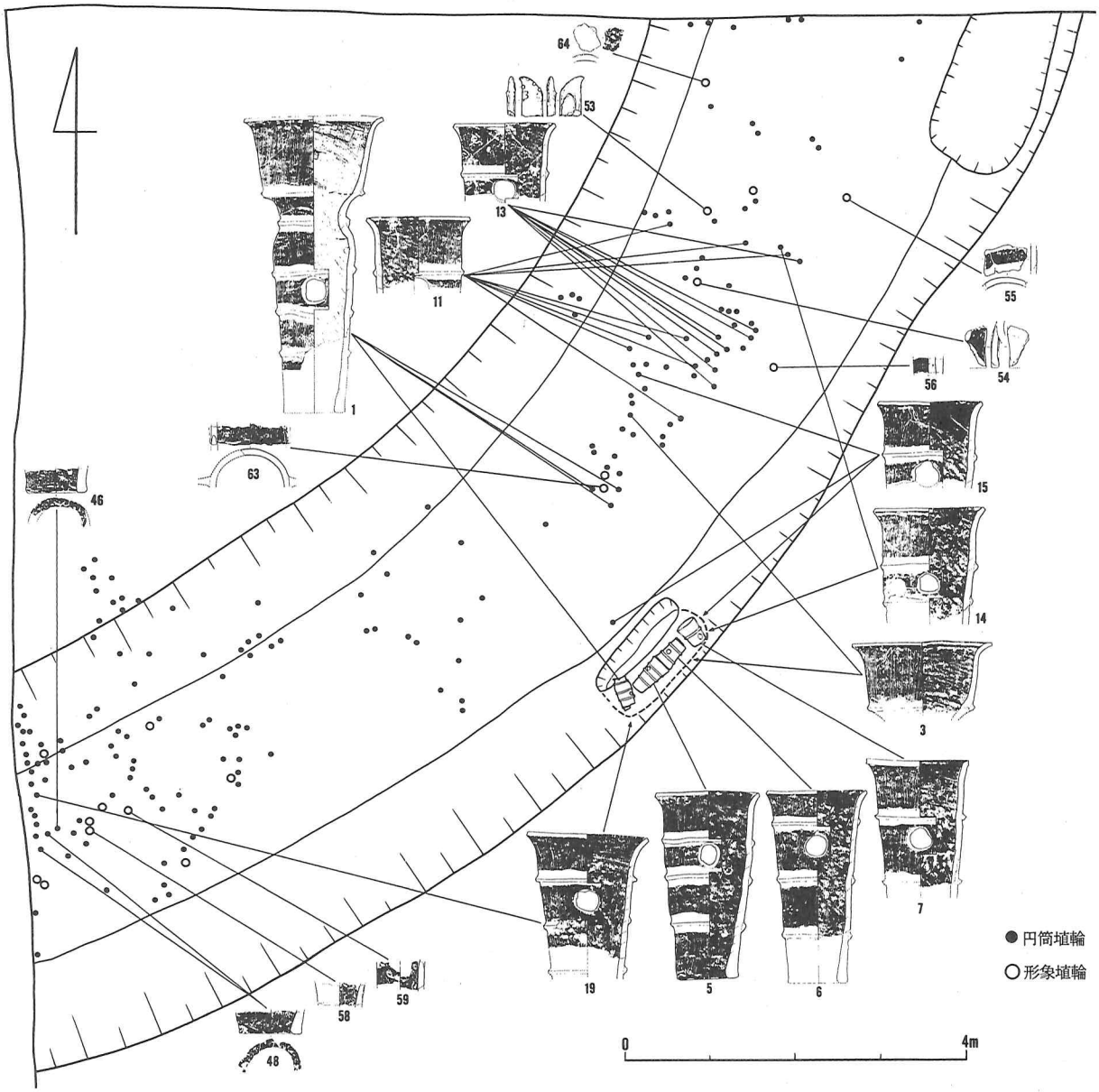
破片の接合関係をみると、埴輪棺と接合する破片は何れも小片で、出土地点は埴輪棺の北西側１～３m付近に集中する。これは、あらかじめ棺に使用される予定の埴輪が、埋葬地点の北西側に集められていたことを示唆している。そして、適当な大きさに割られ使用されたようだ。15の接合関係はそのような状況を裏付ける。

11、13は自然堆積したか、あるいは埴輪棺に使用する目的で集められたが使用されなかったかの何れかである。主に小片で構成されていること、散布範囲に広がりが認められること、焼成がやや甘い個体であるなどを考慮すると前者の可能性が高い。

形象埴輪　形象埴輪も細片となっており、全体の形を知りうる接合可能な個体は皆無であった。円筒の分布と類似した出土状況を示し、周溝の北東部付近には馬形埴輪の鏡板（53）、障泥（54）、脚の一部と考えられるもの（56）などが集中する。全体を構成する主要部分が存在しており、胎土特性や焼成の特徴も一致することから、これらは同一の個体に帰属する可能性が高い。出土地点付近の墳丘上に飾り馬が配されていたと推測してよかろう。なお、形態不明の破片（64）を、人物の肩部もしくは頭部と推測して誤りなければ、馬の近辺に人物（馬飼・馬子？）が存在していたことになる。

周溝の南限付近にも形象埴輪とみなされる復元径の小さい埴輪片が存在する。具体的な種別は不明であるものの、馬形と異なる形象埴輪が推測される。埴輪棺の西側付近では盾形（63）が出土した。

３号墳への移動　５号墳の南東に存在する３号墳（第３図）の周溝を中心とした覆土中からも、40点の埴輪片が出土している（24、33、34、50）。ハケ工具の条線パターンの一致、口唇部直下の外面に円形の刺突を施す破片の存在（33）などから、それらは全て５号墳から移動したものと確認された。破片中に特徴的な形態を有するものも存在するため、５号墳に関係する遺物として一括し、ここで報告することにした。



第32図　埴輪出土状況及び接合関係

2．出土埴輪

円筒埴輪

朝顔形円筒と普通円筒が存在する。埴輪棺には朝顔形円筒４個体、普通円筒13個体が使用されていた（第33～36図）。普通円筒１点が完形、朝顔形１点が略完形である以外は、上半部を中心にした再利用である。以下、通番号を使用し、部位・項目ごとに説明する。なお、器形的な特徴の明らかな個体に限って、稿末に遺物観察表を付す（表２）。分類の基準は以下の説明に準拠したものである。

規格　朝顔形には略完形の１点（１）、花状部のみの３点（２～４）がある。略完形の１は残存高59.5cm、円筒部は３条凸帯４段構成、第３段に１対の円形透孔を穿つ。基底部は遺存していないが、基底部を有する５・52などを参考にすると13～14cmの高さとみなされ、復元高は69～70cmと想定される。

普通円筒は３条凸帯４段構成の統一規格をもつ。完形で出土した５は器高43.7cmを計る。これは朝顔形円筒の頸部凸帯高の想定値にほぼ等しく、普通円筒の器高と朝顔形円筒の頸部凸帯の位置を揃えることが行われていた可能性もある。

完形の円筒を基準に他の個体を推測すると、普通円筒は概ね45cm以内とみなされ、6のみが45cmを超える器高を有していた可能性をもつ。口縁部径の平均は25cm前後、著しく大型や小型の個体は存在しない。

塚山古墳に代表される塚山系円筒埴輪〔秋元2001〕では、凸帯の設定位置を決定する設定技法が継続して採用されている〔米澤2005〕が、本墳の埴輪に凸帯間隔の設定技法が採用された形跡は認められない。凸帯上辺基部付近のL字形工具の圧痕、凸帯の剥離面にのこる凹線、基底部の底面付近にのこる横方向の擦痕、口縁部長設定線の全てが確認できないのである。そのため、各段の間隔は統一性を欠き、数値的にも非常に大きな差をもつ。個体によっては倍以上の間隔を示す例（6の第4段：18の第3段）さえある。段間隔や口縁部の間隔は工人の任意の判断によって決定されていたようだ。

朝顔形円筒　形態的特徴のわかる4個体（1～4）と破片（32、33、35、40）があり、器形・技術的に二つの類型が存在する。頸部を作出したのち先端に深い切込みを入れ乾燥期間をとるA類（1～3）、頸部先端に切込みを入れず乾燥期間をとるB類（4、32、33）である（図版13）。この2類型は形態的にも使用工具も異なる。A類はハケA種（後述、ハケ工具参照）を使用し、口縁部が比較的直線的に立ち上りながら口唇部を外反させ、内面に縦位の線刻を施す。一方、B類はハケB種を使用し、頸部から口縁部にかけて大きく外傾しながら立ち上り、口唇部直下の外面に径5㎜ほどの円形の刺突をほぼ水平に施す。口径はA類が32cm前後に統一されているが、B類は37cmとやや大型である。以上から、朝顔形円筒の製作に、技術系譜の異なる二人の工人が関係したことがわかる。この朝顔形の特徴は、そっくり普通円筒にも反映される。

形態　円筒埴輪は基底部を最小に口縁部に向かって次第に径を拡大し、口唇部直下で僅かに外反する特徴をもつ。外反の程度は個体によって多少異なるが、全体の側面形は比較的類似する。完形で遺存する5を参考に、底部径に対する口縁部・器高の比率を求めると1：1.7：3の数値がえられ、口縁部径に対する底径比は58％となる。他の個体は残存状態も悪く数値を求めえないが、概ね同程度の比率を示すものと推測される。当墳には口縁部の開きの小さい寸胴形の円筒は存在せず、最大の口径を有する19でも底径の約2倍程度と想定される。

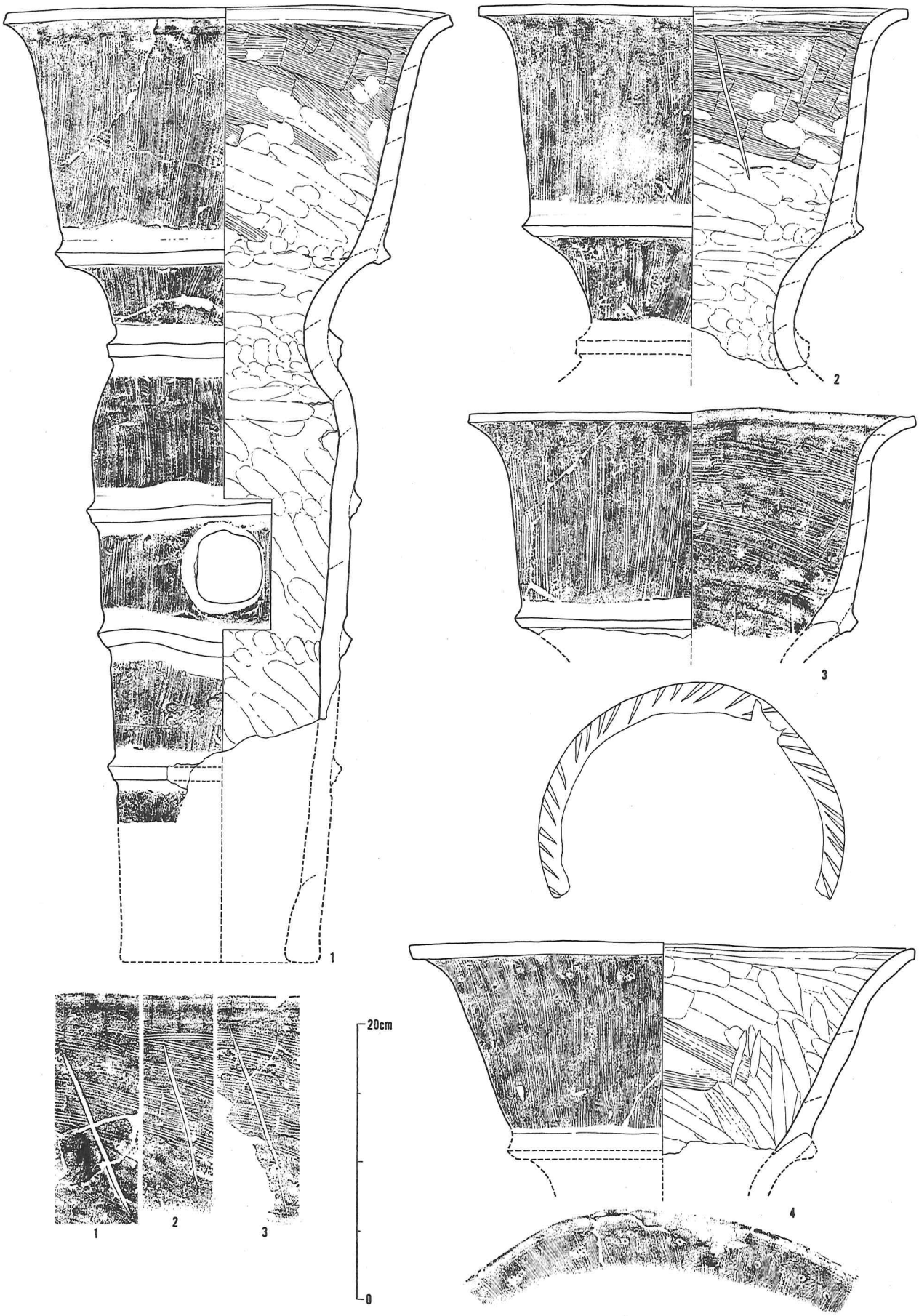
口縁部　口径は25cm前後で統一されている。最大は28.4cm（19）、最小は約24cm（11、13、21）である。口縁部の間隔は7.5cm（6）から13.7cm（11、14）、著しく個体差が大きい。

口唇部の断面形によって、A：大きく外反するもの（朝顔形：1～4、32、33）。B：緩く外反するもの（5～17、19、20、30、34）。C：口唇の下側に突起を伴うもの（18、20～22、35）。D：直線的に立ち上がるもの（36）に分類した。このうちB類は、指使いの違いによって発生する内面のごく緩い屈曲の有無から、B1とB2（14、23～28）に細分可能である。出現頻度の高いB類はハケA種とセット関係にあり、C類はハケC種に伴う。D類は十分な埴輪の知識を有しない非熟練工人の製作と考えられる。

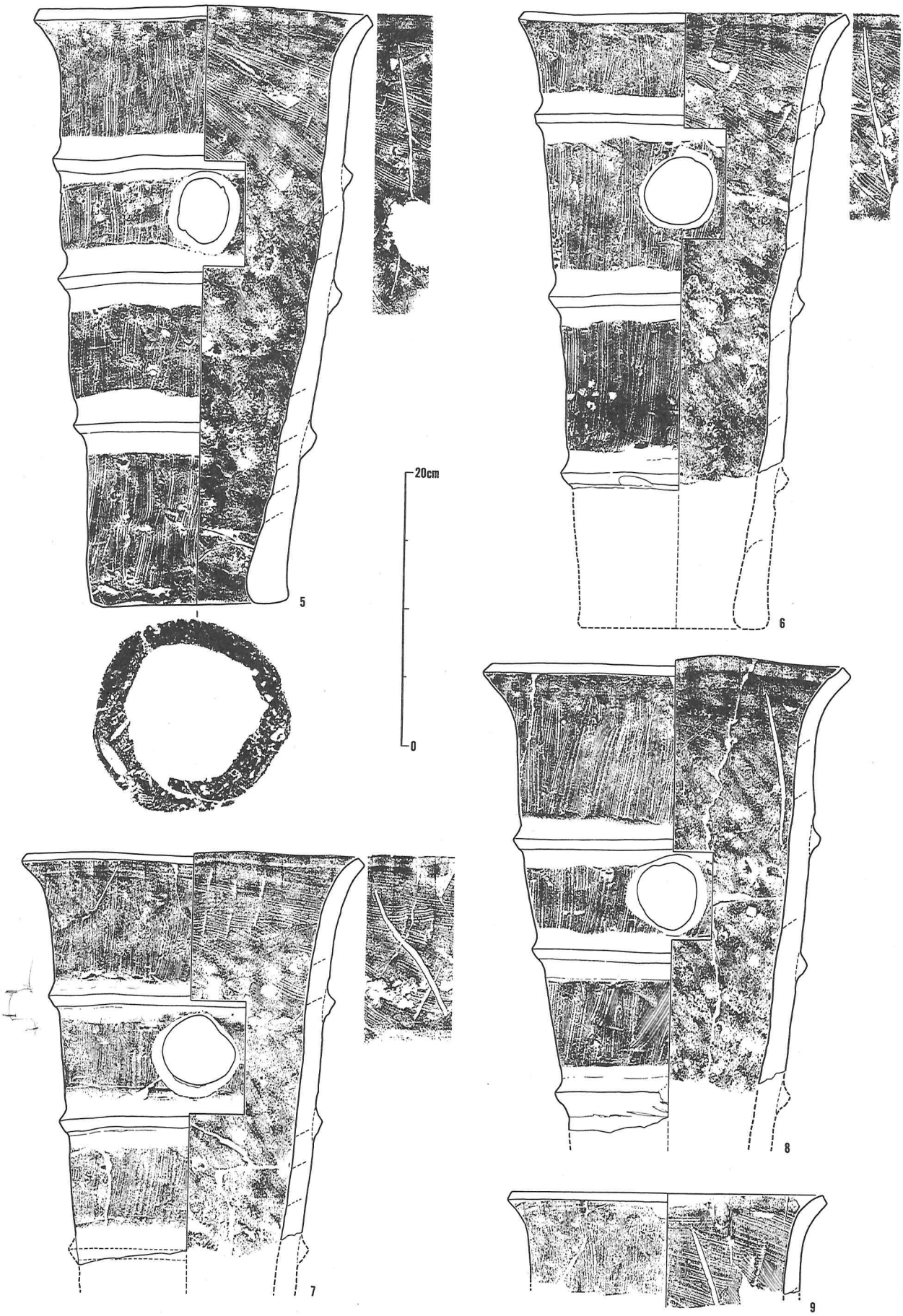
体部　円筒は3条凸帯4段構成のため第2・3段が体部となる。凸帯を伴う破片の多くが体部となる可能性をもつが、部位の特定は困難である。透孔は第3段に限って穿孔されている。塚山系円筒埴輪に特有の透孔周辺の線刻〔水沼1990；秋元1989、2001、2004；米澤2005〕は存在しない。

基底部　底径は14～15cmである。高さ5～6cmの著しく厚い基底板を使用し、基本的に「反の」字接合（5、46）する。器厚の最大は3cmに達する（5）。底面には、砂・石・土と考えられるブロックの圧痕が付着、一部に禾本科植物の痕跡がのこる。乾燥は土間の上で行われたと考えられ、乾燥用の特別な作業台の使用は認められない。50の外面の基底付近には縦ハケ作業以前に付着したとみなされる横方向の平行線を認める。木製作業台の上で基底版が製作されたことを示す痕跡であろう。

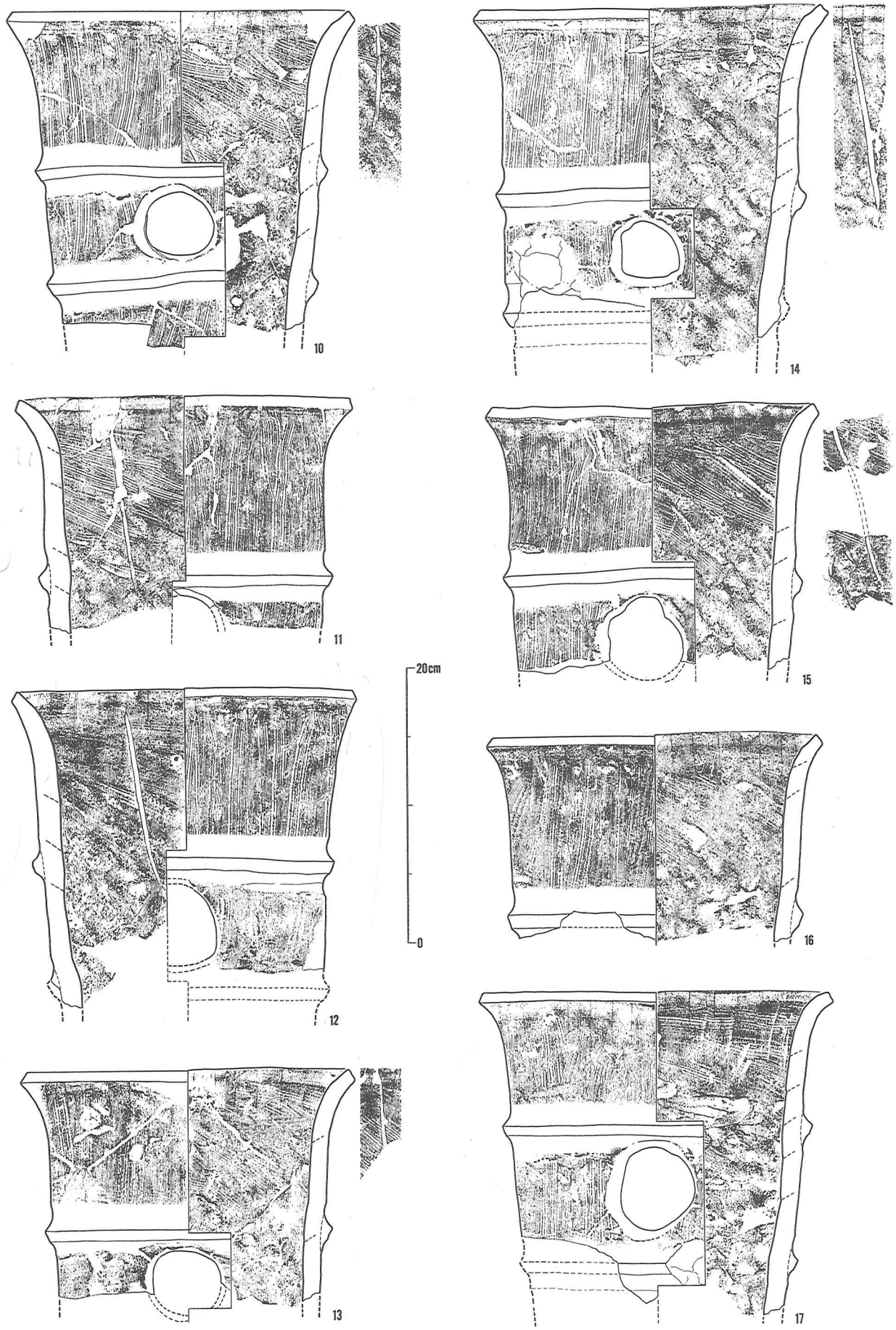
成形　粘土紐を2～2.5cmの厚さで積み上げる。粘土紐間の重ね合せは下部ほど薄く、上部に向かって重なりを厚くしている。粘土紐の接合痕を丁寧にナデ消すが、内面の一部に接合の痕跡が連続して残る例も存在する。



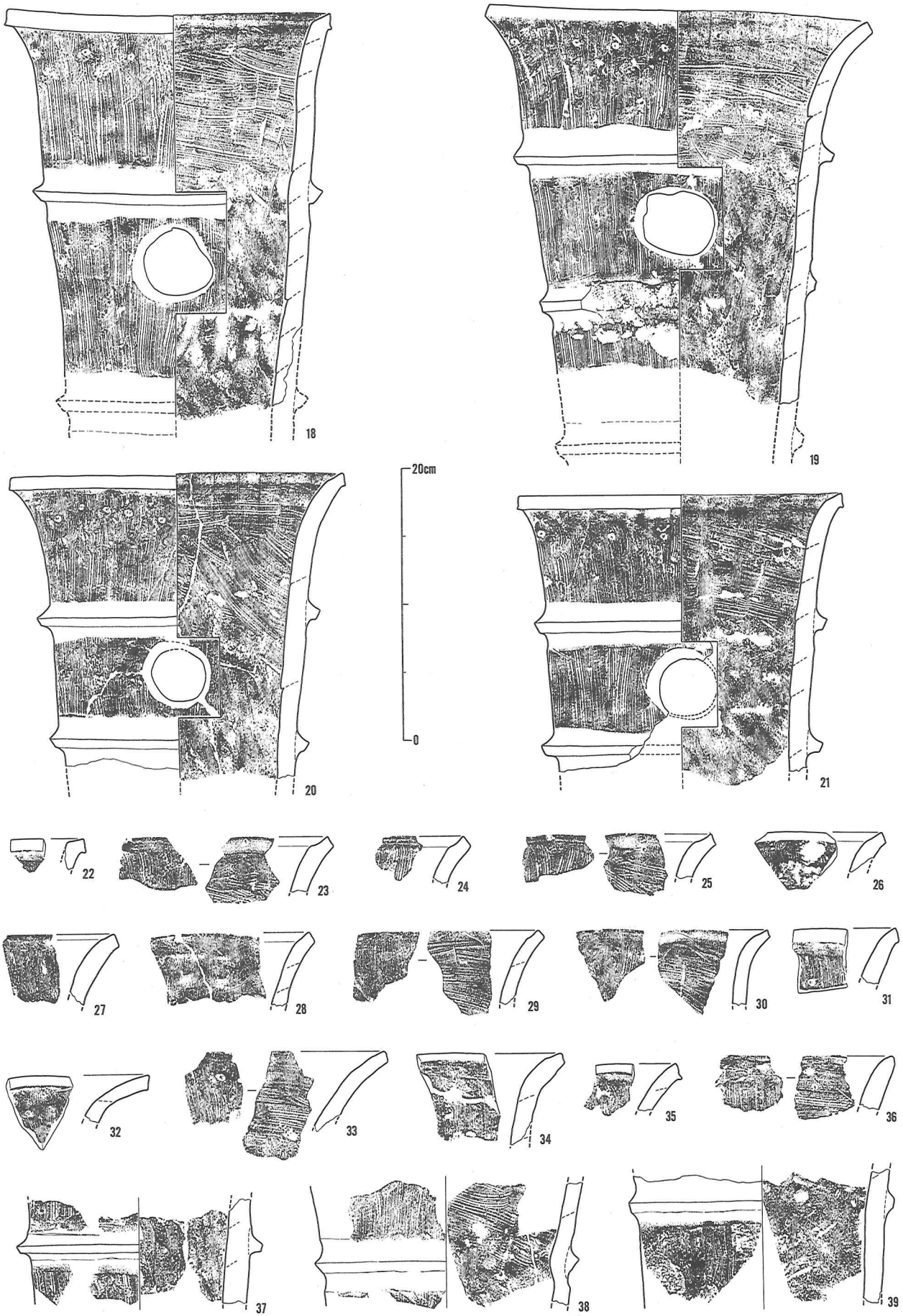
第33図　朝顔形円筒埴輪（1/4）



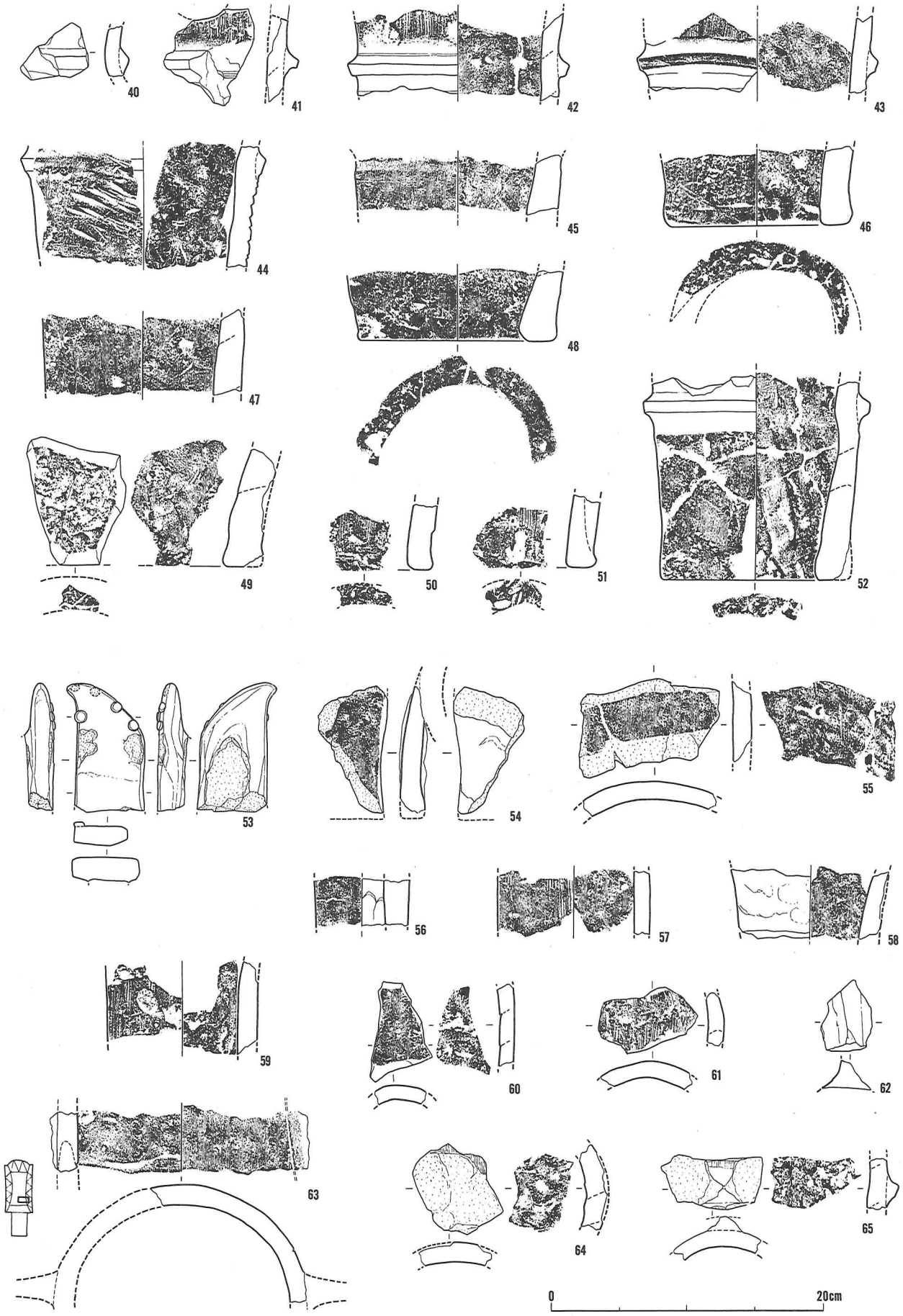
第34図　普通円筒埴輪（1/4）



第35図　普通円筒埴輪（1/4）



第36図　普通・朝顔形円筒埴輪（1/4）



第37図　円筒埴輪および形象埴輪（53～66）（1/4）

総じて丁寧な成形である。なお、41には粘土紐の接合痕に平行して水平方向の条線が存在する。この位置で乾燥期間が採られた可能性があり、接合を強固にするための工夫のようだ。

調整　外面調整はすべて縦ハケ、基本的に下→上に作業を行い、一次調整のみで終了する。
内面調整は基底部～体部が斜ナデ中心、口縁部には斜・横ハケを施し、口唇部の内外面は丁寧な横ナデで仕上げる。口縁部内面の調整にはハケ工具のほか条線の不明瞭なイタ工具も使用されている。外面および口縁部内面のハケ調整には同一の工具が使用されている。

全個体の凸帯の貼付位置に対応する内面には指頭圧痕が連続する。凸帯を貼付した際に内面から押さえた痕跡である。44の外面には、横方向に沿って器壁に大きな段差がつくほどに、工具を強く水平に押し当てた痕跡が連続する。亀裂を補修したと考えられる作業痕である（図版11）。

口唇部直下の円形刺突　複数個体の口唇部直下の外面に、ごく浅い径５㎜ほどの円形の刺突が2.5～５㎝の不規則な間隔で、ほぼ一線上に並ぶ例を確認した（４、18～21、31～33）。注意して観察しないと見逃してしまうほどに目立たない痕跡である。この目立つ必要のないことが刺突の目的に関係したらしく、かすかな痕跡が存在してさえいればそれで機能したか、あるいは消滅しても機能する目的のために付けられたとみられる。

刺突を仔細に観察すると、円形ではあるが完全な円形ではなく、芯部に円形の隙間をもつ材質を使用したものであることが判明している（図版13）。また、その形状から推測すると、刺突の外側の輪郭が明瞭でなく、しかも内部の輪郭も不明瞭であるため、シノダケ・ヤダケなどのような竹類を用いたのではなく、より軟質な材質が使用されたと考えられる。全体的に不明瞭な部分が多いため、材質の特定は困難であるが、芯部に空白を伴う落葉低木の枝が使用されたと考えられ、その候補としてウツギ・ヒメウツギ・ハギなど、工房の近辺に自生した手軽に利用できる材料が想定される。

刺突が行われた部位には、刺突点に被るように径２㎝ほどのごく浅いくぼみが存在し、縦ハケの痕跡が消されている。そのくぼみ中に指の指紋状のかすかな痕跡がのこる例もある。つまり、この円形の刺突は、その後に行われた何らかの作業（指を使用した）と連動することで機能したらしい。もっとも可能性の高い作業は刺突ライン付近に指をかけ、口唇部を外反させる作業である。

凸帯　Ａ：不等辺四辺形、Ｂ：台形、Ｃ：低い台形に分類する。発生頻度はＡ、Ｂ、Ｃの順に高い。

Ａ類では、上下稜が比較的明瞭に作出されているもの、下稜はごく緩く丸みを有するもの、下稜が殆ど認められず断面が三角形にちかいもの（38、40）に細分可能であるが、一つの類と捉えた。突出は７～９㎜である。Ｂ類は円形刺突を伴う個体に限って発生する。上下の稜も丁寧に作出され、突出は10～12㎜でＡ類よりも高い。Ｃ類は例も少なく、Ｂ類と同一個体の第２凸帯で観察されるため、Ｂ類の許容範囲内の変化形とすべきかもしれない。当墳ではハケ工具と凸帯の断面形態に強い相関関係が存在する。

凸帯は、粘土紐を貼付したのち、端面に相当する部位に工具を当て本体に強く押し付けて接着し、最後に布もしくは革を使用して横ナデで仕上げる。43の端面には凸帯に並行するハケ工具状の条線が観察される。上下面は横ナデ仕上げであるので、一部の個体では端面の調整にハケ工具が使用された可能性もある。

透孔　第３段のみに穿たれる。隅丸方形的なもの（１、14、19）、切込みが一定せずやや不定形なもの（15）なども存在するが、すべて円形の範疇である。当墳では方形や半円形は採用されていない。切込みは右回り（時計回り）を一般的とし、左回りは限定的（６、７）である。径は4.8～7.2㎝で、平均値は5.5～６㎝である。穿孔後にナデを施す。穿孔は内外面調整、および線刻が完了した最終段階に行われたようだ。

焼成　Ａ：良好、Ｂ：普通、Ｃ：やや不良に分類する。埴輪棺に使用された個体は良好な例が多く、周溝中に細片となって散布する個体はやや不良が大半を占める。埴輪棺には、意図的に焼成の良い比較的堅緻な個体が選

別されたことがわかる。

色調　図示した65点の、分類と色調ごとの確認点数は以下のとおりである。

A：にぶい黄橙色（10YR　7／3中心）27点　　B：にぶい橙色（7.5YR　6／4中心）18点

C：浅黄橙色（7.5YR　8／4中心）２点　　D：浅黄色（2.5Y　7／2中心）４点

E：灰白色（10YR　8／2中心）３点　　F：橙色（5YR　7／6中心）８点

G：にぶい赤褐色（5YR　5／4中心）２点　　H：明赤褐色（10YR　7／4）１点

にぶい黄橙色～にぶい橙色の橙色系を主体としており、褐色系の発色を呈するものは少ない。

胎土　基本的に類似する一種類の胎土で製作されている。比較的緻密な粘土が使用され、胎土中に細かい砂粒と径１cm前後の中型の岩石を比較的多く混入する。石粒は全て角を有する角粒で、灰～黒色系チャート粒の混入も多い。また、灰白色の凝灰岩状の岩石、集塊岩状を呈する石も多く確認される。全体的に厚手に成形されているため当墳の埴輪は大きさの割に重量感があり、完形で遺存する普通円筒（５）は7.0kgを計測する。

蛍光X線による胎土分析の結果、６（試料番号２）のみが他と異なる胎土を使用した可能性が示された〔本書、三辻分析参照〕。分析結果は尊重されるべきだが、肉眼観察では他の胎土との区別はつけ難く、形態・技術的にも類似している。ただ、口縁部の間隔に限れば他と異なる規格が採用されており、特異な存在である。

線刻　口縁部内面に、縦位・やや斜位に施される。比較的幅広の単線で、その断面形はゆるい角を有する。進行方向に並行する条線を伴うものも認められることから、内・外面調整に用いられたハケ工具の角を使用して施されたと考えられる。線の最長は18.8cm（５）、最短は10.5cm（７）である。

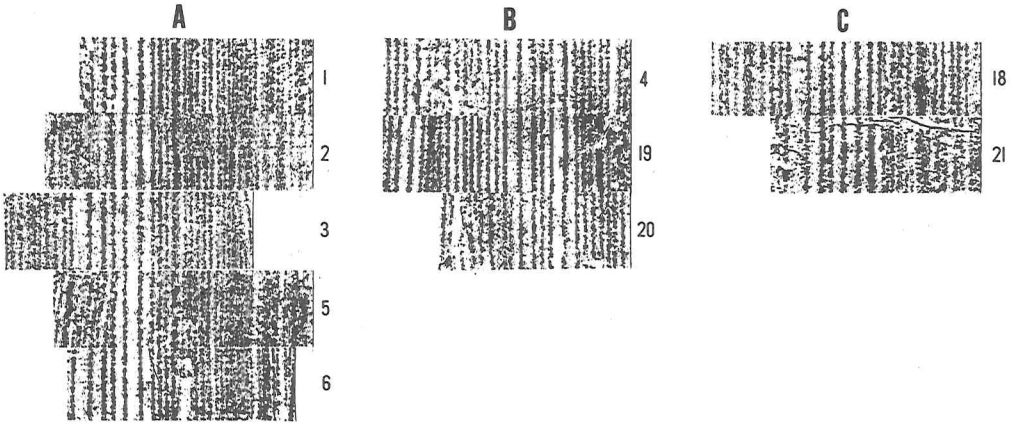
線刻はハケA種を使用する個体にのみ確認され、ハケB・C種を使用する個体には全く存在しない。埴輪棺に使用された上半部が完存する普通・朝顔形円筒埴輪の全てに線刻が存在し、確認は13個体に達した。20%程度の残存率の破片には線刻は存在しないが、本来、破損した部分に施されていた蓋然性が高い。おそらく、ハケA種を使用した個体の全てに同一の線刻が施されていたと考えられる。一方、ハケB・C種を使用し外面に刺突を施すB類は線刻を採用していない。なお、線刻は透孔を穿孔する以前に行われたことが５・６からわかる。

赤彩　７の第２段上半から口縁部までの内外は、赤彩が施されたように赤褐色に発色する。胎土も緻密で、外面のハケ工具の作業痕も他と比較して鮮明度に欠け、薄い泥漿が被っているように見える。この部分に赤彩が施された可能性があるが、円筒が完成した後に貼付された第１凸帯の発色が赤彩とみなされる部分と同じであることから、顔料を多く含む胎土が使用されたためと考えることもできる。そのため現状では赤彩か否かの判断を保留し、ここでは可能性の指摘に留めておく。

ハケ工具　A、B、Cの３種に弁別される（第38図）。ともに不規則な条線パターンを有し、比較的条間が明瞭な部分とごく緻密な部位に分かれ、A種の条線緻密は６～13条／cmである。３種類の工具の条間は僅かに異なるが、条線パターンがほぼ一致することから、同一の母材から製作された工具（兄弟工具）の可能性が考えられる。

A種の使用頻度が最も高く、線刻（記号）を伴う個体の全て（１～３、５～17）に使用され、図示した２／３以上の個体で確認した。B・C種は口唇部直下に刺突を伴う個体に限定して使用される。とくに、B種は朝顔形（４）と緩く外反する円筒（19、20）に、C種は特徴的な口唇部の形態をもつ２点（18、21）で確認した。

使用工具に属人性を認めれば、円筒埴輪の製作はハケA種を使用した工人が中心になって行い、複数の工人（３人以上）が関係したことになる。ハケA種使用個体では、工人の特徴が最も顕著に発現する口唇部の形状や凸帯の形態は大局的には一つの類型と捉えられるものの、細かく観察すると、指使いの違いによって微妙な形態差を有することが判明している（前掲、口縁部・凸帯参照）。また、極めて熟練度の高い個体（７）と、やや稚拙な状況が見てとれるもの（５、６）が存在しており、それらを同一工人の製作と認めるか否かも問題となってくる。



第38図　ハケ工具の分類（原寸）

形象埴輪

飾り馬　複数の細片が出土したが特徴の明らかな破片は少ない。ｆ字形鏡板（53）の外面には径８㎜の円形の貼付が３箇所に遺存する。先端付近の２箇所に剥離痕が、残存する鋲の下部にもほぼ相対する位置に何かが剥離した痕跡が認められるので、上半部を中心に７箇所に貼付されていたと考えられる。縁金の表現はなく、下半部では鋲の表現が省略されている。形態的には小山市飯塚42号墳例〔鈴木2001：第137図〕に近い。54は同一個体に伴う障泥とみなされ、55も曲率が大きいことから胸部もしくは臀部付近と推測される。

盾形　円筒本体をそのまま利用し側面に鰭状の粘土板を付け足し盾面となす（63）。側面付近に縦のややカーブする刻線を配するが、全体の施文は判然としない。破損部位付近で乾燥期間が採られた痕跡が断面中に明瞭にのこる。関東の後期に特徴的な形態〔志村2000〕である。

人物　明確に人物埴輪の特徴を有する破片は存在しない。馬形の破片が集中する付近から、曲面を多用する人物の一部となる可能性をもつ破片（64）が出土した。頭部、もしくは肩部などが想定される。

不明埴輪　56～59は円筒形に復元される破片であるが、径が小さいため円筒埴輪とはみなせない。上半部に向かって径が拡大するもの（58）もある。馬形の脚部、人物の脚・腕など他の形象に伴うと考えられるけれども、小片のため部位・種の特定は困難である。60、61は双方向にカーブする薄手の破片、62は大型で厚手の破片であるが本来の形は不明である。65の径は小さく凸帯状の貼付けがある。

以上から当墳には、馬、器財、人物（？）が伴うことがわかる。

３．成果と若干の考察

榛名二ツ岳渋川テフラ堆積層　周溝の調査では、６世紀初頭頃の降下と推定される榛名二ツ岳渋川テフラ層（以下Ｈｒ－ＦＡという）は検出されていない。その点、周溝の下層にＨｒ－ＦＡの堆積が確認された本村２号墳〔富川2004〕、塚山南古墳〔石部ほか2003〕より後出することは確かである。

埴輪棺に関して　埴輪棺に使用された埴輪は、墳丘に樹立されていた埴輪を転用したものであることが確認された。これは塚山古墳群中（射撃場内古墳）で検出された複数の埴輪棺に使用された埴輪が、塚山古墳の埴輪を転用したものであると推測した秋元の見解〔秋元2004〕を、間接的に追認する結果でもある。

検出された埴輪棺には、朝顔形円筒４個体（花状部中心）、普通円筒13個体が使用されていた。完形に近い個体は僅かであるが、極めて多くの埴輪を使用し、丁寧に被覆されていた。これまでに知られている栃木県内発見の埴輪棺と比較しても〔水沼2003；冨川2004〕、最多の個体数を使用した埋葬施設として特筆される。

埴輪棺の被葬者は、その規模から勘案して若年～幼年者であった可能性が高いとされる。周溝内埋葬と古墳本

体との関係についても、周溝内に覆土が若干堆積した時点に行われ、数年から１世代以内の期間内に営まれた可能性が高いという〔水沼2003〕。換言すれば、最初の埋葬が行われてから早いものでは数年以内に、墳丘に樹立されていた埴輪を抜き取って、埴輪棺として転用することが行われていたことを示唆する。本村５号墳もこの例にもれない。一般的な古墳（特別な首長墓以外）では、墓地として認識されてはいたものの、葬送儀礼が終了した後の比較的早い段階から、埴輪に対する意識は相当に低下していたことがわかる。

規格　普通円筒は３条凸帯４段構成の統一規格と考えられるが、例外的に18のみは２条凸帯となる可能性がある（現存高は約30㎝、口縁部と体部は約15㎝に規格されており、等間隔でさらに１条の凸帯を加えるとすれば、器高は著しく高くなる。一方、器高を約45㎝と推定し、約15㎝の間隔を凸帯で等分したとすれば、基底部と２段目の段間隔はそれぞれ７㎝前後ということになる。このように考えると、この個体に関しては２条凸帯の可能性も否定できない。八龍塚古墳〔秋元1989〕、塚山南古墳〔石部ほか2003〕、益子天王塚古墳〔岡内・山田編2005〕などで段数の異なる円筒埴輪が樹立される状況を考えると、あり得ることである）。

３条凸帯の類型は、雀宮牛塚古墳〔大和久1969〕、塚山西古墳など、中型の古墳に共通する規格でもある。透孔は円形で３段目のみに２孔が穿孔されており、秋元分類Ａ組列〔秋元2004〕の範疇である。凸帯の条数が階層性を反映した可能性があるとの指摘〔秋元2001〕を参考にすれば、比較的上位の階層と位置づけられる。

凸帯の条数に限れば中型の古墳に樹立された埴輪に類似し、透孔の数では２条凸帯の埴輪群（最も小型の類型）に共通する特徴が認められる。２条と３条凸帯の円筒埴輪が混在する塚山南古墳（帆立貝形、全長58.5m）〔石部ほか2003〕、八龍塚古墳（帆立貝形、全長約40m）〔秋元1989〕を定点に、時間軸を考慮することなく判断すると、理論上の墳丘規模は両古墳の後円部径を超えることになる。しかしながら調査は限定的で古墳の全貌も不明である。墳丘規模の確定が今後の課題となる。

円筒埴輪の器高に関して、ある程度の目安は存在したらしい。しかし、３条の凸帯を貼付する以外には、凸帯の間隔に関する統一規格が採用された様子は認められず、各工人の判断に任されていたようだ。厳密に設定技法を駆使し、規格性の高い埴輪を生産してきた塚山系円筒埴輪〔米澤2005、2006〕の伝統は、当墳の埴輪製作には受継がれていない。

当墳より後出すると考えられる壬生町富士山古墳の大型円筒には、凹線による凸帯の設定技法が採用され、規格性の高い円筒埴輪〔君島1998〕が製作されている。首長墓クラスの古墳と中・小型の古墳では埴輪製作組織の編成も異なっていたであろうことは想像に難くないが、なぜ本村５号墳で設定技法が採用されなかったのか、その理由は不明である。

形態的な特徴　朝顔形円筒埴輪Ａ類（１～３）の口縁部は外傾の程度がゆるく、その側面形は普通円筒の形態に比較的類似する。それは塚山古墳・塚山西古墳・塚山南古墳・八龍塚古墳などの先行古墳には存在しない特徴とみなされ、壬生町富士山古墳例〔君島1998：図版13〕に類似する形態として注目される。

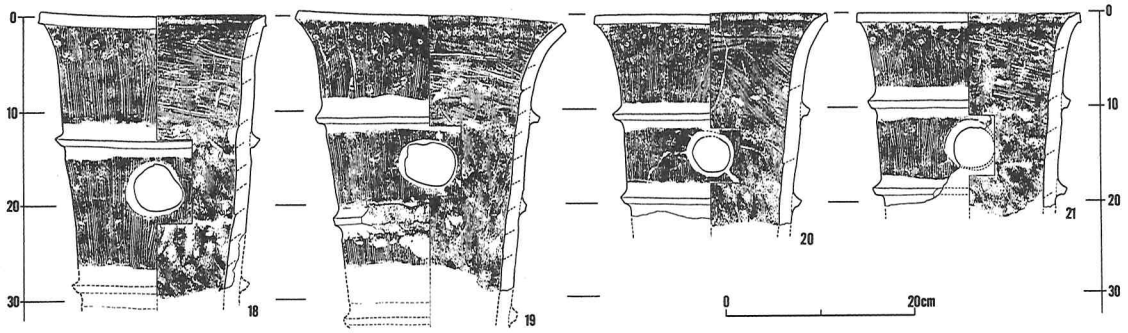
朝顔形円筒埴輪Ａ類に採用された、頸部先端に接合を強固にするための切込みを施したのち乾燥期間を採る事例は、塚山古墳段階から存在し〔石川ほか1979：写真40〕、塚山西古墳〔石部ほか2003：第13図10、第17図55、57〕、富士山古墳でも確認〔前掲　君島：図版17〕されている。一方、４に代表される口縁部が大きく開く朝顔形円筒Ｂ類は、これまでの塚山系朝顔形埴輪に普遍的な形態であるが、外面へ施された断続する円形刺突は初現の事例である。このように当墳で検出された朝顔形円筒には、形態と技法の属性に関して、既存と新出の技法がやや錯綜した状況で発現する。形態と技法から判断すれば、朝顔形円筒Ａ類と壬生町富士山古墳の朝顔形円筒〔君島1998：第30図〕は、同一の系譜を有する工人によって製作された可能性が高い。

なお、頸部先端を擬口縁状に作出したのち十分な乾燥期間をとり、口縁部との接合部の外面に凸帯を巡らす技法は、塚山系円筒埴輪はもちろん、富士山古墳、稲荷２号墳〔築木1985：第25図35ほか〕、上三川町西赤堀狐塚古墳〔井2005：第13図19〕など、埴輪祭祀終焉段階まで継続して採用された不変の技法である。

口唇部直下の円形刺突について　刺突はランダムになされているものの、一応、水平を意識して施されている（図版13）。刺突ラインを境に口唇部の外反が増すことを勘案すると、この刺突作業を一種の口縁部長の設定作業と考えることもできる。それ以前の塚山系の埴輪に認められたＬ字形工具痕や口唇部直下の凹線〔米澤2005〕による口縁部長の設定に変わる、簡便な手法が採用されたのかもしれないのである。しかし、既報告の塚山系の埴輪中には類例は存在しない。見落とされやすい痕跡であるため、他の古墳でも採用された可能性は否定できないが、当墳以前に類例が存在しないとすれば新しい方法と考えられ、この方法を採用した埴輪工人の出自が問題となる。円形刺突を施す個体のすべてに線刻が伴わないことを重視すれば、両者の間に何らかの相関関係が存在した可能性がある。すなわち、製作者の出自・系統、あるいは個人を示す記号としての意図である。

類似する刺突として、前期古墳の凸帯の間隔設定に採用された刺突による設定技法〔鐘方1997；辻川1999〕がある。関東では神奈川県小金塚古墳の円筒埴輪〔久保ほか1985〕に確認される技法で、前方後円墳集成編年３期～４期〔山口2003〕と想定されている。この技法は凹線を採用する以前に盛行し、中期初頭ころまで残存するとされる〔鐘方、辻川　前掲書〕。本村５号墳との間には大きな時期差が存在し、かつ、その間を埋める事例も確認されていないため、これらに関連性を認めることにはできない。なぜ、前期の事例に類する技法が存在する（復活した？）のか、その理由は判然としない。

口縁部の長さを設定する目的を有していたのであれば、他の段間隔の設定にも採用された可能性が高くなる。以下に、その可能性の当否を探るため、口縁部を揃えた比較図を示す（第39図）。19と20は数値的に比較的近い段間隔を示すが、用具を使用しての段間隔の設定を前提に考えると、統一された規格とみなすにはやや誤差が大きい。18と19では極端に異なる段間隔が採用されており、18は２条凸帯の可能性を有する特異例でもある。また、18と21は同工品の可能性が高いにも関わらずその規格性は全く異なる。第39図からも判断されるように、段間隔に厳密な統一性・規格性が存在したとは考えられない。そう認めてよければ、この刺突の目的は、刺突を行った位置に深く関係するか、それともそれ以外の目的のため付されたと考えるのが素直であろう。既に述べた外反ポイントを確認する目的のほか、製作工人を示す目印としての機能も候補のひとつであるが、現時点でその機能・目的の特定は控えたい。今後の類例の増加に期待する。



第39図　口唇部直下に刺突を伴う普通円筒埴輪の段間隔の比較（1/8）

線刻　当墳の線刻は、全て内面に施された縦位・斜位の単線である。本村２号墳では、透孔周辺に銀杏葉形・交差形・放射形などの線刻が存在するものの、内面への線刻は外面に比べ限定的で、２条の斜行線を中心にした一群に限定される〔富川2004〕。塚山系円筒埴輪中には内外に線刻を施す例は確認されていないことから、内・外のどちらかに行うことで、線刻の目的は達成されたのである。

現時点の認識では、外面への銀杏葉形線刻の最終事例は本村２号墳・塚山南古墳と想定され、５世紀終末～６世紀初頭頃と推定されている〔秋元2004〕。一部、下桑島西原２号墳例のように口縁部外面に斜行線を施すことも行われたが〔今平・簗木1992〕、確認は限定的である。内面のみに線刻を有する本村５号墳と下桑島西原２号墳の先後関係は不明だが、この頃を境に内面に施される方向へと変化したようだ。塚山系埴輪工人集団の解体に伴う、新たな方法が採用されたためと考えられる。

４．小結

県央部に特徴的な塚山系円筒埴輪に関しては、優れた先行研究があり〔石川ほか1979；増田1987；水沼1990；秋元2001、2004；石部ほか1995、2003；冨川2004；米澤2005、2006；小野本2005〕、比較的その系統が明らかになっている。本墳の埴輪を形態・技法などから総合して判断すると、第３段のみに透孔を穿つ特徴など、塚山系円筒埴輪の属性の一部〔秋元2004〕は残存するものの、塚山系を規定してきた特徴が廃止され、新しい技法を中心に採用されたことがわかる。このことは、本村２号墳や塚山南古墳以降、塚山系の埴輪工人集団は一旦解体され、新たな首長の管掌のもと、埴輪製作集団の再編が行われたためと推測される。本村５号墳の埴輪製作に、これまで関わりをもった塚山系とはやや異なる、新手法を駆使する工人（集団）が関係した可能性が高いのである。

塚山系埴輪工人集団の解体には小山市付近の新興の勢力〔秋元1989；秋元・斉藤2001〕が関与したと考えられる。塚山古墳群の規模が縮小化の傾向を辿るのとは反対に、突如として塚山古墳を凌駕する規模の摩利支天塚古墳（121m）や琵琶塚古墳（123m）など、下野における最高首長墓とみなされる古墳を連続して出現させた〔秋元・大橋1988〕ことからも明らかである。ここに埴輪生産の管掌権は移行し、新たな生産体制が確立されたと考えられる。

摩利支天塚古墳や琵琶塚古墳の埴輪は、秋元分類第３段階と捉えられ、４・５条凸帯の採用とともに、塚山系円筒埴輪が他の影響を受け変容する段階と位置づけられている〔秋元2004：76〕。米澤の分析でも、埴輪製作集団が新しい技法を中心に再編成された第３・４段階に相当する〔米澤2005〕。本村５号墳の埴輪は、このような状況のもとに製作されたと推測されるのである。編年的にはＭＴ15～ＴＫ10併行期と想定され、円筒埴輪の形態的特徴などから、琵琶塚古墳に近い位置づけが妥当と判断される。それは秋元の第３段階を細分した米澤の第４段階、すなわち、新しい製作者集団へと変化した段階〔米澤　前掲書〕に相当する。

出土した馬形埴輪の鏡板はｆ字形を呈する。縁金の表現を欠き、下半部の鋲を省略するなどやや簡略化の傾向が認められるものの、全体的に丁寧に作出され比較的実物を忠実に模倣して製作されており、６世紀代後半まで降る形態とは考えられない。埴輪以外に古墳の築造年代を推定しうる遺物は検出されていないため、具体的な特定は不可能な状況だが、これまでの埴輪研究の蓄積を参考に判断すると、古墳の築造年代は、６世紀代前半の範囲内と推定してよいのではなかろうか。

謝辞　出土埴輪の観察と報告は、水野順敏・三輪孝幸氏の配慮によって実現した。埴輪の撮影と紙焼きを大門直樹氏にお願いした。秋元陽光・米澤雅美氏より塚山系円筒埴輪に関する多くの教示をうけ、とくに秋元氏からは貴重な文献の提供を受けた。記して感謝を申しあげる。

引用文献（本書内共通）

秋元陽光　1989　『八龍塚古墳』上三川町教育委員会
2001　「栃木県における円筒埴輪編年（試論）」『埴輪研究会誌』５：１－６.
2004　「栃木県南部における円筒埴輪の一様相」『栃木県考古学会誌』25：55－80.

秋元陽光・大橋康夫　1988　「栃木県南部の古墳時代後期の首長墓の動向」『栃木県考古学会誌』9：7－39.
秋元陽光・斉藤恒夫　2001　「栃木県」『中期古墳から後期古墳へ』東北・関東前方後円墳研究会発表要旨資料：41－62.
井　博幸　2005　「西赤堀狐塚古墳出土の埴輪」『西赤堀狐塚古墳第２次調査報告』上三川町教育委員会：19－33.
石川　均・常川秀夫・大金宣亮・熊倉直子　1979　『塚山古墳群』栃木県埋蔵文化財調査報告書第32集、栃木県教育委員会
石部正志・安部知己・斉藤恒夫・和田直子・神山悦子ほか　1995　「塚山古墳外形確認調査報告」『峰考古』9
石部正志・安部智之ほか　2003　『塚山西古墳・塚山南古墳』宇都宮市埋蔵文化財調査報告書第48集、宇都宮市教育委員会
大和久震平　1969　『雀宮牛塚古墳』宇都宮市埋蔵文化財調査報告書第１集、宇都宮市教育委員会
岡内三眞・山田俊輔編　2005　『益子天王塚古墳の時代』早稲田大学会津八一記念博物館
小野本敦　2005　「古墳時代中期における埴輪製作集団の地域間交流―線刻の検討から―」『溯航』23：59－71.
鐘方正樹　1997　「中期古墳の円筒埴輪」『史跡・大安寺旧境内１』奈良市教育委員会：407－417.
君島利行　1998　『富士山古墳』壬生町埋蔵文化財調査報告書第14冊、壬生町教育委員会
久保哲三・中野　隆・茂木克美ほか　1985　「伊勢原市小金塚古墳調査報告」『専修考古学』2
今平利幸・簗木　誠　1992　『下桑島西原古墳群』宇都宮市埋蔵文化財調査報告書第30集、宇都宮市教育委員会
志村　哲　2000　「関東における盾形埴輪について―群馬県を中心にして―」『埴輪研究会誌』4：121－128.
鈴木一男　2001　『飯塚古墳群Ⅲ　遺物編・遺構編』小山市文化財調査報告書第44集、小山市教育委員会
辻川哲朗　1999　「円筒埴輪の突帯設定技法の復元―埴輪受容形態検討の基礎作業として―」『埴輪論叢』1：1－16.
冨川　勉　2004　『本村遺跡（弥生・古墳編）』宇都宮市埋蔵文化財調査報告書第49集、宇都宮市教育委員会
中村享史　2004　『東谷・中島地区遺跡群４』栃木県埋蔵文化財調査報告書第283集、栃木県教育委員会
増田玲子　1987　「栃木県出土の考古資料（一）古墳時代―小林清氏寄贈の考古資料について」『学苑』576：34－49.
水沼良浩　1990　「塚山古墳群とその周辺」『古代』98：129－150.
　　2003　「栃木県内発見の埴輪棺について」『栃木の考古学』塙静夫先生古希記念論文集刊行会：251－268.
山口正憲　2003　「相模沿岸―秋葉山古墳群を中心に―」『東日本における古墳出現について』東北・関東前方後円墳研究会発表要旨資料：11－26.
簗木　誠　1985　『稲荷古墳群』宇都宮市埋蔵文化財調査報告第17集、宇都宮市教育委員会
米澤雅美　2005　「塚山系円筒埴輪の系統関係」『溯航』23：39－57.
　　2006　「塚山古墳群の埴輪製作集団」『埴輪研究会誌』10：51－73.

番号	出土地点	種別	焼成	色調	口唇形	穿孔方向	凸帯形態	ハケ種別	線刻有無	器高	口径	第1段間隔	第2段間隔	第3段間隔	第4段間隔	その他・備考
1	埴輪棺	朝顔	A	BF	A	右回	A	A	有	(59.5)	32.5	－	9.7	9.5	10.5	略完形、蛍光X線分析1
2	〃	〃	A	B	A			A	有		31.4					口縁部長15.7
3	〃	〃	B	B	A			A	有		32.8					
4	〃	〃	B	FH	A			B	無		37.0					外面に円形刺突
5	〃	円筒	A	F	B	右回	A	A	有	43.7	24.7	12.5	10.5	8.5	11.3	底形14.3、完形
6	〃	〃	BC	G	B	左回	A	A	有	(35.0)	25.0		12.8	13.3	7.5	蛍光X線分析2
7	〃	〃	A	B	B	左回	A	A	有	(29.5)	25.3		9.5	9.2	10.5	赤彩の可能性
8	〃	〃	A	A	B	右回	A	A	有	(33.0)	26.8		10.3	8.3	12.2	
9	周溝	〃	A	B	B	－		A	有		23.3					残存率15%
10	埴輪棺	〃	A	B	B	右回	A	A	有	(25.3)	25.2			8.0	11.8	
11	周溝	〃	B	A	B	不明	A	A	有	(17.0)	24.3				13.4	
12	埴輪棺	〃	BC	A	B	不明	A	A	有	(23.3)	〈25〉			8.7	13.0	
13	周溝	〃	C	A	B	不明	A	A	有	(17.5)	24.0				11.6	
14	埴輪棺	〃	A	A	B	右回	A	A	有	(26.0)	26.0			8.8	12.1	
15	〃	〃	C	C	B	－	A	A	有	(19.5)	24.4				12.5	
16	周溝	〃	C	A	B	－	A	A	－	(15.0)	24.4				13.5	残存率20%
17	埴輪棺	〃	A	A	B	右回	A	A	－	(23.3)	26.0			10.0	10.0	
18	〃	〃	A	A	C	右回	B	C	無	(29.5)	23.8			15.0	13.3	2条凸帯の可能性
19	〃	〃	A	G	B	右回	BC	B	無	(28.5)	28.4			10.2	10.6	
20	〃	〃	B	A	BC	右回	B	B	無	(20.5)	24.7			9.0	10.5	
21	〃	〃	A	F	C	右回	B	C	無	(20.5)	24.0			9.2	9.5	残存率20%

（　）現存値、〈　〉復元値、段間隔は平均値を採用、単位cm

表２　本村５号墳出土埴輪観察表

V　本村５号墳出土埴輪の蛍光Ｘ線分析

大阪大谷大学　　三辻利一

本村５号墳から出土した埴輪片の蛍光Ｘ線分析の結果を報告する。

分析値は表３にまとめてある。全分析値は同時に分析した岩石標準試料、JG−1の各元素の蛍光Ｘ線強度をつかって、測定された各試料の蛍光Ｘ線強度を標準化した値で表示してある。

表３の結果はまず、Ｋ−Ca、Rb−Sr　の両分布図上にプロットされる。両分布図は大きな地域差はもちろん、小さな地域差も有効に表すことがこれまでの研究で示されている。第40図に本村５号墳出土埴輪の両分布図を示す。よくまとまって分布していることがわかる。よくまとまって分布するということはこれらの埴輪の胎土が同じであることを示している。外見上は白色味を帯びた埴輪片と橙色味を帯びた埴輪片があるが、表３をみると、橙色味を帯びた埴輪片にはFe量が若干多いことがわかる。酸化焔焼成のため、酸化第二鉄の色が出たものと思われる。しかし、この程度の差では粘土の違いとは言い難く、K、Ca、Rb、Srの長石系因子が同じであることから、同じ粘土を素材として製作した埴輪であると判断される。Fe因子が地域差を表す場合もあるが、一般的に地域差を有効に表さない場合が多いことがこれまでの研究で示されている。

また、外見観察上、凝灰岩状の岩石を含む胎土があるということであるが、分析データにはほとんど差異は認められないことがわかる。粘土自体が凝灰岩に由来するためであるからかもしれない。

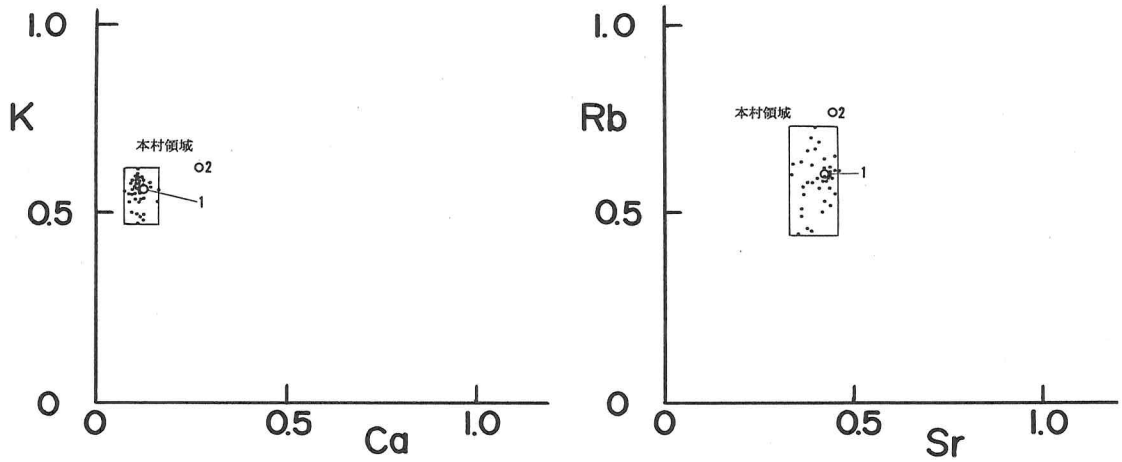
いずれにしても、凝灰岩を含む、含まないに関係なく、また、色調が白色（浅橙色〜にぶい黄橙色）か、やや橙色かにも関係なく、素材粘土は同じであると判断された。したがって、同じところで製作された埴輪である可能性が高い。その産地については今回の分析データだけでは推論できない。もし、本村５号墳出土埴輪の胎土が２号墳の埴輪胎土と同じであれば、本村古墳群周辺で製作された埴輪である可能性が高いという推論がなりたつ。さらに、宇都宮市周辺の古墳群の埴輪の胎土との問題もでてくる。現時点では比較材料が不足しているため、そこまで論じることはできない。

なお、朝顔形円筒埴輪（１：本書井報告・第33図１参照）と普通円筒埴輪（２：井報告・第34図６参照）の両分布図を第40図中に白抜円で示す。朝顔形円筒埴輪は両分布図で本村領域に分布し、他の埴輪試料片と同じ胎土であることを示している。しかし、№２の普通円筒埴輪は本村領域をずれており、胎土が異なることがわかる。したがって、別場所で作られた埴輪である可能性が高い。何故、№２の普通円筒埴輪の胎土だけが異なるのか、興味深い問題であるが、その理由は現時点ではよくわからない。

表３　本村５号墳出土埴輪の蛍光Ｘ線分析データ（分析試料はすべて円筒埴輪と考えられる）

試料番号	分析番号	K	Ca	Fe	Rb	Sr	Na	その他
1	18-1350	0.562	0.118	1.29	0.597	0.434	0.270	朝顔形円筒･埴輪棺
2	1351	0.622	0.260	1.59	0.770	0.446	0.224	普通円筒･埴輪棺
3	1352	0.544	0.122	1.57	0.547	0.446	0.244	周溝覆土中
4	1353	0.577	0.135	1.53	0.605	0.438	0.246	〃
5	1354	0.568	0.098	1.21	0.601	0.444	0.252	〃
6	1355	0.596	0.099	1.16	0.641	0.426	0.249	〃
7	1356	0.579	0.113	1.24	0.613	0.455	0.268	〃
8	1357	0.592	0.114	1.16	0.648	0.456	0.242	〃
9	1358	0.530	0.113	1.64	0.522	0.438	0.265	〃
10	1359	0.589	0.111	1.90	0.568	0.365	0.215	〃

試料番号	分析番号	K	Ca	Fe	Rb	Sr	Na	その他
11	1360	0.574	0.137	1.80	0.565	0.409	0.235	(白色味)
12	1361	0.584	0.098	1.27	0.589	0.435	0.233	〃
13	1362	0.534	0.078	1.37	0.552	0.369	0.207	〃
14	1363	0.548	0.092	1.37	0.635	0.365	0.228	〃
15	1364	0.585	0.106	1.29	0.623	0.425	0.233	〃
16	1365	0.575	0.117	1.05	0.732	0.402	0.268	〃
17	1366	0.551	0.100	1.09	0.580	0.395	0.243	〃
18	1367	0.491	0.119	1.68	0.499	0.422	0.264	(橙色味)
19	1368	0.490	0.115	2.44	0.461	0.378	0.249	〃
20	1369	0.475	0.108	2.42	0.451	0.392	0.251	〃
21	1370	0.587	0.120	1.42	0.609	0.464	0.262	(白色味)
22	1371	0.579	0.104	1.35	0.588	0.430	0.233	〃
23	1372	0.601	0.104	1.19	0.585	0.420	0.259	〃
24	1373	0.618	0.102	1.15	0.588	0.434	0.256	〃
25	1374	0.577	0.102	1.25	0.591	0.441	0.261	〃
26	1375	0.489	0.112	1.57	0.520	0.441	0.278	〃
27	1376	0.543	0.097	1.28	0.569	0.440	0.238	〃
28	1377	0.561	0.110	1.32	0.533	0.426	0.245	〃
29	1378	0.560	0.068	1.69	0.487	0.360	0.226	〃
30	1379	0.477	0.118	2.34	0.442	0.355	0.257	(橙色味)
31	1380	0.536	0.160	1.93	0.633	0.345	0.207	〃
32	1381	0.555	0.110	1.14	0.673	0.400	0.253	〃
33	1382	0.571	0.106	1.09	0.634	0.390	0.258	〃
34	1383	0.536	0.113	1.21	0.576	0.386	0.237	〃
35	1384	0.560	0.166	1.47	0.740	0.390	0.224	〃
36	1385	0.582	0.091	1.30	0.587	0.410	0.237	〃
37	1386	0.554	0.094	1.10	0.665	0.380	0.235	〃
38	1387	0.566	0.111	1.02	0.692	0.411	0.258	〃
39	1388	0.550	0.089	1.73	0.597	0.336	0.194	〃
40	1389	0.496	0.088	1.40	0.510	0.371	0.204	〃



第40図　本村５号墳出土埴輪の両分布図

Ⅵ　まとめ

今次調査の結果，縄文時代から中・近世に至る遺構・遺物が検出され，その概要については各章で述べたとおりである。また，５号墳出土の埴輪については国士舘大学イラク古代文化研究所　井　博幸，大阪大谷大学　三辻利一両氏の詳細な分析をいただいた。したがってここでは，重複を避け埴輪以外の遺構・遺物について概要を述べることとする。

縄文時代　確認した遺構・遺物は土坑１基，土器片６点，石鏃２点のみであった。土坑は出土遺物もなく，外に同類の遺構が確認できなかったことからその性格については不明と言わざるを得ない。土器片については細片のものや摩滅しているものがあり，撹乱等で移動した可能性も示唆できる。その結果，当遺跡おいては縄文人の生活の痕跡を認めることはできたものの，長期的な集団生活の場ではなかったものと考えられる。

弥生時代　確認した遺構・遺物は住居跡６軒，後期（二軒屋式・十王台式）の壷・土器片などである。住居跡は完掘できたものは１軒のみで，あとは調査区外の延びていたり，撹乱等に切られていたものなどであった。唯一完掘できたＳＩ－４は，平面形隅丸方形で，規模は4.0×3.4m，主柱穴は４本で，南壁中央に出入り口の施設と考えられるピットが確認された。炉は中央に設けられていた。住居跡は３号墳を挟んで東側に４軒，西側に２軒が検出され，東側の低地を望むような位置に立地しているものと考えられる。遺物はＳＩ－２から略完形の壷１点のほか口辺部・頸部・底部などの約１／３の個体が纏まって，ＳＩ－５から口辺部を欠損した壷１点が出土した。その他は，外の住居跡の埋積土中や古墳の周湟埋積土中から小片で出土した。壷は口辺部から頸部にかけて，櫛描文によって区画され，波状文が充填されるものや，複合口辺で縄文原体を押捺するものが認められた。体部には付加条１・２種の縄文が施文されている。底部は平底で布目痕・木葉痕などが認められた。土器の中には胎土に金雲母を含み，色調が灰白色をするものなど，十王台式と考えられるものがある。

本遺跡の遺構は１～５次調査で住居跡16軒，土坑１基確認されており，今次調査と合わせると住居跡は20軒となった。前回の調査区は出土遺物から，中期から後期の終わりごろにかけて遺構が存続したと考えられる。今回の調査では住居跡の時期は後期の中ごろに求めることができる。今次調査区と前回の調査区の間には小規模な谷が存在したであろうことは地形図から読み取れ，そのことから集落は前回の調査区周辺で派生し，後期段階に至って谷を隔てた今次調査区まで延びたと考えられる。

古墳時代　確認した遺構・遺物は古墳３基（前方後円墳１，円墳２基），小石室２基，土坑９基，埴輪棺１基などである。

３号墳　南面する前方後円墳で，周湟部のみの調査である。前方部先端は調査区外となるが，周湟を含めた全長は45m以上と推定される。墳丘に埴輪の樹立や葺石は認められなかった。残存する封土による墳丘の裾部は耕作により削られてはいるが，構築当初より周湟との間にテラスが設けられていたと推察される。埋葬主体部は推定位置が調査区外にあり，明確にできなかった。しかし，低い前方部に対し明確な高まりを示す後円部が，南から中央に向かって大きく抉られており，この部分に横穴式石室が構築されていたと推察される。また，破壊の痕跡が地表面で止まっており，墳丘が比較的高かったと推定されることから，半地下ではなく地表に構築されていたものと考えられる。周湟内より出土の須恵器甕類から本墳は６世紀終末前後の築造と考えられる。

５号墳　周湟を含めた径が32～39m程の円墳と推定されるが，部分的な調査であり，墳形・規模も推測の域を出ない。なお，出土の埴輪及び埴輪棺の詳細はⅣ・Ⅴ章を参照されたい。埴輪の年代観から本墳は６世紀中頃の築造と考えられる。

今回の調査位置は本墳の南東部と推定され，ここに小片ながら馬・人物（馬子？）　等の形象埴輪が認められた点は壬生町富士山古墳の埴輪列との共通性が認められる〔君島1998〕。また，周湟の内側はほとんど調査でき

なかったが，旧表土の遺存状況から封土による墳丘との間に初源的なテラスが設けられていた可能性が高い。

埋葬主体部についても地区外に想定され，全く手がかりは得られなかったが，ほぼ同時期と見られる小山市飯塚古墳群29・42号墳，宇都宮市宮下古墳等で横穴式石室が採用されている（鈴木　2001，中村　2004）ことから本跡もその可能性を考慮できよう。

６号墳　南端部の周湟の極一部を調査し得たにすぎず，墳形・規模などは明確でないが，周湟を含めた径が18mほどの円墳と推定した。周湟内からも遺物の出土がなく築造年代は明確にしがたいが，周湟の規模から終末期の古墳かと推定される。

古墳群の築造は，主体部の形態，埴輪を樹立し，多数の埴輪棺を持つ２号墳が，古墳群の中で，もっとも早い時期に築造されたものと考えられる。その次に，埴輪を樹立し，埴輪棺を持つ今次調査した５号墳がつづく。その後には，前回の調査では時期を特定できてはいなかったが，墳形・規模，埴輪を持たないことなどから１号墳がつづくものと考えられる。この後には，本村古墳群で唯一の前方後円墳である３号墳が，埴輪をもたず主体部に横穴式石室を導入したであろうことから考えて当てはまるものと推考され，その後，周湟の極小な６号墳が想定される。４号墳については，未調査なため時期を特定することができない。

土坑群　古墳の周湟外壁もしくはその周辺より計９基確認し，ＳＫ－８以外はいずれも長辺に抉り込みを持つ。所謂「抉り込み土坑」と呼ばれるもので，それぞれ古墳の築造後やや時間を経て営まれたと考えられる。遺物の出土は少ないが，ＳＫ－12よりほぼ完形の土師器坏，ＳＫ－17より金銅製耳環１点が出土し，副葬品と考えられる。

小石室　大・小２基確認したが，２号は遺存状態が悪く，存在を確認したに過ぎない。大きい１号は長さ214cm，幅63cmで壁を川原石小口積みしているが，奥壁の根石のみは比較的大ぶりの石を長軸に直交するよう据えていた。羨道にあたる部分の表現は見られなかった。遺物が全くなく構築年代は不明であったが，奥壁部根石の状況から，終末期の所産と考えたい。

古代　遺構は，５号墳の周湟からテラス部分で確認したＳＫ－14　１基のみである。南北約130cm，東西74cmの長方形と推定される。形状・埋積土から古代としたものの，出土遺物がないため時期を特定することができない。遺物は３号墳の周湟埋積土中より古代末の土師器の高足高台坏が出土した。しかし，遺物が伴うべき遺構が確認されなかったことや，同種の遺物が他に確認されていないことから，その性格については不明と言わざるを得ない。

中・近世　遺構は，方形竪穴，土葬墓，土坑が各１基ずつ確認されたのみである。

方形竪穴　３号墳の周湟内で確認し，平面は360×236cmの長方形である。撹乱が著しく，出土遺物もなかったため，時期を特定することはできない。

土葬墓　開口部が142×109cmの楕円形をし，北西方向に抉り込んだ横穴を設けている。ここより，人骨が出土したが，遺存状態が悪く，年齢・性別等は不明である。また，出土遺物も無かった。

土坑　ＳＫ－13は、径100×88cmの円形をする。遺物は陶器灰釉平鉢片が出土しているが，同様の遺構が確認されないため，その時期・性格は不明である。

今次調査の結果，本遺跡は弥生時代の集落遺跡，古墳時代後期の古墳群であることが確認された。古墳においては，今回，墳丘の消滅した古墳２基と，墳丘を持たない小石室が新たに確認されたことによって，本地域には複数の未確認古墳があることが推定できる。

本書の上梓にあたり，古墳の被葬者を初め当地に眠る多くの古代人の霊の安らかなることを念じます。また，調査に対してのご理解を賜った社会福祉法人正富福祉会（理事長野澤富雄氏），設計担当の大島一洋氏，出土埴輪に関して玉稿を賜った，井　博幸・三辻利一両先生，埴輪の写真を撮影いただいた大門直樹先生，そして調査から整理作業に対してご助力下された多数の方々に厚く御礼申し上げて擱筆する。

報告書抄録

ふ り が な	ほんむらこふんぐん・ほんむらいせき
書　　名	本村古墳群・本村遺跡
副　書　名	正富福祉会特別養護老人ホーム「憩いの森西原」建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ名	宇都宮市埋蔵文化財調査報告書　第58集
編 著 者 名	水野順敏・柏崎広伸・井　博幸・三辻利一・三輪孝幸
編 集 機 関	㈱日本窯業史研究所
所　在　地	〒324-0611　栃木県那須郡那珂川町小砂3112　TEL 0287-93-0711
発 行 機 関	宇都宮市教育委員会
所　在　地	〒320-8540　栃木県宇都宮市旭１丁目１番５号　TEL 028-632-2768
発行年月日	2007（平成19）年３月１日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所　在　地	コード		北　緯	東　経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	°　′　″	°　′　″			
本村古墳群 ・本村遺跡	栃木県宇都宮市 西原町13番地 1	09201	№3272 3275	世界測地系 36° 32′ 17″ 日本測地系 36° 32′ 5″	世界測地系 139° 52′ 59″ 日本測地系 139° 53′ 11″	2006.6.29 ～ 2006.9.11	1,668m²	特別養護老人ホーム建設に伴う事前調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
本村古墳群 ・本村遺跡	古墳群 集落	縄文 弥生 古墳 古代 中・近世	住居跡　6軒 古墳　3基 埴輪棺　1基 小石室　2基 土坑　12基 土葬墓　1基 方形竪穴　1基	縄文土器・石器（石鏃・フレーク） 弥生土器（壷）・土製紡錘車 土師器（坏・高台坏）・須恵器（ハソウ・平瓶・提瓶・甕） 円筒埴輪・朝顔形円筒埴輪・形象埴輪（人物・馬） 耳環	弥生時代では後期の集落を確認し，古墳時代では後期を中心とした古墳群を調査した。

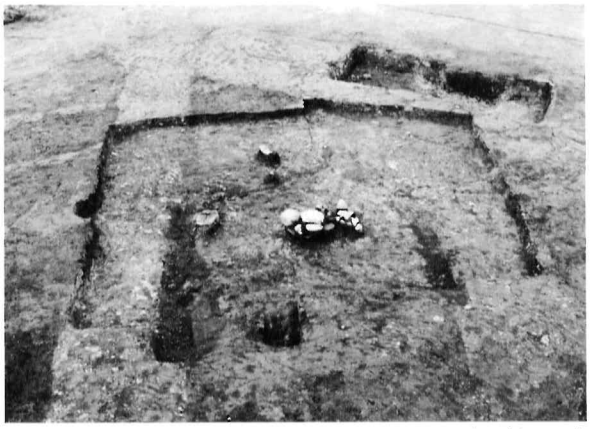
A．調査区全景（北から）

B．調査区全景（北から）

C．調査区全景（北から）

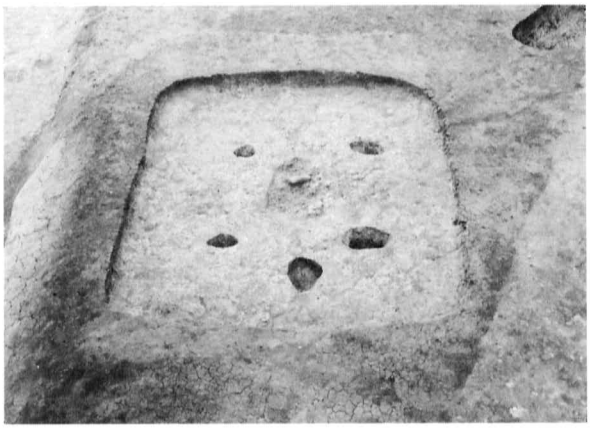
D．調査区全景（東から）

E．ＳＩ－１完掘（東から）



F．ＳＩ－２完掘（南から）

G．ＳＩ－３完掘（南から）



H．ＳＩ－４完掘（南から）

図版２

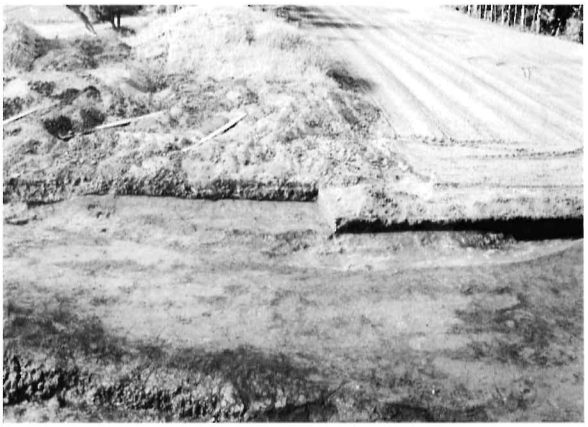
Ａ．ＳＩ－５完掘（北から）

Ｂ．３号墳北側周湟（北東から）

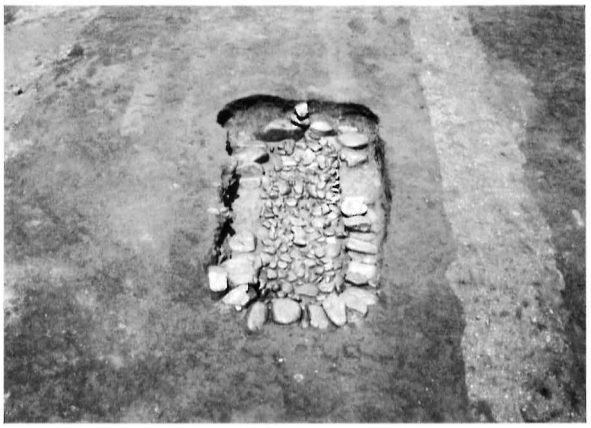
Ｃ．３号墳東側周湟（北から）

Ｄ．５号墳完掘（南から）

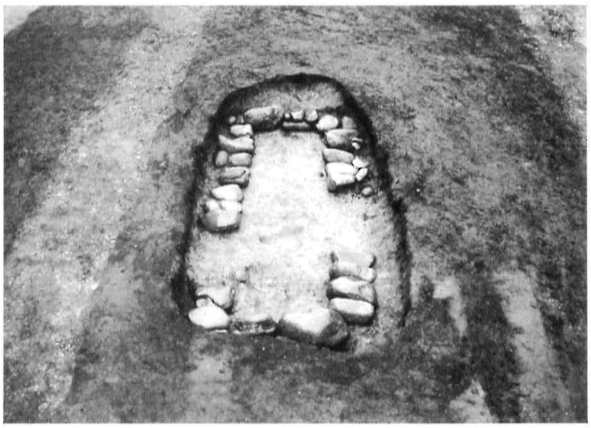
Ｅ．５号墳遺物出土状況（南東から）



Ｆ．６号墳完掘（南から）



Ｇ．１号石室完掘（南から）



Ｈ．１号石室根石（北から）

A．埴輪棺確認状況（北から）

B．埴輪棺検出状況（北から）

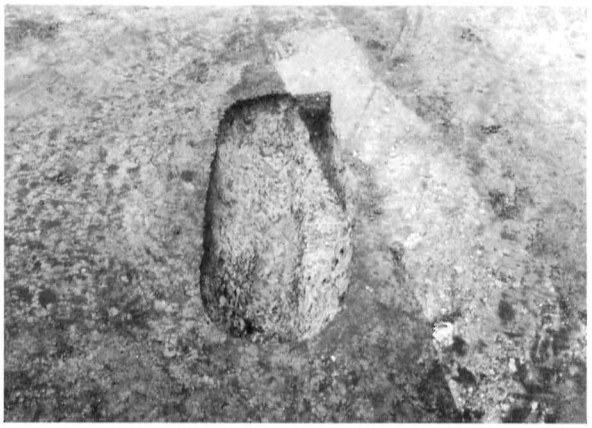
C．ＳＫ－４完掘（東から）

D．ＳＫ－４人骨出土状況（東から）

E．ＳＫ－５完掘（南から）

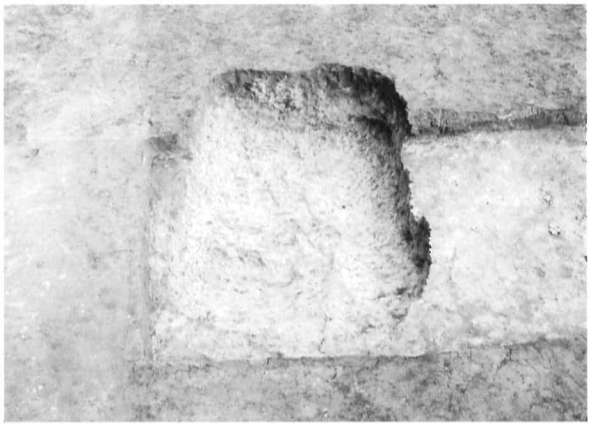
F．ＳＫ－６完掘（南から）

G．ＳＫ－７完掘（東から）

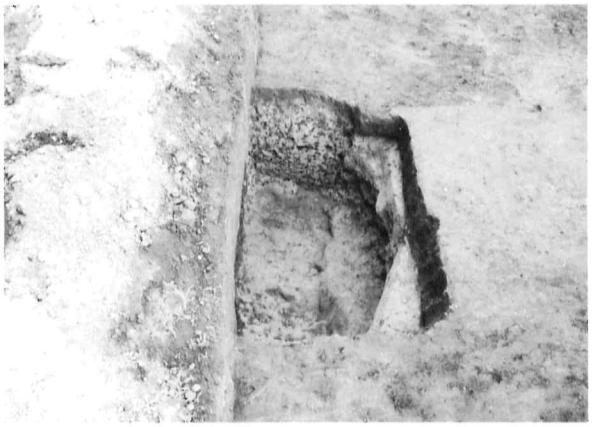


H．ＳＫ－８完掘（南から）

図版 4



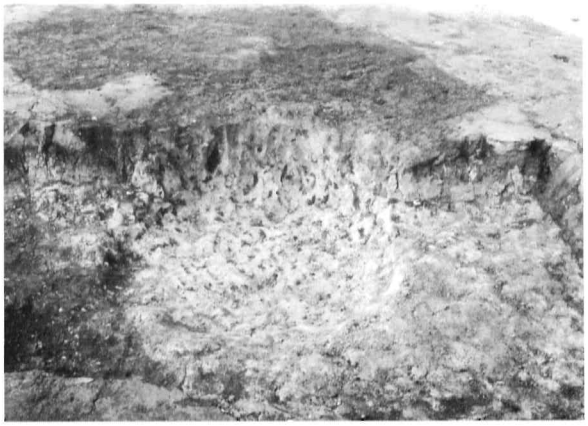
A．ＳＫ－９完掘（南から）



B．ＳＫ－11完掘（北から）

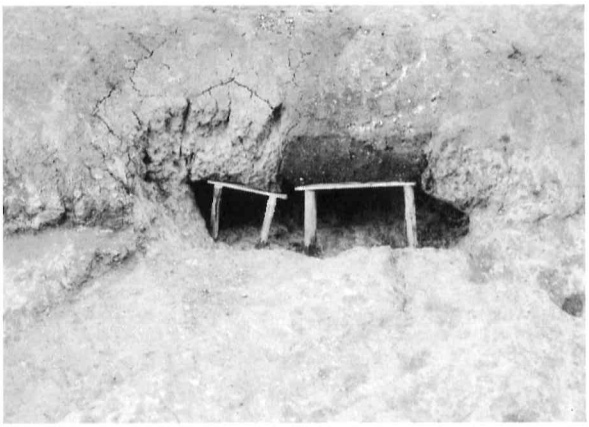
C．ＳＫ－12完掘（西から）

D．ＳＫ－12遺物出土状況（西から）

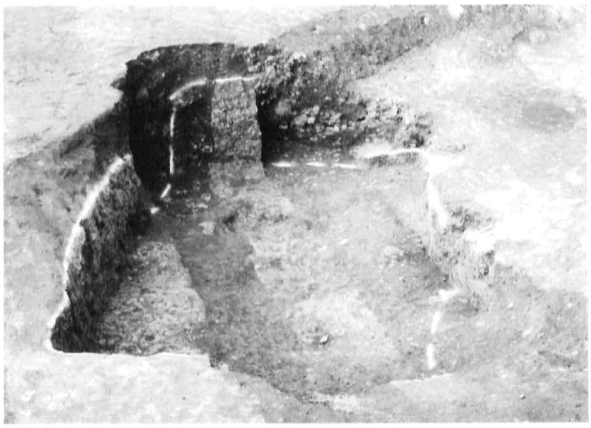


E．ＳＫ－13完掘（南から）

F．ＳＫ－14完掘（南から）

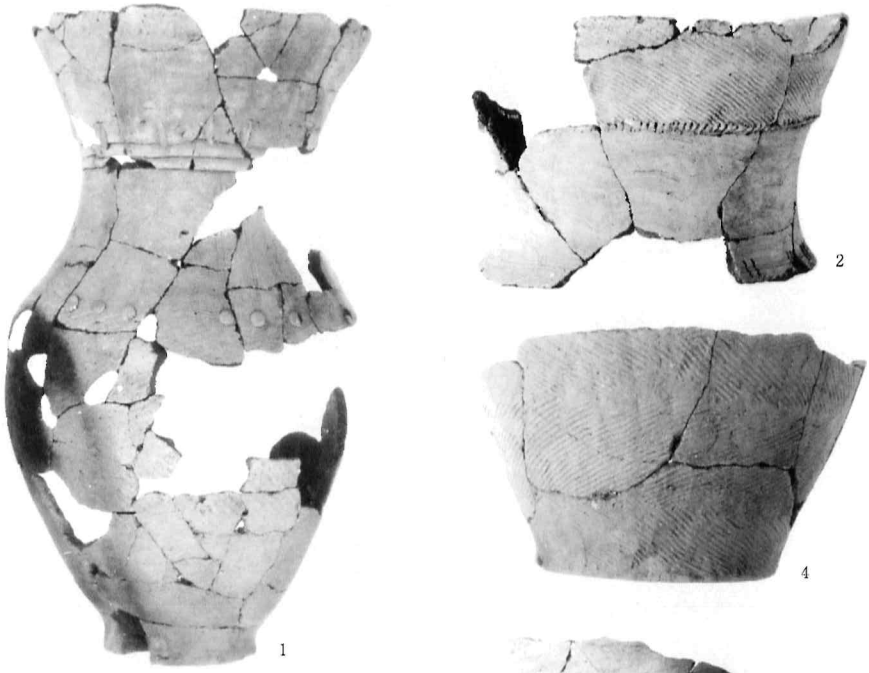


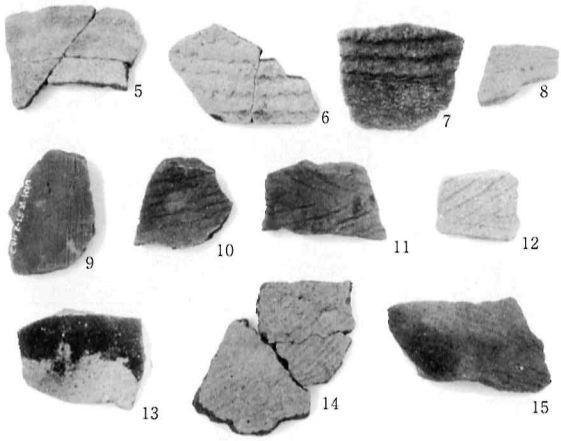
G．ＳＫ－17完掘（南から）



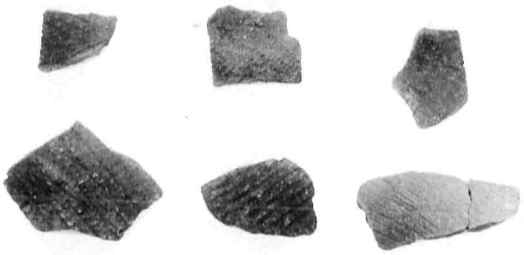
H．ＳＸ－１完掘（南から）

縄文

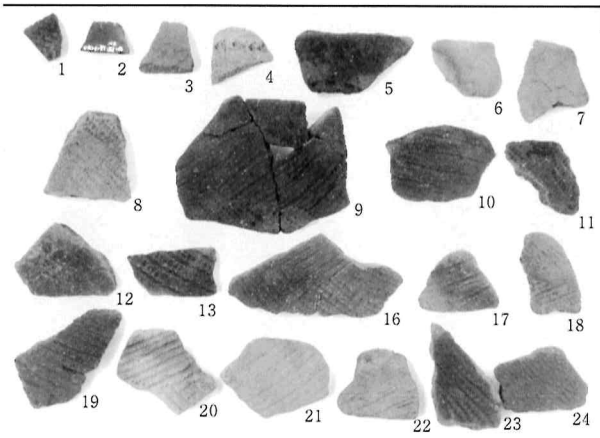




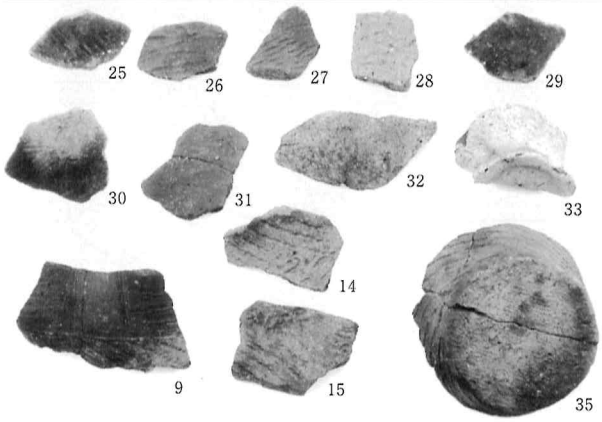
SI—2



SI—3

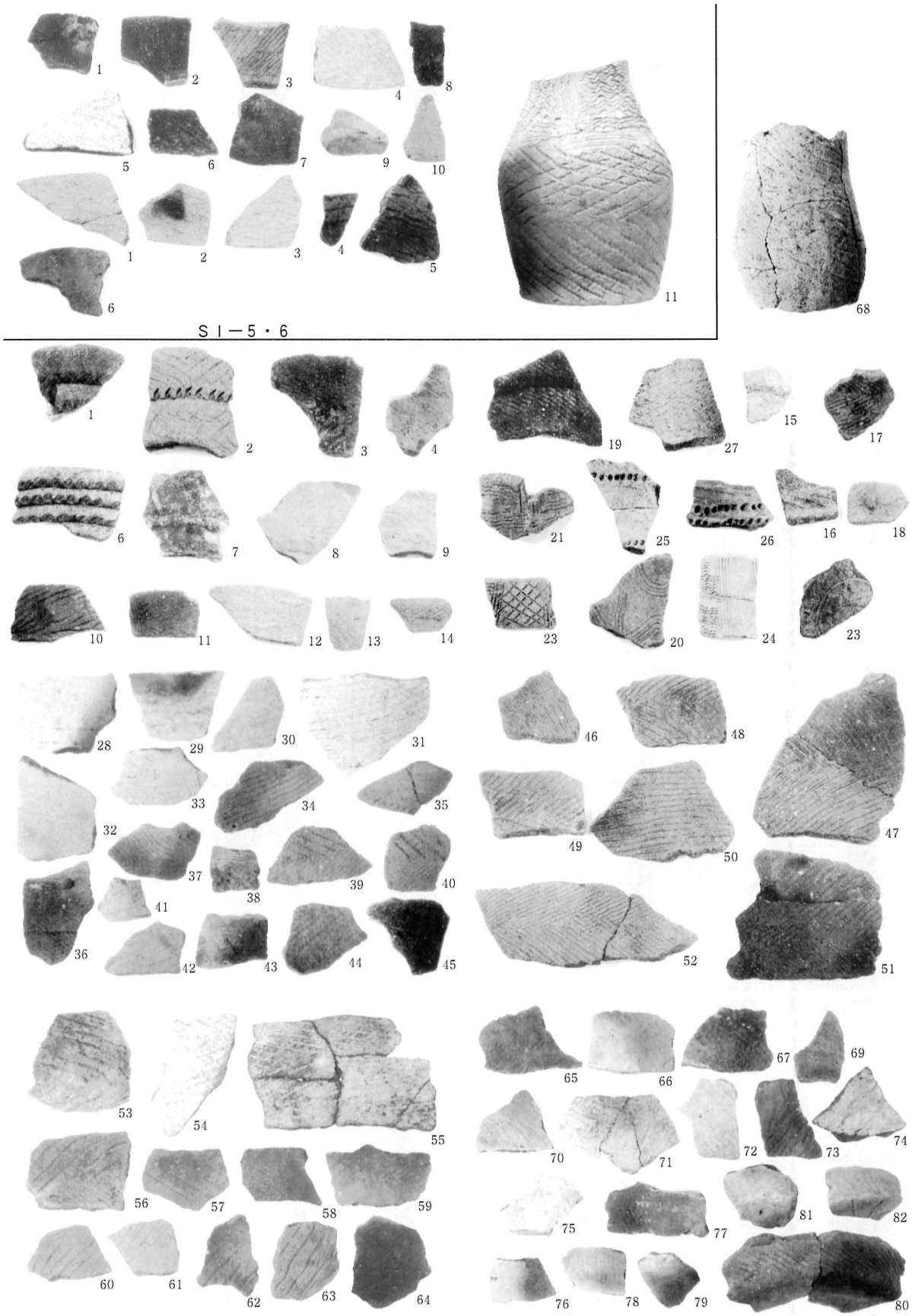


SI—4

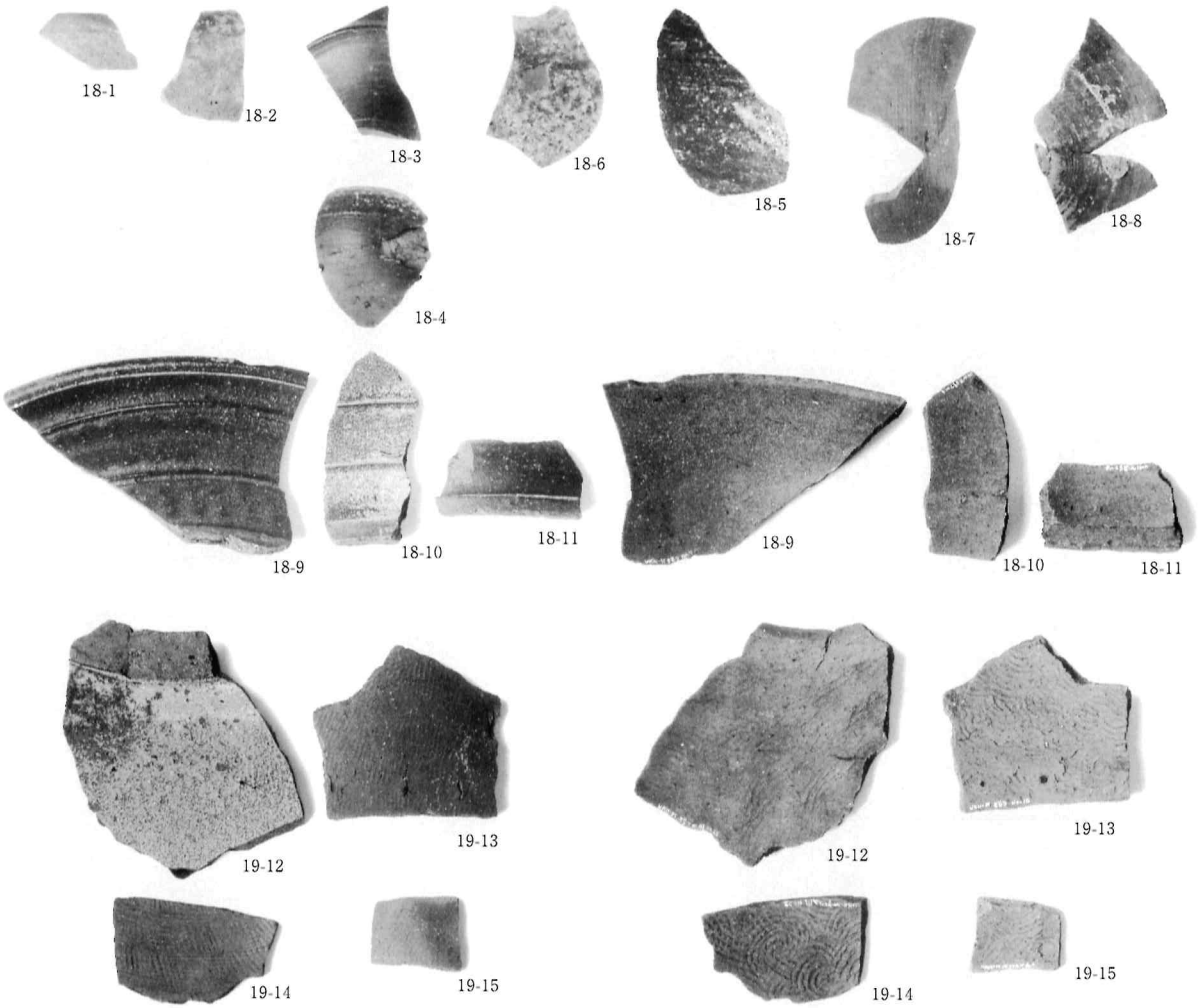


出土遺物

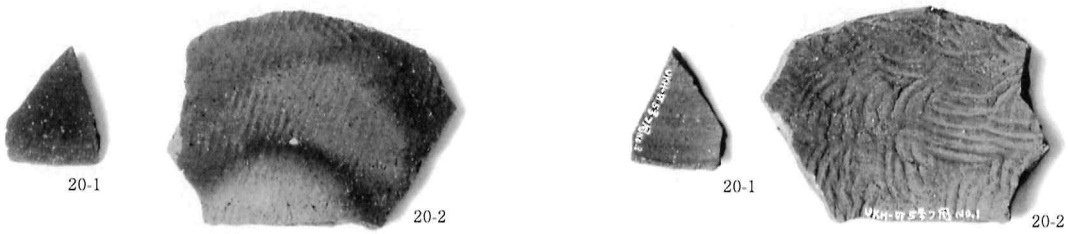
図版６



調査区内出土遺物（弥生）



3 号墳



5 号墳

土坑出土遺物（古墳）　　調査区内出土遺物（古代）

図版 8

1

3

2

4

朝顔形円筒埴輪（約 1/4 、大門直樹 撮影）

5

8

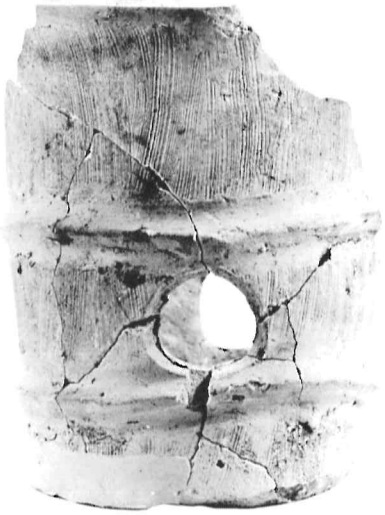
7

6

13

普通円筒埴輪（約 1/4 、大門直樹 撮影）

図版10

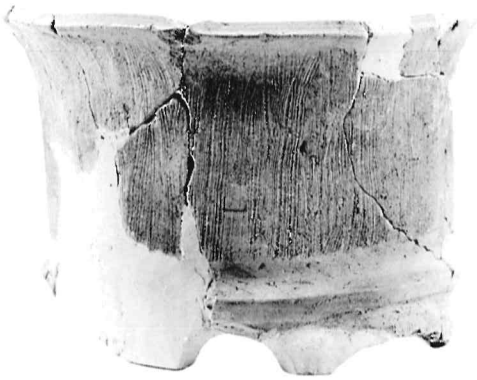


10

14

12

17



11

15

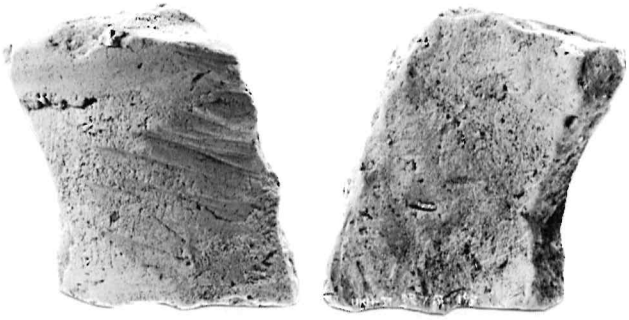
普通円筒埴輪（約1/4、大門直樹 撮影）

18

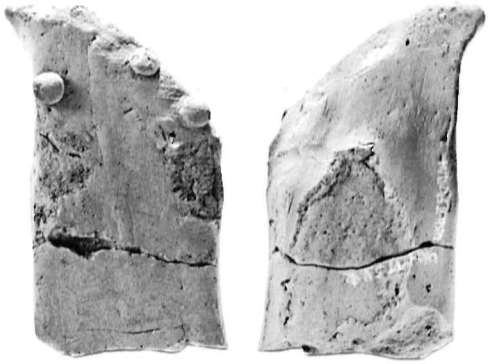
19

21

20



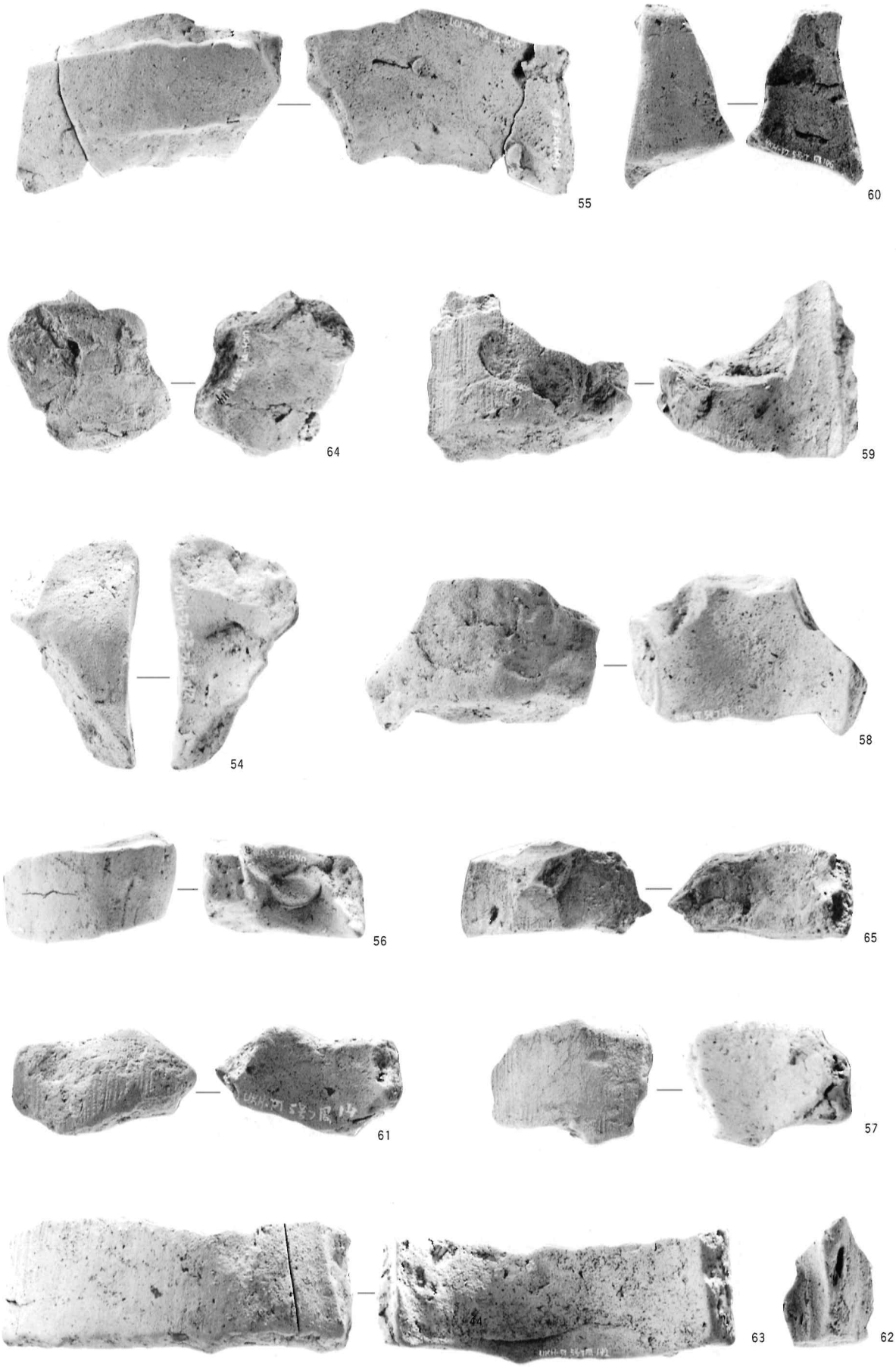
44



53

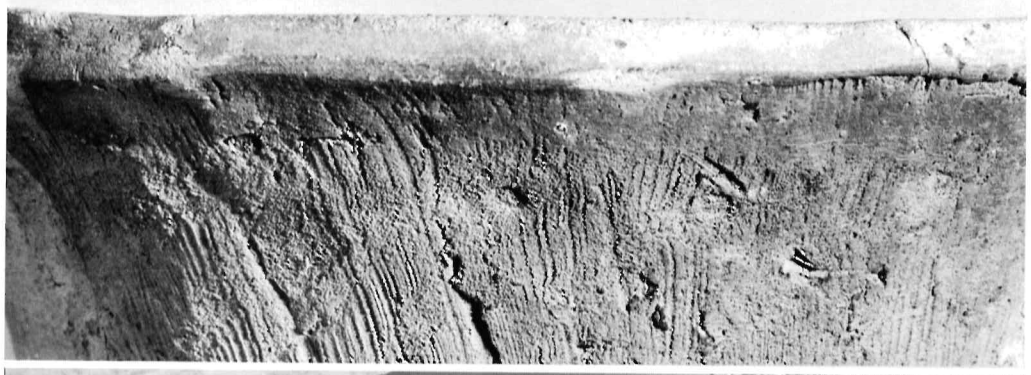
普通円筒埴輪（約1/4）、馬形埴輪（53）（大門直樹 撮影）

図版12

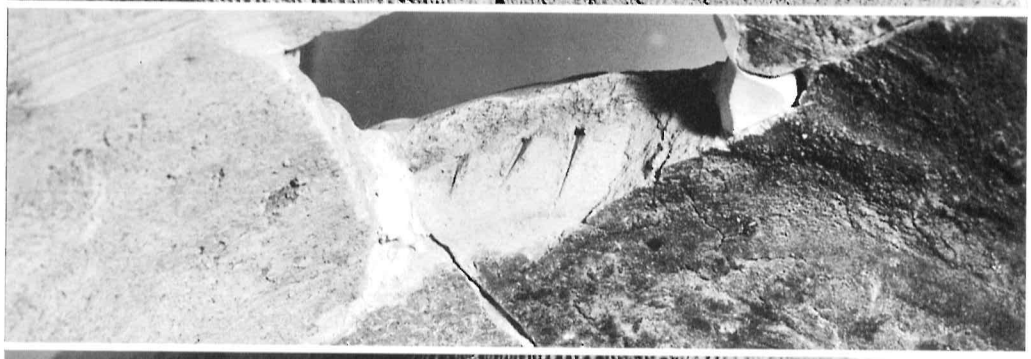


形象埴輪（大門直樹 撮影）

口唇部直下の円形刺突
(20)

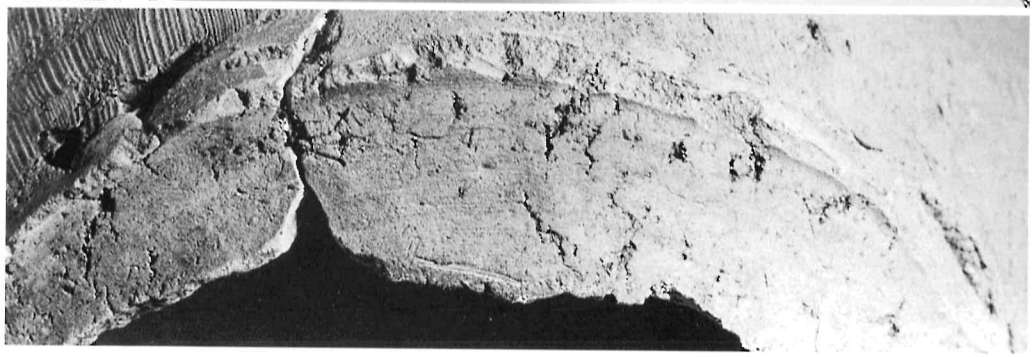


口唇部直下の円形刺突
(19)



朝顔形円筒頸部上端の
切込み(1)

頸部上端の剥離と切込
みに充填された粘土(3)



切込みを伴わない朝顔
形円筒の頸部上端(4)

円筒埴輪の細部拡大（大門直樹 撮影）

宇都宮市埋蔵文化財調査報告書第58集

本村古墳群・本村遺跡

平成１９年３月発行

編　　集　㈱日本窯業史研究所
（那須郡那珂川町小砂3112）
TEL(0287)93-0711

発　　行　宇都宮市教育委員会文化課
（宇都宮市旭１丁目１番５号）
TEL(028)662-2764

印　　刷　下野印刷㈱
（宇都宮市宝木町１－28－11）
TEL(028)622-6953